

(8) 貝 類

【 掲載種の解説（貝類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、生息環境区分（陸産・淡水産・内湾産）、分類上の位置を示す目名（上科名）、科名等を各頁左上に記述した。目または上科・科の範囲、名称、配列は、レッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2019」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。一部の異名は（ ）内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述し、画像を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【貝類 執筆責任者】

木村昭一 早瀬善正

2009年版の陸産貝類の執筆責任者は、凡例の後に木村昭一・原田一夫の連名で記されていて、各種の執筆者は明らかでなかったが、今回は各種解説の末尾に明記した。なお、今回の陸産貝類の解説文のうち原田一夫執筆旧原稿（2009年版）は、分類・評価区分に変更が必要な場合は該当する部分を改訂したが、その他の部分はそのまま再掲載し、末尾に「2009年版（原田）を一部修正」と記載した。

【貝類 調査協力者】

調査にあたり多くの方に協力していただいたが、次の方々に現地調査、標本提供、資料参照等で協力していただいた。

浅井 功	浅香智也	浅田 要	伊澤伸恵	伊藤颯真	岩田明久	大貫貴清
大平仁夫	緒方清人	河合秀高	川瀬基弘	河辺訓受	木村妙子	木村仁美
久保弘文	佐藤達也	鈴木秋男	多田 昭	出口 敏	永井 貞	中山 清
西 浩孝	西村俊明	長谷川道明	林 誠司	福田 宏	藤岡エリ子	増田 修
松岡敬二	守谷茂樹	吉川 尚				

愛知県水産試験場 愛知県立三谷水産高等学校 株式会社東海アクアノーツ 蒲郡市立竹島水族
汐川干潟を守る会 竹島漁業協同組合 豊橋市立自然史博物館 豊浜漁業協同組合
名古屋貝類談話会 日本貝類学会 東幡豆漁業協同組合 日間賀島漁業協同組合
鳳来寺山自然科学博物館 三重大学生物資源学部 三谷漁業協同組合

（敬称略）

カワネジガイ *Camptoceras hirasei* Walker

【選定理由】

河川の下流域や平野部の湖沼のヨシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する（紀平，1990）。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまった。河川下流域の環境がよく保全されていた 1960 年代にすでに本種は、生息地が少なく珍しい種と認識されていた（愛知県科学教育センター，1967）。1970 年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが（中山，1978；木村，1994）、再発見されていない。小型種であるので見落とされている可能性もあるが、50 年以上県内では生息が確認されていないこと、県内の河川下流域の壊滅的な現状を考えると絶滅と評価された。

【形態】

貝殻は非常に特異な形態で、殻は細長く、左巻きで螺管は、はずれて巻く。殻長は 6–10 mm と小型。



豊橋市牛川町蒲池, 1941 年, 中山清採集

【分布の概要】

【県内の分布】

木曽川水系五条川の須ヶ口付近（愛知県科学教育センター，1967）、豊川水系豊橋市蒲池（中山，1978）で生息していた記録があるが、現生息地はない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。本州から四国にかけて分布するが、産地は局限されている（湊，1993）。

【生息地の環境／生態的特性】

河川の下流域や平野部の湖沼のヨシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する（紀平，1990）。前述したような本種の生息地についての環境記述が今までの通例で、詳細な生態学的な研究も行われることもないまま、極めて採集例の少ない絶滅危惧種となってしまった。近年、福田・森（2016）により本種の生活史や生息環境の詳細な観察が行われた。それによると、本種の生息には水生植物の多い止水域だけではなく隣接する湿地陸域環境の保全の重要性が指摘された。

【現在の生息状況／減少の要因】

現生息地はない。

【特記事項】

水産資源保護協会（1995）では絶滅危惧にランクされている。岐阜県（2010）では絶滅危惧Ⅰ類にランクされている。

【引用文献】

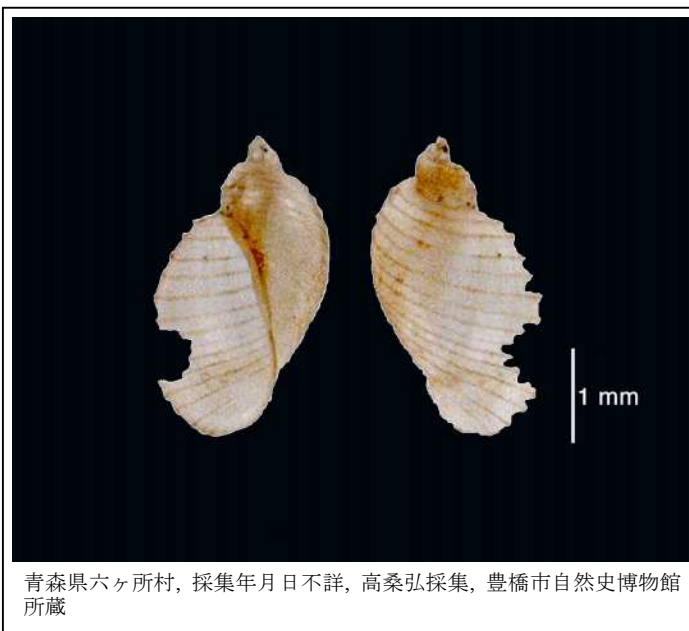
- 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物. 222pp.
福田 宏・森 生枝，2016. 岡山県自然保護センター敷地内の田尻大池で 21 年ぶりに確認された絶滅危惧種カワネジガイ(腹足綱：汎有肺類：ヒラマキガイ科)，ならびに同種の棲息環境と水陸両棲生活に関する考察. 岡山県自然保護センター研究報告, (23): 1–12.
岐阜県，2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
紀平 肇，1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. 131pp. たたら書房.
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第 33 報): 14–34. 全国高等学校水産教育研究会.
湊 宏，1993. 文献に見るカワネジガイの記録. 南紀生物, 35 (2): 154–156.
中山修一，1978. 名古屋貝類談話会第 7 回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, (4): 4–5.
水産資源保護協会，1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

(木村昭一)

ヒダリマキモノアラガイ *Culmenella rezvoji* (Lindholm)

【選定理由】

池沼でヨシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する(紀平, 1990)。カワネジガイと同時に採集されることが多く、同様の生息環境を好むと考えられる(水産資源保護協会, 1995)。河川下流部や平野部の湖沼の環境がよく保全されていた1960年代に、すでに本種は生息地が少なく珍しい種と認識されていた(原田一夫氏私信)。1970年後半より本種の記録された場所を再調査した例があるが(中山, 1978; 木村, 1994)、再発見されていない。小型種であるので見落とししている可能性もあるが、50年以上県内では生息が確認されていないこと、県内の河川下流域の壊滅的な現状を考えると絶滅と評価された。



【形態】

殻長は約 6 mm と小型で、殻は左巻き。カワネジガイのように螺管がはずれて巻くことはないが、各螺層はねじれて、縫合部は強くくびれる。殻口は大きく広く開く。殻表には明瞭な螺条が多数ある。

【分布の概要】

【県内の分布】

木曽川水系五条川の須ヶ口付近(原田一夫氏私信)、豊川水系豊橋市蒲池(中山, 1978)で生息していた記録があるが、現生息地はない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。本州(青森県から大阪府)に分布していたが、産地は局限され、近年の記録では生息地は2カ所しか確認されていない(紀平, 1990; 水産資源保護協会, 1995)。

【生息地の環境／生態的特性】

河川の下流域や平野部の湖沼のヨシ帯やマコモ、カナダモなどの沈水植物群落のある場所に生息する(紀平, 1990; 水産資源保護協会, 1995)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現生息地はない。

【特記事項】

水産資源保護協会(1995)では絶滅危惧にランクされている。

【引用文献】

- 紀平 肇, 1990. 琵琶湖淀川淡水貝類. 131pp. たたら書房.
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
中山修一, 1978. 名古屋貝類談話会第7回淡水貝観察調査会の記. かきつばた, (4): 4-5. 名古屋貝類談話会.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

(木村昭一)

オバエボシガイ *Inversidens brandti* (Kobelt)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い（木村，1994：木村・中西，1997）。県内では1970年代に絶滅したと考えられる。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては最も小型種で殻長は約5 cm。殻長に比べて殻高が大きく、輪郭は方形に近い。殻長付近には弱い縮緬状の彫刻がある。左右両殻とも三角形の1主歯を持ち、後側歯は強い。収足筋痕は前閉殻筋痕とつながる。



豊橋市牛川町牟呂用水, 1960年代, 中山清採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター, 1967）、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、1970年頃に豊川市の牟呂用水で生貝が採集されたのを最後に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所さえ見つけることができなかった。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州北部の河川下流域に分布する。琵琶湖以外では湖沼には分布しない。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと思われる。

【特記事項】

県内では絶滅してしまったが、本種の分布の東限に当たる。水産資源保護協会（1997）では「希少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。岐阜県（2010）では絶滅危惧Ⅰ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタデボシ属の1種. ちりぼたん, 27 (2): 41-48. 日本貝類学会.
水産資源保護協会, 1997. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅳ), 126pp.

(木村昭一)

ヨコハマシジラガイ *Inversiunio jokohamensis* (Ihering)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い(木村, 1994: 木村・中西, 1997)。県内では1970年代に絶滅したと考えられ、絶滅と評価された。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で、殻長は約7 cm。殻長に比べて殻高がやや大きく、輪郭は長方形。殻長付近から殻の中央部にかけて逆V字型のさざなみ状の彫刻がある。主歯、後側歯ともに強い。マツカサガイ *Pronodularia japonensis* (Lea)と酷似しているため長らく混同されていたが、木村・中西(1997)で初めて三重県・岐阜県産本種のグロキディウム幼生や殻の形態が検討され、マツカサガイではなくオトコタテボシガイ属の1種として記録された。その後、Kondo(1998)の分類学的な再検討によってヨコハマシジラガイと種名が確定した。マツカサガイとは逆V字状の彫刻が弱く殻頂部では顆粒状になることから区別される。



豊橋市牛川町牟呂用水, 1960年代, 中山清採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述の通りマツカサガイと混同されていたため愛知県からの産出記録はない。豊橋市自然史博物館所蔵の高桑コレクションにマツカサガイと誤同定されたヨコハマシジラガイが存在する(豊橋市自然史博物館, 1994)。この標本は中山清氏によって1970年頃に豊川市の牟呂用水で採集された。これを最後に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所さえ見つけることができなかった。

【国内の分布】

日本固有種。北海道から東海地方の河川下流域に分布する。湖沼には分布しないが、琵琶湖には近似種のオトコタテボシが分布する。また、琵琶湖東岸の小河川から九州北部にかけて近似種のニセマツカサガイが分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では絶滅したと評価された。

【特記事項】

上述のようにオトコタテボシガイ属には3種あるが、それぞれが貝殻やグロキディウム幼生の形態が極めて近似していて、それぞれが独立種なのか疑問が残る。それらの分類学的再検討が望まれる。岐阜県(2010)では絶滅危惧I類にランクされている。

【引用文献】

岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.

(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一・中西尚史, 1997. 東海地方に分布するオトコタテボシ属の1種. ちりばたん, 27(2): 41-48. 日本貝類学会.

Kondo, 1998. Revision of the Genus *Inversiunio* (Bivalvia: Unionidae), Venus 57(2): 85-94.

豊橋市自然史博物館, 1994. 高桑弘氏寄贈貝類目録 1 二枚貝 Part2, 豊橋市自然史博物館資料集 第2号 31pp.

(木村昭一)

カタハガイ *Obovalis omiensis* (Heimburg)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。その中でも本種は特に水質の良い場所を好み、本種が生息する場所では他のイシガイ科貝類も多く見られる場合が多い（木村，1994：木村・中西，1997）。県内では1970年代に絶滅したと考えられる。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で、生息場所によって大きさに変異があるが、県内産個体の殻長は約8 cm。殻長は殻高に比べて大きく、輪郭は長方形に近い。殻幅が小さくやや膨らみは弱い。後側部にやや大きく強い分岐した肋状の彫刻がある。左右両殻ともやや強い三角形の1主歯を持つが、後側歯は無い。この特徴が片歯（かたは）という和名の由来である。



豊橋市牛川町牟呂用水，1960年代，中山清採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで生息が確認されていたが（愛知県科学教育センター，1967）、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、1970年頃に同所的に分布することが多いオバエボシガイと共に絶滅したと思われる。1998年からの現地調査でも再発見を試みたが、本種が生息する可能性のある場所さえ見つけることができなかった。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州北部の河川下流域に分布する。湖沼には分布しない。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では絶滅したと思われる。

【特記事項】

水産資源保護協会（1995）では「希少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。岐阜県（2010）では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県，2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
木村昭一，1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・中西尚史，1997. 東海地方に分布するオトコタデボシ属の1種. ちりぼたん, 27 (2): 41-48. 日本貝類学会.
水産資源保護協会，1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

(木村昭一)

タケノコカワニナ *Stenomelania crenulata* (Deshayes)

【選定理由】

本種は河口部上部の汽水域泥底に生息し、特に本種の分布北限に近い東海地方では、護岸工事の影響が少なく、比較的緩やかな流れ、もしくは止水のワンド的な環境に生息する。西南日本各地に生息記録があるが、現存する産地は著しく減少した。和田・他 (1996) では矢作川河口域の生息記録があげられているが、1997 年以降の 20 回以上に及ぶ調査でも、汽水域の貝類としては大型である本種の死殻さえ確認できなかった。愛知県科学教育センター (1967) で生息記録のある豊川河口域でも、死殻さえ確認できなかった (松岡・他, 1999)。三河湾沿岸の河口域 11 カ所を詳しく調査した結果でも、生息は確認できなかった (木村・木村, 1999)。その後の調査でも引き続き生息が確認できない。従って絶滅と評価された。

【形態】

殻長約 60 mm の塔型で殻はやや厚く、大型。成長にともなって殻頂部は欠落する。殻表はほとんど平滑で黒色。蓋は卵形で革質。



三重県員弁川河口域, 2011 年 1 月 25 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内での生息場所は現在存在しない。

【国内の分布】

日本固有種。本州関東地方以南九州までに分布する。現在では三重県員弁川河口域 (伊勢湾) が分布の北限の可能性が高い (2011 年に軟体部と蓋の残った死亡個体 1 個体が採集された; 図示標本)。三重県志摩半島でも個体数は著しく少ない。紀伊半島 (三重県南西部から和歌山県中南部河口域; 木村未発表試料)、四国太平洋岸、九州南部・西部 (福田・木村, 2012) には健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境が護岸工事などで破壊された。生息場所が残された場所でも生息が確認されなくなった要因については不明。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
福田 宏・木村昭一, 2012. タケノコカワニナ, p. 33.in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, (54): 44-56.
松岡敏二・木村妙子・木村昭一・三谷水産高等学校増殖部・山口啓子・高安克己, 1999. 豊川下流域の貝類相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (9): 15-24
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

マルテンスマツムシ *Mitrella martensi* (Lischke)

【選定理由】

本種は内湾の泥質干潟からアマモ場周辺の潮下帯にすむ。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は 1960 年代には三河湾奥（渥美湾）の干潟で普通に採集された（愛知県科学教育センター，1967）が、近年では死殻もほとんど発見できない（藤岡・木村，2000）。最も近年における現生個体の死殻採集報告（知多湾南部で採集）は 1970 年代まで遡らなければならない（中山，1980）。現在残されている生貝標本は 1960 年代採集であり、50 年以上生息が確認されていない。以上のことから、今回県内では絶滅したと評価された。

【形態】

殻長約 15 mm の長い紡錘型で、十分に成長すると殻口は肥厚し、内唇にいぼ状突起を生ずる。殻表は黄褐色で、不規則な褐色の縦帯をもつ。現在有明海に生息している個体（図右から 2, 3 個体目）は韓国産個体（図右）と同様、殻は大型で殻表の模様が大きく、模様の形や色彩に変異が大きい。かつて三河湾に生息していた個体（図左下）は小型で細長く、殻表の模様も細かく色彩変異も少ない。



【分布の概要】

【県内の分布】

県内では絶滅し、現在死殻でさえ採集できる場所はほとんどない。現生個体の死殻採集報告も 1970 年代が最後である（中山，1980）。2000 年代にも蒲郡市三河大島沖（図左上）や汐川干潟で死殻が少数採集されたが、生時の色彩は全く残されておらず、現生個体の死殻ではなく化石の可能性もある。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸に分布し、日本では北海道南部から九州に分布する（福田・他，2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内より絶滅した。減少の理由は【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏・久保弘文・木村昭一，2012. マルテンスマツムシ, p. 65. in：日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会，秦野。
 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物. 222pp.
 藤岡えり子・木村妙子，2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告，(10): 31-39.
 中山 清，1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた，(6): 10-12. 名古屋貝類談話会。

（木村昭一）

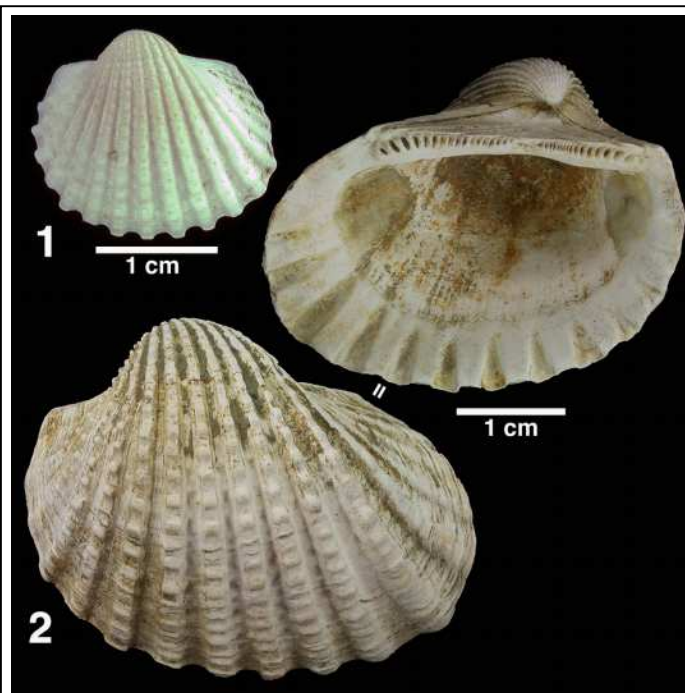
ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて東京湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していたが、現在では瀬戸内海のごく一部と有明海でのみ生息が確認されている（和田・他，1996）。本種は 1960 年代には衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で比較的普通に生息していた（愛知県科学教育センター，1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では庄内川河口・矢作川河口・汐川干潟などで古い死殻が稀に採集される程度で、絶滅と評価された。

【形態】

殻長約 50 mm、殻は厚く、よく膨らむ。殻表には結節を備えた強い肋が約 18 本ある。殻は白色であるが、生時には灰褐色の殻皮で覆われる。



1: 名古屋市金城ふ頭サンドボンブ, 1978 年頃, 河合秀高採集,
2: 田原市汐川干潟, 1993 年 11 月 4 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、東南アジア、インド。かつて国内では東京湾以南から九州まで分布するとされていたが、現在では上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥の泥質干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

水産庁・水産資源保護協会（1994）では希少にランクされている。

【引用文献】

水産庁・水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(I), 123pp.

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

（木村昭一）

オナガリュウグウハゴロモ *Offadesuma nakamigawai* Kuroda et Horikoshi

【選定理由】

本種は、神奈川県逗子市逗子（相模湾）をタイプ産地として記載された（黒田・堀越, 1952）リュウグウハゴロモ科の大型種である。本種の分布域は、相模湾から三河湾にかけての潮間帯下～水深 20 m の細砂泥底とされている（鹿間, 1964；波部, 1961, 1977；奥谷, 2000, 2017）。本種は、まだ自然環境が豊かであった 1960 年代に、既に稀産種とされていた（鹿間, 1964）。著者は、1980 年頃より東海地方の内湾や浅海域、遠州灘や熊野灘の水深 200 m 以上の漸深海底、熊野灘海域の水深 1000 m までの調査を行っているが（木村, 1996；木村・木村, 2017 など）、これまでに本種の死殻破片も採集されたことがない。また、本種は愛知県（三河湾）での採集記録はある（鹿間, 1964）が、それ以降 50 年以上生貝、死殻を含めて全く採集記録が存在しない種であり（木村, 2019）、今回絶滅と評価された。

【形態】

本種の実記載では、「（オナガリュウグウハゴロモが、）本属の模式種 *O. angasi* と異なる点は大形であること、（後略）」と記され、オナガリュウグウハゴロモのタイプ標本は殻長 74.0 mm、殻高 47.5 mm である。右殻は左殻を包み込む様な形態で、右殻は左殻よりかなり大きく、膨らみが左殻と比べて非常に強い。殻頂部は殻長の 2 分の 1 よりやや後部に位置する。前端、後端とも両殻は開くが、後端の開く度合いの方がやや大きい。殻の後端は吻状に突出し、吻状部分の基部の腹縁側には浅いが明確な湾入がある。



（参考標本）フィリピン産(Caubian Island 沖水深 20 m), 2014 年 3 月, 木村昭一所蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

本種の県内での採集記録は以下の 1 例のみである。鹿間（1964）によると、「私は三河一色の漁港で猛者林獎一郎とともにうろついている時、これを自分で採集した時は夢ではないかと思った。」と記している。この時採集された標本は図示されているが、採集標本が生貝か死殻か、また採集年月も明記されていない。

【世界および国内の分布】

本種の分布域は、相模湾から三河湾にかけての潮間帯下～水深 20 m の細砂泥底とされている（鹿間, 1964；波部, 1961；奥谷, 2017）。またタイプ産地（逗子市逗子）においての詳細な調査でも死殻さえ確認されておらず（河辺・矢野, 2018 など）、絶滅したと考えられる。近年の日本では唯一、*Offadesuma* sp. として、沖縄県竹富町西表島トゥムマリ浜（月ヶ浜）で打ち上げられた死殻が複数個体確認されている（西表島浦内川流域研究会, 2003）。また木村（2019）では、殻形態による同定であるが、フィリピンにも本種が生息すると報告した（図示標本）。

【生息地の環境／生態的特性】

オナガリュウグウハゴロモのタイプ産地は神奈川県逗子市逗子で、原記載には「相模湾逗子海岸, 1936 年春、中上川小六郎氏採集 [同氏は之を汀線付近で拾はれたが当時在肉標本であったが、潮線帯に棲息するものとも思われないから或る漁労網から捨てられたもので、その付近海域産であつたろう]。」と採集時の様子が詳細に記されている。これらのことから、本種は外洋に面した内湾に生息する浅海性種であると言える。逗子海岸では、打ち上げ採集で多様な貝類が得られることが知られており、河辺・矢野（2018）により死殻のみの確認も含めて合計 855 種の貝類（オナガリュウグウハゴロモは死殻も確認されていない）が報告されている。855 種という 1 地点の狭い範囲としては極めて多様な貝類相が記録されているが、この資料は主に 2002 以降の調査によるものである。ましてや高度経済成長初期の本種のタイプ標本が採集された当時は、貝類の多様性がより高く、豊かな海域であったことが容易に想像される。

【現在の生息状況／減少の要因】

高度成長期の初期には希少な種と認識されていたので、水質汚濁等の影響に敏感な種と考えられる。

【引用文献】

- 波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. xii+182+46 (incl. 66 pls.) 保育社. 大阪.
西表島浦内川流域研究会, 2003. 西表島浦内川河口域の生物多様性と伝統的自然資源利用の総合調査報告書 1. 49pp. 沖縄県八重山郡竹富町.
河辺訓受・矢野公昭, 2018. 神奈川県逗子海岸の貝類相 (第 3 報). かきつばた, (43): 39-42.
木村昭一, 1996. ドレッシングによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 水産教育研究彙報第 35 報. pp. 1-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2019. オナガリュウグウハゴロモは絶滅したのか?. かきつばた, (44): 33-37.
木村昭一・木村妙子, 2017. 軟体動物門. in: 木村妙子・木村昭一・自見直人・角井敬知・富岡森理・大矢佑基・松本 裕・田邊優航・長谷川 尚弘・波々伯部夏美・本間理子・細田悠史・藤本心太・倉持利明・藤田敏彦・小川晟人・小林 格・石田吉明・田中 颯・大西はるか・緒次美徳・吉川晟弘・田中正敦・櫛田優花・前川陽一・中村 亨・奥村順哉・田中香月 (著) 三重県熊野灘の深海底生生物相. 三重大学フィールド研究・技術年報 16: 5-7, 17.
黒田徳米・堀越増興, 1952. リュウグウハゴロモガイ亜科 Periplomatinae の 2 新種に就て. Venus 17 (21): 16-22.
奥谷喬司, 2017. オナガリュウグウハゴロモ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 553, 1210. 東海大学出版部, 平塚.
鹿間時夫, 1964. 続原色図鑑世界の貝. 212pp. + 70pls. 北隆館, 東京.

(木村昭一)

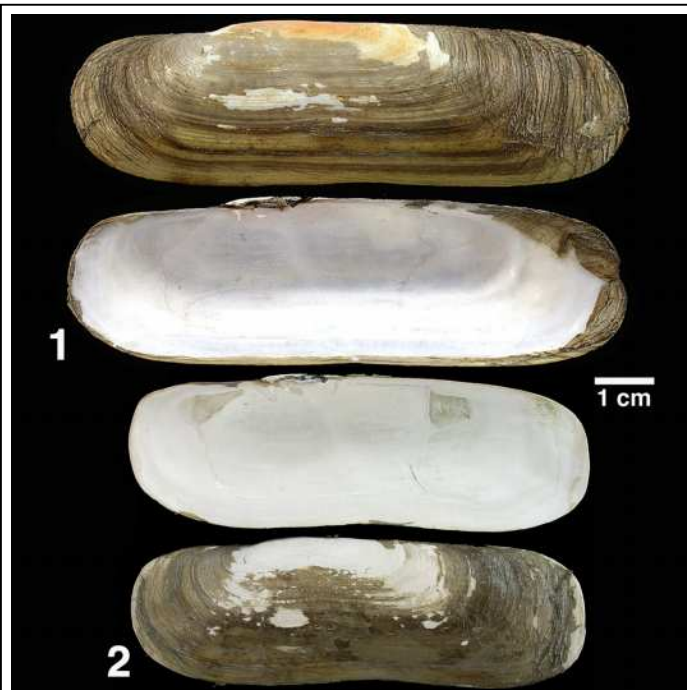
アゲマキ *Sinonovacula constricta* (Lamarck)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、かつて三河湾以南の閉鎖性の内湾に広く分布していた。しかし、現在では有明海・八代海でのみ生息が確認されている（和田・他，1996；山下，2012）。有明海では食用種として多産していたが、近年資源量が減少している（水産資源保護協会，1995；山下，2012）。県内では 1960 年代に衣浦湾（知多湾奥）、汐川干潟などの内湾奥で生息が確認されていた（愛知県科学教育センター，1967）が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、汐川干潟では三河大橋の建設と前後して絶滅した（原田一夫氏私信）。近年では汐川干潟（木村，未発表資料）や藤前干潟（早瀬・他，2014）で死殻が採集される程度で、絶滅と評価された。

【形態】

殻長約 10 cm、殻は前後に長い長方形で、殻はやや薄い。殻の前後端は丸みがあり両殻の間は開口している。生時の殻表は殻頂部を除いて灰褐色の殻皮で覆われる。



1: 田原市汐川干潟, 1965 年 8 月 28 日, 河辺訓受採集,
2: 名古屋市庄内川河口, 2013 年 4 月 18 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国。国内では、現在上述の通りの限られた水域にのみ分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮間帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

水産資源保護協会（1995）では危急にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物. 222pp.
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一，2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39):31-36.
山下博由，2012. アゲマキ, p. 172. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
水産資源保護協会，1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

（木村昭一）

テリザクラ *Iridona iridescens* (Benson in Cantor)

【選定理由】

本種は、内湾泥干潟のシルト泥底に生息する二枚貝である。国内のかつての分布域は陸中海岸以南、九州までと比較的広いが、近年生息が確認されているのは、瀬戸内海西部、唐津湾、有明海、八代海、天草市羊角湾に限られた海域だけである（山下, 2012）。

東海地方での生息記録や標本は今まで確認されておらず、過去の愛知県版レッドデータブックには掲載されていない。しかし、河辺訓受氏所蔵の標本を精査したところ、1960年代に三河湾東部の田原町汐川河口干潟で自らが採集したテリザクラの標本が確認されたので、県下にも生息していたことが明らかになった（河辺・木村, 2015）。本種の生息環境自体が現存しないこと、内湾域の調査は詳細に行われているにもかかわらず、近年死殻さえ全く確認されていないことから、今回県下では絶滅したと評価された。



田原市汐川干潟, 1969年5月4日, 河辺訓受採集

【形態】

殻長約 25 mm、殻はやや細長い卵形で膨らみは弱く、扁平。殻はやや薄く、橙色から黄褐色で、殻表には薄い殻皮で覆われるが、殻の周辺のみに残されている個体が多い。ユウシオガイ *Moerella rutila* (Dunker) にやや近似するが、やや大型で、明らかに殻長に比べて殻高が小さく殻が細長い。またユウシオガイのように、個体によって明確な白色、黄色、橙色の3タイプに色調が分かれることもない。

【分布の概要】

【県内の分布】

本種の県内での採集記録は、田原市（旧渥美郡田原町）汐川干潟における1例（1969年5月4日採集）のみである（河辺・木村, 2015）。その後、県内内湾域の詳細な調査でも本種は死殻さえ確認されていない。

【世界および国内の分布】

朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、オーストラリア北部に分布するとされ、国内で近年生息が確認されているのは、瀬戸内海西部、唐津湾、有明海、八代海、天草市羊角湾に限られた海域だけである（山下, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾奥、河口域に深く堆積した健全な（硫化水素の発生していない）細かい粒子のシルト泥底に浅く埋もれて生息し、同所的にハイガイ、イチョウシラトリ、アゲマキが生息している場合が多い。これらの3種も愛知県下では絶滅したと評価されている。現在このような生息環境自体が県下には存在せず、1960年代の汐川干潟を最後として、生息環境自体が消失したと考えられる。本種の生息の痕跡が長らく確認できなかったのは、殻が小型で薄質であるため、比較的大型の殻を持つアゲマキ、もしくは殻質の厚いハイガイ、イチョウシラトリと比較して死殻の残される期間が短かったことなどが考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述のように生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【引用文献】

- 山下博由, 2012a. テリザクラ, p.125. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
河辺訓受・木村昭一, 2015. 愛知県に生息していたテリザクラー かつての汐川干潟の貝類相－. かきつばた, (40): 31–33.

（木村昭一）

イチョウシラトリ *Serratina diaphana* (Deshayes)

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種である。かつては北海道以南の日本の広い範囲に分布していたが、近年の詳細な調査の結果、現在では英虞湾以西、瀬戸内海、周防灘及び九州で生息が確認されている (Yamashita et al, 1997; 山下・木村, 2012)。県内では、1960年代に衣浦湾 (知多湾奥)、汐川干潟で少ないながらも生息が確認されていた (愛知県科学教育センター, 1967) が、衣浦湾の生息地は埋め立てられ、近年では汐川干潟 (図示標本) や藤前干潟 (河合, 2011) で古い死殻が稀に採集される程度で、絶滅と評価された。

【形態】

殻長 5 cm、殻は丸みを帯びた三角形で膨らみが弱い。殻はやや厚く白色、規則的な板状の成長脈で覆われる。



田原市汐川干潟(死殻), 2011年6月5日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では絶滅した。

【世界及び国内の分布】

日本、東南アジア、インド洋。かつて国内では北海道以南から九州まで分布するとされていたが、現在では上述の通りの限られた水域にのみ分布する。現在では三重県英虞湾が分布の北限の可能性が高い (山下・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥の泥質干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減し、絶滅したと考えられる。

【特記事項】

千葉県 (2000) では絶滅生物にランクされ、葉山しおさい博物館 (2001) では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

河合秀高, 2011. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝 (その3). かきつばた, (36): 58. 名古屋貝類談話会.

千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

Yamasita, Y., Okamoto, M., Harato, M., Fukuda, H., 1997. The present status and conservation values of endangered mollusks in tidal flats and estuaries of Japan-1. Tellina (*Serratina*) capsoides (Bivalvia: Veneroida: tellinidae). The Yuriyagai, Journal of the Malacozoological Association of Yamaguchi, 5(1/2):101-116.

山下博由・木村昭一, 2012. イチョウシラトリ, p. 129. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

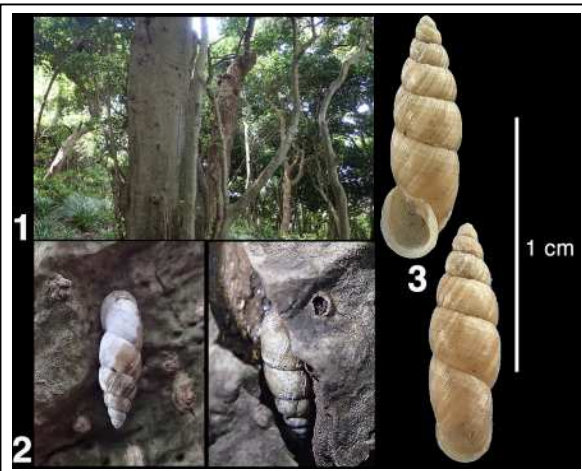
トカラコギセル *Reinia ashizuriensis* M. Azuma

【選定理由】

現在の愛知県下では、竹島(蒲郡市)と沖島(西尾市)に生息するとされる。竹島ではごく少数個体ではあるが、近年(2013年)まで生息が確認されている一方、沖島の状況は明らかではなかった。堀越(1977)は、沖島で20個体程確認し、減少の一途を辿っていると報告した。2014年7月に行われた調査の際、沖島(三河湾)では僅か2個体の生息が確認された(大貫・他, 2015)。愛知県では現在、この2島以外での生息確認記録はない。生息密度が著しく低く、生息域は小さな島嶼環境である竹島と沖島の常緑樹の樹幹に限られる稀少種である。愛知県の本種は、東限分布個体群であり、生物地理の観点からもきわめて重要な個体群である。全国的にも絶滅が危惧される種であり、愛知県下の個体群は、減少傾向が特に著しく、絶滅の危険性がきわめて高い種と考えられる。

【形態】

成貝は、殻長10.3~10.7 mm、殻径2.9~3.2 mm程度の円みを帯び短い紡錘形の小型種である。殻は薄く、老成すると殻表には明瞭な火焰彩が現われ縞模様美しい。体層の内面側方には、殻口近くまで延びるやや長い主襞と、短い上腔襞および上腔襞のさらに半分程度の下腔襞の隆起があり、若い成貝では透過されて殻の外側より確認出来る。殻口は老成個体では肥厚し、楕円形の厚い唇縁となる。殻口上部の上板の突起は小さく、その正面右側の下板はやや強く張り出し、殻口から明らかに確認することができる。下軸板は唇縁に現れない。



1, 2: 東幡豆町沖島, 2014年7月12日, 大貫貴清採集, 撮影, 3: 蒲郡市竹島, 1988年4月30日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、三河湾の2島(竹島と沖島)のみに生息が確認されている(大貫・他, 2015)。かつて伊良湖岬にも分布していたことが明らかとなっているが、1976年7月採取標本(豊橋市自然史博物館所蔵TMNH-MO-27931~27933)を最後に、絶滅したと考えられる(早瀬・他, 2017)。渥美半島先端部の宮山原生林にも生息するとの報告があるが、近年、当地が調査されたことはない。ただし、宮山の麓周囲の調査では全く確認されず、現在生息している可能性はきわめて低いと思われる。

【世界および国内の分布】

これまでは中国産のイーストレキコギセルの亜種と考えられていたが、近年は遺伝子解析の結果より別種に扱われる(Motochin et al., 2017)。したがって、日本固有種と考えられ、現在の分布は、愛知県を東限とし、四国南西部、九州南部からトカラ列島・奄美諸島にかけての海岸近くの常緑樹の林などである(湊, 2014; 大貫・他, 2015)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、三河湾の沖島と竹島の常緑樹林である。過去に記録のある伊良湖岬なども海岸に面した環境である。本種は海岸のヤブツバキなどの常緑樹の樹幹に付着して生息する。胎生(卵胎生)で、親個体から直接、稚貝が産み出される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、愛知県下では、竹島と沖島のみに生息が確認されるが、いずれの生息地も、ごく少数個体がごく稀に確認される程度である。近い将来に絶滅の可能性がきわめて高い状況下にある。愛知県下で最も絶滅に近く位置している生物のひとつと言っても過言ではない。竹島では農薬散布が減少要因とされ、沖島では観光開発のため本来生息しないニホンザルを放した経緯があるほか、伊良湖岬では海岸周囲の遊歩道の整備(拡幅および舗装)で環境悪化した(野々部・他, 1977)経緯がある。また、貝類収集マニアの採集圧も少なからず影響していると考えられる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される竹島と沖島の自然環境を維持することが重要である。樹幹に付着し生息する種であるため、樹木の伐採を行わないことが特に重要である。このほか、早急に捕獲規制を検討し、採取は厳に自粛する必要がある。

【特記事項】

現状の自然環境を維持するのみでは、本種個体群の維持はきわめて難しい段階に入ったと考えられる。人工飼育下での個体群維持を試みる段階にあると思われる。早急に検討が必要である。本種の学名(属および種小名)は、従来のイーストレキコギセルの亜種から変更された(Motochin et al., 2017)。

【引用文献】

- 早瀬善正・西 浩孝・河辺訓受・木村昭一・矢橋 真・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2017. 伊良湖岬の陸産貝類, かきつばた, (42): 1-5.
堀越 徹, 1977. 三河湾「沖の島」調査会報告, かきつばた, (3): 6.
湊 宏, 2014. トカラコギセル, p.138. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
Motochin, R., Wang M. & Ueshima, R., 2017. Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). Zoological Journal of the Linnean Society, 181 (4): 795-845.
野々部良一・後藤常明・山崎芳江, 1977. 伊良湖の貝類分布調査(Ⅱ陸産), かきつばた, (2): 7.
大貫貴清・佐藤拓也・木村昭一・早瀬善正・吉川 尚, 2015. 沖島と前島(愛知県西尾市東幡豆町)の陸産貝類, かきつばた, (40): 39-42.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)

ヒロクチコギセル *Reinia variegata* (A. Adams)**【選定理由】**

愛知県下では、1976 年 4 月に伊良湖岬で採取されて以降の生息確認記録がない種である。伊良湖岬では 2016 年 10 月に 8 名で調査を行ったにもかかわらず、本種を再確認することができなかった。本種は、既に 40 年以上、愛知県下で再発見されておらず、絶滅した可能性がきわめて高いと考えられる。しかし、生息地のひとつとされている渥美半島先端部の宮山原始林の山頂部での調査がなされていないため、現時点ではまだ絶滅を宣言することが出来ない。きわめて僅かな生存の可能性も考慮して、これまでのランクを踏襲し、絶滅危惧 I A 類のままとした。

【形態】

殻長 9.3 mm、殻径 3.0 mm 程度の円みを帯びた短い紡錘形の小型種である。殻は薄く、幼弱個体は黄褐色のみの殻であるが、老成すると殻表には黄褐色の地に明瞭な白色の火焰彩が現われ、美しい縞模様となる。愛知県では同一環境に生息していた例が知られる類似種のトカラコギセルと異なり、殻内部に腔壁や閉弁を有していない。殻口は薄く、殆ど肥厚しない。殻口上部の上板の突起は小さく、その正面右側の下板は弱い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

生息の根拠となる、標本が残存する明確な本種の記録(豊橋市自然史博物館所蔵 TMNH-MO-27928, 27934~27937, 27938~27943, 27944~27965 および、展示 2 個体)は、伊良湖岬のみである(早瀬・他, 2017)。この標本のうち、採取日の記録が残るものは、1976 年 4 月 4 日のものである。本種は、三河湾の島嶼に生息するとされた報告もあるが、標本確認結果はトカラコギセルのみである。

【世界および国内の分布】

日本固有種である。宮城県南三陸町以南の本州、四国、九州の海岸地域に分布する(湊, 2014)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内では、伊良湖岬の海岸林に生息するとされる。海岸の常緑樹の樹幹に付着する。胎生(卵胎生)で、親個体から直接、稚貝が産み出される。

【現在の生息状況／減少の要因】

1976 年 4 月 4 日の標本(豊橋市自然史博物館所蔵)が採取されて以降、愛知県内では、本種の生息が確認されていない。愛知県下では 40 年以上、再発見されておらず、既に絶滅した種の可能性がきわめて高い。かつて生息していた証拠標本が残り、愛知県下で唯一の明らかな生息地である伊良湖岬では、海岸周囲の遊歩道の整備(拡幅および舗装)に伴い、環境悪化した(野々部・他, 1977)可能性が高い。10 年後の 1986 年 4 月には、1976 年 4 月 4 日の標本採集者自身が伊良湖岬で本種を確認できなかった(山崎・高阪, 1986)。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息の可能性が残されている、国の天然記念物に指定される宮山原始林の森林環境の維持が重要である。

【特記事項】

今後の調査で宮山原始林での本種の生息が確認されなかった場合は、本種は愛知県下では絶滅したと考えられる。再確認された場合には、早急に保護および捕獲規制の検討をする必要がある。なお、遺伝子解析では、本種とトカラコギセルが同一クレード内に混在して位置し、両種を 2 種として区分できない結果が示されている(Motochin et al., 2017)。しかし、殻形態においては、ごく一部の特異な個体例(図示した三重県産の例は、殻の外形はトカラコギセルと同一であるが、腔壁や閉弁を持たない特徴より暫定的にヒロクチコギセルに同定する)を除き、明らかに両種の識別は可能であることから、ここでは両種を別種として扱う。

【引用文献】

- 早瀬善正・西 浩孝・河辺訓受・木村昭一・矢橋 真・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2017. 伊良湖岬の陸産貝類, かきつばた, (42): 1-5.
 湊 宏, 2014. ヒロクチコギセル, p.143. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
 Motochin, R., Wang M. & Ueshima, R., 2017. Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). Zoological Journal of the Linnean Society, 181 (4): 795-845.
 野々部良一・後藤常明・山崎芳江, 1977. 伊良湖の貝類分布調査 (II 陸産), かきつばた, (2): 7.
 山崎芳江・高阪元治, 1986. 東海地方の貝類現況報告 (1), (8) 渥美半島, かきつばた, (12): 15.

【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)



1: 豊橋市自然史博物館所蔵(TMNH-MO-27928) 田原市伊良湖岬 1976.4.4. 高桑宏採集, 2: 三重県大王町, 1998 年 4 月 12 日, 河辺訓受採集

ホウライジギセル *Stereophaedusa ikenoi* Minato

【選定理由】

鳳来寺山を模式産地とする陸産貝類として著名な種。新居高校の池野国一氏によって愛知県鳳来寺山奥の院近くで発見され、続いて静岡県天竜市小松崎でも分布が確認された。また静岡県春野町石打松下、同町熊切にも生息するが、何れも稀産で保全が望まれる。

【形態】

平均殻高 17.3 mm、平均殻径 3.4 mm、上腔襞は下腔襞より短い。両者の間にある腔襞については、その数や形態に変異が多い。殻は棍棒で淡黄白色、表面に細かい成長脈があるが光沢はない。13～14 1/2 層を数える。



新城市鳳来寺山, 2008 年 9 月 7 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

【選定理由】の項でも述べたが、愛知県鳳来寺山の山頂近くに分布する。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。県外では、静岡県天竜市小松崎、春野町石打松下、同町熊切に局地的に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

急斜面の比較的乾いたガレ場の落葉堆積中や、大きな転石の側面などである。

【現在の生息状況／減少の要因】

一時鳳来寺山では割に広範囲に生育し、当初考えた程稀産ではないと考えられたが、人為的圧力や乾燥と落葉堆積の減少から急速に減少し、今では絶滅寸前の稀産種となっている。

【保全上の留意点】

生息地の落葉の保護に留意する。

【関連文献】

湊 宏, 1980. 北海道奥尻島と本州中部産のキセルガイ科の 2 種類, VENUS 38 (4). 日本貝類学会.

湊 宏, 1985. 鳳来寺山とホウライジギセル. ちりぼたん, 6 (2). 日本貝類学会.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会.

増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館

東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑増補改訂版. 保育社.

(2009 年版 (原田) を一部修正)

オモイガケナマイマイ *Aegista inexpectata* Kuroda et Minato

【選定理由】

豊橋市の石巻山山頂付近石灰岩地の固有種であり、生息密度が低く、分布域も極度に狭い稀少種である。近年の異常気象に起因する夏季の高温により石灰岩地の乾燥化が進行しており、また、豪雨などによるリター層や土壌の流出なども陸産貝類全般の生息に大きな影響を及ぼし、本種も減少傾向にある。生息地が石巻山山頂部の局所分布であることから、絶滅の危険性のきわめて高い種と考えられる。世界的に見ても石巻山山頂部石灰岩地の固有種としてきわめて重要である。

【形態】

殻長 3.4~4.3 mm、殻径 11.1~12.0 mm 程度のごく低い円盤形の小型種である。殻は薄く、殻表は茶褐色のきわめて薄い殻皮で覆われ、鈍い光沢を有する。螺塔部は、ほぼ扁平である。殻皮には、同属他種の多くに見られる様な鱗片状の突出を生じない。成貝の殻口唇縁は、僅かに反曲する。周縁は鋭角張り、竜骨状（キール）となる。臍孔は殻径の 1/3 程度の幅で、浅いが広く明瞭に開く。軟体は淡黒褐色である。

【分布の概要】

【県内の分布】

石巻山山頂部のみ分布。タイプ産地は石巻山石灰岩地帯が指定されている（黒田・湊, 1977）。

【世界および国内の分布】

日本（石巻山）固有種。原記載では、愛知県豊橋市石巻山以外には、静岡県（天竜市二保）、東京都（奥多摩日原鍾乳洞付近）、埼玉県（横瀬村武甲山山麓）、群馬県（中里村叶山）にも分布する（黒田・湊, 1977）とされていたが、おそらく、いずれも本種とは別種になると考えられる。

【生息地の環境／生態的特性】

石巻山山頂部の石灰岩地に生息する。石灰岩露頭の岩の割れ目の隙間に生息する。降雨後の活動時の個体以外は、生貝の発見が困難である。食性については植物食で、分解の進んだ落葉堆積物などを食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

徐々に生貝の確認個体数が減少しており、減少傾向が考えられる。近年の異常気象に起因する夏季の高温や豪雨などによるリター層や土壌の流出なども本種の生息に大きな影響を及ぼしていると考えられる。石巻山は、本種のほかにも数種の陸産貝類の固有種が存在するため、貝類コレクターの採集圧も無視できないと考えられる。生息場所はきわめて狭く局所的であり、環境が悪化すれば直ちに本種の消滅につながる。

【保全上の留意点】

生息地の石巻山は、石巻山多米県立自然公園に位置しているほか、山頂付近の「石巻山石灰岩地植物群落」は国の天然記念物に指定されており、生息地の環境は保護されている。

本種の生息が確認される石巻山の自然環境を良好な状態で維持することが重要である。貝類コレクターなどによる無許可での本種生貝の乱獲にも注意が必要である。

【特記事項】

Hirano et al. (2014) による分子系統解析の結果では、東京都奥多摩日原の個体は、石巻山の個体とは明らかに異なる種であり、トウキョウコオオベソに近縁であった。愛知県産の本種は、中部や近畿などのコオオベソマイマイに近縁な種であった。これらの結果から考えて、埼玉県や群馬県の本種とされていた個体群は、おそらく、トウキョウコオオベソなどに近縁な別種と考えるのが妥当であろう。湊 (2014) は、静岡県の個体群のほか、これら関東地方の種も本種として国レベルでのランク付けをしているので、関東の各地域個体群を別種に分けて扱うことが望まれる。

静岡県については、浜松市北区引佐町などに本種の分布が知られているが（増田・波部, 1989; 加藤, 2019）、Hirano et al. (2014) は同地のカドコオオベソマイマイとする個体が静岡県中～東部などのカドコオオベソマイマイなどと同クレードに位置する結果を示している。また、早瀬・他 (2016b) による引佐町産オモイガケナマイマイとされていると考えられる個体の検討においては、オモイガケナマイマイとは別種に位置付けるのが妥当との検証結果が示されている。したがって、静岡県レッドデータブック 2019 では、静岡県浜松市北区産の類似種を本種としてランク付けしているが（加藤, 2019）、静岡県産の個体群は別種に位置付けて対応する必要があると考えられる。

本種を含め、かつてオナジマイマイ科とされていたグループは、近年では、いずれもナンバンマイマイ科の所属と考えられる様になった（早瀬・他, 2016a の説明 (p.38) を参照）。

以前は、周縁角の角張る同様の特徴の同属種が、ケマイマイ亜属 (*Plectotropis*) に位置付けられていたが、DNA 解析の結果いわゆる他人の空似であり、この亜属の単系統性が認められなかった (Hirano et al., 2014)。オオベソマイマイ属 (*Aegista*) には、これまで提唱された他の亜属も全て分類群として成立しないことが明らかになったため、近年の分類では本属に亜属表記がされていない。

また、本種は県条例に基づく指定希少野生動植物種及び種の保存法における国内希少野生動植物種に指定されている。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓愛・湊 宏, 2016a. 震災後の宮城県北部沿岸で確認された陸産および淡水産貝類, ちりばたん, 46 (1-2): 2-62.
早瀬善正・木村昭一・河辺訓愛・矢橋 真・西 浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016b. 三岳山の貝類相, かきつばた, (41): 1-16.
Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.
加藤 徹, 2019. オモイガケナマイマイ, p.442. in: 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課(編), まもりたい静岡県の野生生物 2019—静岡県レッドデータブック—<動物編>, 539 pp. 静岡県, 静岡.
(http://www.pref.shizuoka.jp/kankyou/ka-070/wild/red_data03.html)
黒田徳夫・湊 宏, 1977. 愛知県石巻山石灰岩地帯産オモイガケナマイマイ (新種・新称), *Venus*, 36(2): 57-59.
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸淡水産貝類相, 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82 + 3 color pls. + xiv pls.
湊 宏, 2014. オモイガケナマイマイ, p.165. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. きょうせい, 東京.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. オモイガケナマイマイ, p.955. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



豊橋市石巻山, 2006 年 9 月 20 日, 木村昭一採集

ミカワマイマイ *Euhadra scaevola mikawa* Amano**【選定理由】**

愛知県下では、東三河に広く分布するが、ごく稀に確認される程度の生息密度の低い稀産種である。東三河山地は、名義タイプ亜種のミヤマヒダリマキマイマイや亜種のヒラヒダリマキマイマイとの移行地域であり、殻形態での明確な識別が難しい個体も存在する。全国的にも絶滅の危険性が特に高いと判断される種であり、生息地が減少傾向にある生息密度の低い種であることから、愛知県下では、さわめて絶滅の危険性の高い種（亜種）に位置付ける。

【形態】

殻長 20.1～23.5 mm、殻径 39.3～43.8 mm 程度の、平らに近い低円錐形の左巻き種である。殻表には明瞭な成長肋が多数現われ、茶褐色（稀に淡黄褐色）の殻皮で覆われる。周縁は角が強く、特に石灰岩地の個体は鋭い。色帯を有しない。周縁角や色帯の特徴が亜種のミヤマヒダリマキマイマイとは異なる。臍孔は殻径の 1/5 程度の幅で明瞭に開く。軟体の頭足部は黄褐色で、濃い茶色の小斑が散在する。

【分布の概要】**【県内の分布】**

東三河に広く分布し、豊橋市の石巻山～嵩山（すせ）の石灰岩地を中心に分布する。

【世界および国内の分布】

日本固有種。愛知県東部～静岡県西部にかけての石灰岩地を中心に分布する（財団法人 自然環境研究センター, 2010）。豊橋市の石灰岩地の個体を除き、静岡県西部の個体も含めてヒラヒダリマキマイマイとは遺伝的差異が認められないとする報告（川瀬・他, 2015）もある。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、山地の自然林やスギ植林である。谷部の沢や河川に沿った森林環境の林床の枝や落葉堆積下で確認される。自然林ではガレ場の岩礫下や沢沿いの落葉や枝の堆積下に確認され、スギ植林では、沢や川沿いに厚く堆積した枝や落葉下に確認される。本属の中でも特に高湿度の環境を好み生息適地とする種である。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。名義タイプ亜種のミヤマヒダリマキマイマイ（静岡県中部の個体）では、6 月上旬の降雨後の朝に野外で産卵中の個体が確認され、初夏が産卵期と考えられている（早瀬, 2005）。また、産卵から成貝に達するまでに、少なくとも丸 2 年を要し、産卵後 3 年目には成貝になると推定されている（早瀬, 2005）。種としては同種であるので、ミカワマイマイでも同様の繁殖期や成長と考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

タイプ産地である嵩山（すせ）の石灰岩地では殆ど確認されない。鳳来寺山麓やその周辺地域でも生息個体数は僅かである。近年はいずれの地域でも確認が困難となり減少傾向が認められる上に、生息場所はさわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。山地斜面や沢などの環境は、近年の異常気象による豪雨の影響で荒廃している。また、治水目的などで砂防堰堤などのコンクリート構造物に改変される傾向が近年著しい。また、本種は貝類コレクターの収集対象になり易い大形種であることから、乱獲される可能性が高い。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する限られた環境を開発しないことが最も重要である。また、本種は貝類コレクターの乱獲を防ぐためにも県レベルでの捕獲規制などを検討する必要もある。

【特記事項】

愛知県内の本亜種個体群は、ミトコンドリア DNA の解析結果からは豊橋市の石灰岩地の個体を除き、ヒラヒダリマキマイマイに包括された（川瀬・他, 2015）。一方、関東～静岡県中部に分布する名義タイプ亜種のミヤマヒダリマキマイマイとは遺伝的分化があるので、愛知県内のミカワマイマイの大部分は、ヒラヒダリマキマイマイの異名にすべきとされる（川瀬・他, 2015）。ただし、川瀬・他（2015）の結果には、核 DNA の解析結果が示されていないことや、長野県や山梨県、岐阜県北部の個体の解析が全くされていないなどの検証不十分な点も多くあるために、現時点では、この結果をそのまま信頼する事は出来ず、種名に反映させなかった。したがって、静岡県西部～愛知県東部の石灰岩地を中心に分布する周縁角の鋭い個体群をミカワマイマイとし、石灰岩地から外れ、周縁が円い個体については亜種名を明確にせず、種レベルでのミヤマヒダリマキマイマイとした。愛知県の 2 亜種は、生物学的には、区分の必要がない可能性も高いと考えられるが、殻形態によりおおむね分布傾向の差異が認められ、地域個体群としても識別可能である点を重視し、従来の 2 亜種のままとして扱った。愛知県は、本種群 3 亜種の移行地域であり、この地域の個体群の存在が重要であり、保護する必要がある。

【引用文献】

早瀬善正, 2005. 静岡県中部で確認した陸産貝類 2 種の繁殖行動, かきつばた, (31): 36–38.

川瀬基弘・西尾和久・森山明彦・市原 俊・桜井栄一, 2015. ミヤマヒダリマキマイマイ（腹足綱：ナンバンマイマイ科）種内の形態変異と分子系統, Molluscan Diversity, 4(1–2): 5–13.

財団法人 自然環境研究センター, 2010. ミカワマイマイ, p.982. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.

湊 宏, 2014. ミカワマイマイ, p.175. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23–40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)

ヤマタカマイマイ *Satsuma papilliformis* (Kobelt)**【選定理由】**

愛知県では、今から 30 年ほど前の記録以降、本種の確認例が全く無い。最も初期の、愛知県下の陸産貝類相のまとめである天野景従の記録(天野, 1966)以降、1989 年 9 月 15 日に 2 個体の生貝が瀬戸市定光寺町周辺で確認された(早瀬, 2008)のを最後に、その後の確認例はない。愛知県の個体群はもともと、本種の分布域の縁辺部の個体群であり、著しく生息密度が低かったものと推測する。この様に本来稀少な個体群ではあったが、近年は全く生息確認されていないことより、愛知県の本種個体群は、既に絶滅した可能性が高いと思われる。ただし、現在も本種の生息が確認される岐阜県や長野県との県境部の調査が十分ではないために、現段階では、絶滅を宣言するには至らない。愛知県下では、絶滅の可能性が高い種であるが、本種の分布の可能性のある奥三河山地などの県境部での調査が十分ではないことも考慮し、現時点ではまだ、絶滅の危険性のきわめて高い種として位置付けておく。

【形態】

殻長 23.0~26.1 mm、殻径 21.7 mm 程度の、丸みを帯びた高円錐形の小型種である。殻は薄く、黄褐色~淡褐色で、周縁には 1 本の濃褐色の細い色帯を有する。臍孔は閉じ、開口しない。殻表は平滑で、成貝の殻口は弱く反転し、僅かに肥厚する。軟体は肌色~淡褐色で、前方背面には濃褐色の斑が散在する。稀に軟体部の黒色個体が出現する。

【分布の概要】**【県内の分布】**

天野(1966)により、瀬戸市定光寺町周辺と梶島(三河湾; 西尾市吉良町宮崎)の 2 産地の記録があった。しかし、2015 年 6 月に梶島で調査を行った結果、梶島に本種は生息していないことが明らかとなり、この記録自体の信憑性が問われる結果となった(早瀬・他, 2016)。したがって、愛知県下での信頼性の高い本種の分布地記録は、瀬戸市定光寺町周辺のみである。

【世界および国内の分布】

日本(本州)固有種である。北陸・近畿北部・中国地方に広く分布するとされる(東, 1995)。長野県を東限とし(飯島, 2018)、岐阜県や福井県などには、確認例が多い(財団法人 自然環境研究センター, 2010)。

【生息地の環境/生態的特性】

生息確認されていた当時の環境は不明であるが、現時点の定光寺町周辺にも良好な森林環境が多く残されている。他県で本種が確認される環境は、きわめて良好な自然林環境で、沢沿いや川沿いなどの土壌の高湿が十分に保たれる場所である。食性については、分解の進んだ落葉やキノコ類などを食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況/減少の要因】

愛知県下では既に絶滅している可能性が高く、30 年ほど生息が確認されていない。愛知県の個体群は、本種の分布域の縁辺部の個体群であり、発見当初より著しく生息密度が低かったものと推測する。したがって、急激に個体数が減少した訳ではなく、近年までの 30 年間ほどの期間で、環境変動や開発などが起因し、ごく僅かであった生息地における環境の変化や悪化により、現在の愛知県内の環境では、本種が生息できなくなったものと思われる。

【保全上の留意点】

既に絶滅している可能性が高い種ではあるが、本種の生息が確認されていた地域の自然環境を維持することが重要である。森林環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

今後、10 年以内に本種が再確認されることがなければ、愛知県下の絶滅種になると考えられる。

【引用文献】

- 天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第 4 集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.
東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
早瀬善正, 2008. 愛知県瀬戸市定光寺町周辺における陸産貝類相調査, かきつばた, (33): 29-39.
早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2016. 梶島(三河湾)の陸産貝類, かきつばた, (41): 40-41.
飯島邦昭, 2018. 長野県陸産・淡水産貝類誌, 160 pp. 自刊, 下條村.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヤマタカマイマイ, p.942. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 早瀬善正, 2010. 天野景従コレクションにみられる興味深い愛知県産陸産貝類標本, かきつばた, (35): 33-36.
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)

マメタニシ *Parafossarulus manchouricus japonicus* (Pilsbry)**【選定理由】**

本種は平野部の水田や用水路から丘陵地の溜め池などに広く分布していたが、生息場所は狭く限定されていて、生息地点数は元々少ない(愛知県科学教育センター, 1967)。木村(1994)では、東海地方(三重県、岐阜県、愛知県の平野部)で3地点、愛知県では1地点のみで生息が確認されていた。愛知県の1地点では、1998年に生息が確認された後、2010年から2018年まで5回の調査を行ったが、生息が確認できない。かつて木曽川水系五条川の須ヶ口付近から生息が記録されているが(愛知県科学教育センター, 1967)、近年生息が確認できない。ちなみに岐阜県の産地の1地点でも、2018年に調査を行ったが生息を確認できなかった。愛知県のみならず、東海地方でも近年生息が確認されておらず、きわめて絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

成貝では殻長10 mmに達するタニシ類(タニシ科のヒメタニシなど)を小型にしたような形態。殻は細長く、各螺層はやや膨れ、数条の強い螺肋がある。縫合は深くくびれる。殻質は薄く半透明であるが、老成個体で褐色から濃褐色の付着物で覆われ、螺肋も顕著ではなくなることが多い。蓋はタニシ類とは異なり、石灰質で厚く、表面は中央部がかすかにくぼみ、内面と共に白色であるが、殻と同様付着物で覆われ褐色の場合が多い。



豊橋市牛川町豊川水系水路, 1990年5月16日, 木村昭一採集

【分布の概要】**【県内の分布】**

名古屋市の木曽川水系五条川の須ヶ口付近から生息が記録されているが(愛知県科学教育センター, 1967)、現在生息は確認されていない。

豊橋市牛川町の豊川水系水路及び付近の休耕田で1990年5月に生息が確認され(木村, 1994)、その後1998年9月まで生息が確認されていた。それ以降この産地のみならず、県下全域での生息確認記録が存在しない。

【世界および国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布。国内では北海道南部から九州に分布するとされている。琵琶湖では現在も健全な個体群が確認されるが、各地で減少傾向が認められる(紀平・他, 2003など)。木村(1994)で生息記録がある岐阜県養老町横屋、南濃町津屋で2018年に行った生息調査では、ヒメマルマメタニシ *Gabbia kiusiuensis* (S. Hirase) (移入個体群)が多産し、外来種の *Pomacea canaliculata* (Lamarck) スクミリンゴガイ(通称ジャンボタニシ)も普通に見られ、本種の生息は確認できなかった。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は平野部の水田や用水路から丘陵地の溜め池などの流れのないエビモなどの水草の多い場所に生息していたが、休耕田が湿地化しているような場所にも見られた。紀平・他(2003)によると、流れがほとんどなくて湧水のある水域の水草や礫によく見られたと記されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

紀平・他(2003)による淀川での著しい減少が報告されており、本種の減少の要因に水質の悪化と河川改修があげられている。近年の岐阜県南部の調査ではヒメマルマメタニシの移入個体群、外来種のスクミリンゴガイの生息も本種の減少要因である可能性も考えられた。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である、平野部の水田や用水路から丘陵地の溜め池などの流れのないエビモなどの水草の多い場所、流れがほとんどなくて湧水のある水域の水草や礫のある環境を保全する。

【特記事項】

愛知県における現生息地は、確認されていない。東海地方全域でも近年の生息確認報告はない。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, 222pp.

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

紀平肇・松田征也・内山りゅう, 2003. 日本産淡水産貝類図鑑 ①琵琶湖・淀川産の淡水貝類. ピーシーズ, 159pp

【関連文献】

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水産貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 240pp

(木村昭一)

ササノハガイ (トンガリササノハガイ) *Lanceolaria oxyrhyncha* (Martens)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布域を持ち多産したイシガイ科貝類全体(愛知県科学教育センター, 1967)の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村(1994)を含めて現在9地点しかない。絶滅の可能性が非常に高い種と評価された。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で細長く、殻長10 cm程度であるが、止水産の個体は大型になる傾向がある。後端が鋭くとがり、殻長に比べて殻高が非常に小さく、輪郭は細長い笹の葉状。和名もこの形に由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、木村(1994)では5カ所でのみ生息が確認されたが、1カ所では1998年から2001年の現地調査では再発見されていない。それ以外に、豊橋市に生息地が1地点ある(松岡・伊澤, 1993)。2005年木曽川本流の調査で生息地が追加されたが、個体数は非常に少ない(木村, 2006)。岡崎市内で過去に1ヶ所で生息が確認されていたが、現在生息が確認できない(木村, 2014)。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。愛知県以西の本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で、絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

【特記事項】

現在豊橋市の生息地は本種の分布東限である。

岐阜県(2010)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.

(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)

木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報):14-34. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, (32): 22-25. 名古屋貝類談話会.

木村昭一, 2014. トンガリササノハガイ. in: レッドデータブックおかしき 2014. p. 321. 岡崎市.

松岡敬二・伊澤伸恵, 1993. 豊橋市荒神池のトンガリササノハガイ, 豊橋市自然史博物館研究報告第3号: 37-39.

(木村昭一)



上段: 木曽川中流域, 2006年10月31日,
下段: 西尾市矢作古川, 1993年6月12日, 共に木村昭一採集

イシガイ *Nodularia douglasiae* (Gray in Griffith et Pidgeon)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布域を持ち多産したイシガイ科貝類全体の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村(1994)を含めて現在12地点しかない。生息地点での個体数も非常に少なく、絶滅の可能性が非常に高い種と評価された。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては中型で、通常、殻長7cm程度であるが、湖沼産の個体は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく、輪郭は細長い方形。殻長部分には弱いさざ波状の彫刻がある。主歯は前側縁と平行で細長く、後側歯も長い。



幸田町相見川, 1989年12月3日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で木村(1994)では6カ所でのみ生息が確認されたが、個体数が少なかった2カ所では1998年から2001年の現地調査では再発見されていない。2005年木曽川本流の調査で生息地が追加されたが、個体数は非常に少ない(木村, 2006)。岡崎市内で過去に2ヶ所健全な個体群が確認されていたが、現在生息が確認できない(木村, 2014)。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って、他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

【特記事項】

岐阜県(2010)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。環境省ではランク外であるが、東海地方の個体群は危機的な状態であり、かつタナゴ類繁殖用の産卵床としての採集圧力も高く、絶滅危惧種として保護することが強く望まれる種である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究叢報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, (32): 22-25. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2014. イシガイ. in: レッドデータブックおかしき 2014. p. 320. 岡崎市.

(木村昭一)

マツカサガイ *Pronodularia japonensis* (Lea)

【選定理由】

本種の属するイシガイ科貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかで底質が砂泥で水質の良い場所を生息場所としている。県内ではこのような場所はほとんど破壊されてしまったため、1960年代には広い分布を持ち多産したイシガイ科貝類全体(愛知県科学教育センター, 1967)の生息が危機的状況である。本種の県内における生息場所は木村(1994)を含めて現在5カ所しかなく、絶滅の可能性が非常に高い種と評価された。

【形態】

日本産イシガイ科貝類としては通常小型な部類で、殻長5 cm程度であるが、湖沼産の個体は大きくなり8 cmを越す個体も採集される。オバエボシガイほどではないが、殻長に比べて殻高が大きく、輪郭は方形に近い。殻の後部には分岐した肋状の強い彫刻があり、前部にかけて弱くなり縮緬状から顆粒状の彫刻が覆う。この殻表の彫刻が「松毬」を連想させこの和名がある。ただし殻表の彫刻の著しく弱い個体も見られる。主歯は三角形で強く、後側歯も強く長い。



岡崎市ため池(詳細は非公開), 2010年8月27日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1960年代中頃までは木曽川水系の日光川、五条川、矢作川水系、豊川水系などで広く生息が確認されていたが(愛知県科学教育センター, 1967)、県内では河川下流域や平野部の小川や用水路の生息環境は壊滅的で、木村(1994)では1カ所でのみ生息が確認され、その後の調査で2カ所の生息が確認された。ただし、そのうちの2カ所では極めて個体数が少ない。豊川市白川でわずかに生息を確認したにすぎず(木村・浅香, 2004)、2005年木曽川本流の調査でも生息が確認できなかった(木村, 2006)。岡崎市内では1ヶ所の小規模なため池に、わずかな個体数の生息が確認されている(木村, 2014; 上図)。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。北海道、本州、九州の河川下流域、湖沼に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、河川の下流域や平野部の用水路などの流れが緩やかな砂泥底で水質の良い場所を生息場所としている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で、絶滅が危惧される。

【保全上の留意点】

水質の浄化、無秩序な護岸工事を避けることは当然であるが、イシガイ科貝類はグロキディウム幼生の時期にヨシノボリのような底生淡水魚類に寄生しなければ成長できない。従って、他の淡水生物を含めた生息環境の保全が不可欠である。

【特記事項】

水産資源保護協会(1995)では「減少」とランクされ、本種の分布域全体での絶滅の危惧が指摘されている。岐阜県(2010)では絶滅危惧Ⅱ類にランクされている。

【引用文献】

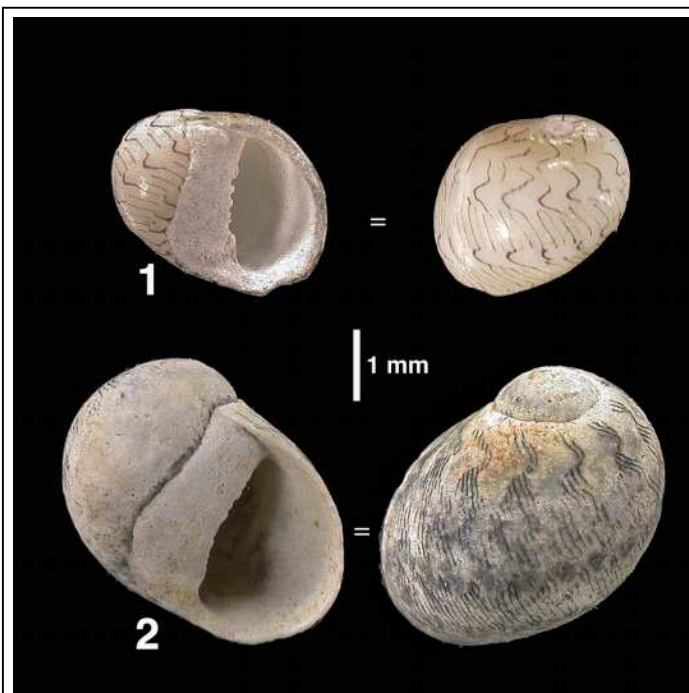
- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
岐阜県, 2010. 岐阜県の絶滅のおそれのある野生動物 動物編 改訂版.
(https://www.pref.gifu.lg.jp/kurashi/kankyo/shizenhogo/c11265/index_17185.html)
木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第33報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一・浅香智也, 2004. 豊川市白川の淡水二枚貝類相. かきつばた, (29): 21-24. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, (32): 22-25. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2014. マツカサガイ. in: レッドデータブックおかげさ 2014. p. 321. 岡崎市.
水産資源保護協会, 1995. 軟体動物. 日本の希少な野生水産物に関する基礎資料(Ⅱ), 131pp.

(木村昭一)

ウミヒメカノコ *Smaragdia* sp.

【選定理由】

本種は、内湾の干潟から潮下帯のアマモ場に生息する。伊豆半島以南の日本本土の内湾域から死殻が時折採集されているが、生息情報がほとんどない種(山下・久保, 2012)である。近年生貝の採集例は、南西諸島を除いて、瀬戸内海(福田・他, 2014)、伊勢湾口部(木村・佐藤, 論文準備中)にあるのみで、非常に少ない。県内でも正式な生息記録がなく、伊勢湾湾口部の小規模なアマモ場周辺(潮下帯)より死殻が数個体採集されたにすぎない。前回までに図示されていた標本(図2)は本種でなく、三浦・他(2012)で図示報告された *Smaragdia* cf. *souverbiana* (Montrouzier) ウミヒメカノコ属の一種と同種であった。県内産出の本種と正しく同定された標本はここに初めて図示される(図1)。県内における近年の生息記録が全くないという危機的生息状況で、絶滅の可能性が非常に高い種と評価された。なお、ウミヒメカノコ属の一種は今回情報不足と評価された。



1: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深3 m), 1994年10月13日, 木村昭一採集, 2: ウミヒメカノコ属の一種(採集データは1と同じ)

【形態】

殻長約5 mmの球型で、螺塔は低い。殻表は平滑で光沢があり、明るい黄色の地色に稲妻状の細かい縦縞がある。蓋は石灰質。本種の学名は確定していないが、近似種とは以下のように明確に区別できる。近似種のキンランカノコガイ *Smaragdia souverbiana* (Montrouzier)等と混同されていた(福田・他, 2014)が、本種は螺塔が低く、レモン色の螺状色帯が無いことなどから明確に区別される。三浦・他(2012)でウミヒメカノコ属の一種とされた種(図2)は、死殻では明瞭ではないが、殻の地色が暗色で、成長脈のような濃黒褐色の縦縞模様が密である。それに対して本種(図1)は、明るい黄色の地色に細い稲妻状の褐色線が間隔を置いて巡らされている。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内で現在生息が確認されている場所はない。

【世界及び国内の分布】

日本のみで分布が確認されている。国内では伊豆半島以南、瀬戸内海、九州、南西諸島(奄美大島・沖縄島・西表島)房総半島以南の低潮帯から水深40 mに生息する(山下・久保, 2012)。

【生息地環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

アマモ場やコアジモ帯(波部, 1961)、コアマモやウミヒルモ類が繁茂する環境に生息する(山下・久保, 2012)。アマモ場の減少が本種の減少の要因の一つであると思われる。

【保全上の留意点】

アマモ場を含めた内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟を保全し、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【引用文献】

- 福田 宏・藤野睦子・江田伸司, 2014. 岡山県倉敷市高洲で生貝が見出されたウミヒメカノコ(腹足綱: アマオブネ科), ならびに同種とキンランカノコ・レモンカノコを巡る同定の混乱. 倉敷市立自然史博物館研究報告, (29): 29-38.
波部忠重, 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社, 182pp.
三浦知之・三浦 要・富岡 宏・佐伯めぐみ・三橋利恵, 2012. 宮崎県門川町庵川アマモ場とその周辺に出現する貝類, 甲殻類および腕足類. 宮崎大学農学部研究報告, (58): 51-68.
山下博由・久保弘文, 2012. ウミヒメカノコ, p. 17. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

イボウミナ *Batillaria zonalis* (Bruguère)

【選定理由】

本種の属するウミナ科貝類は県内にホソウミナ *B. attramentaria* (Sowerby)、ウミナ *B. multiformis* (Lischke)、イボウミナの3種が生息し、ともに内湾の砂泥干潟の表面に生息している。東京湾や三浦半島ではウミナ、イボウミナに著しい減少傾向が認められる(千葉県, 2000; 葉山しおさい博物館, 2001)。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。また本種はウミナと比べても著しく生息地が少なく、近年個体数が減少している。現在、隣接する汐川干潟、紙田川河口域の2生息地が確認されているが、いずれも個体数は少なく、健全な個体群ではない。それ以外では生息も確認できず、死殻も稀である。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 40 mm の高い塔型で殻は厚く、螺層にやや強い肋を持つ。殻口外唇が湾入する点で他の2種と区別できる。



田原市汐川河口, 2016年5月23日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の生息場所は著しく減少したと考えられ、現在生息が確認されるのは汐川干潟(藤岡・木村, 2000)と紙田川河口域の2カ所にすぎない。汐川干潟では健全な個体群が確認されていたが、個体数の減少傾向が認められ、現在(2019年調査)では健全な個体群と言える状況ではない。近年死殻を確認できる場所も少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド洋、太平洋、国内では北海道南部から南西諸島まで分布する(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように泥干潟の表面に生息するが、ウミナ科3種の中では最も干潟の先端部(沖合の部分)に分布する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。また、生息地が直接破壊されない場合でも生貝が見られなくなってしまった場所も多い。

【保全上の留意点】

上述したような泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

千葉県(2000)では絶滅生物にランクされている。葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

木村昭一・福田 宏, 2012. イボウミナ, p. 31 in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック. p. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

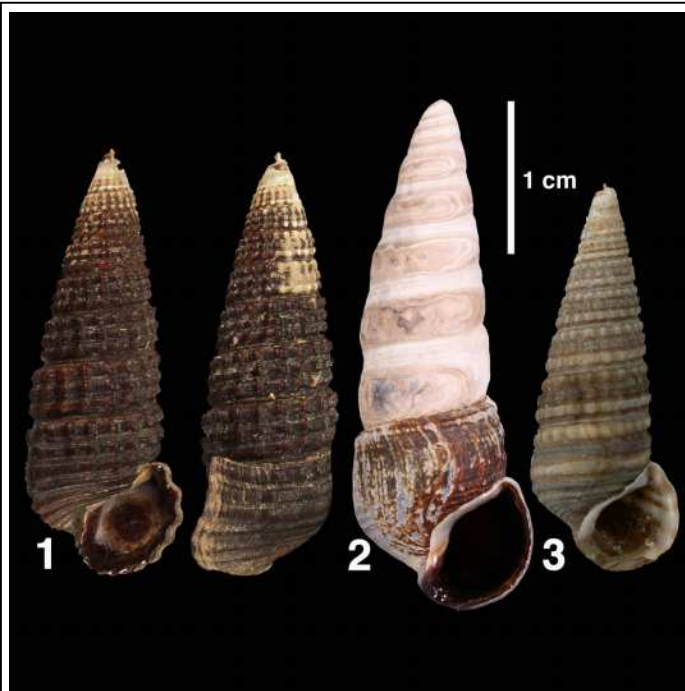
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

(木村昭一)

カワアイ *Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid et Ozawa

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息する。県内ではヨシ原湿地や泥干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。県内で最も干潟環境が保全されている汐川干潟では、県内では唯一最近まで生貝が確認されていた(図1)が、著しい個体数の減少が報告されている(藤岡・木村, 2000)。本種の生貝が汐川干潟で採集されたのは、2014年が最後で(西 浩孝採集; 図2)、それ以降死殻(図3)が少数採集されるが、生貝が確認されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



全て豊橋市汐川干潟産, 1: 2001年8月5日, 木村昭一採集,
2: 2014年5月27日, 西浩孝採集; 豊橋市自然史博物館所蔵
(TMNH-MO-28324), 3: 2017年4月12日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 30 mm の塔型で、十分に成長した個体の殻口は肥厚し、ヘナタリと近似しているが、外唇の下部は水管部へ延びることはない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)では5カ所生息地が報告された。2000年からの調査では更に減少し、そのうちの1カ所でしか生息が確認されず、ウミナナ類やヘナタリが群生する汐川干潟でも2001年8月の調査では3個体(図1)しか生息を確認できなかった。上述のように、現在県内で生貝を確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆、インド洋、太平洋、国内では東北地方から南西諸島まで分布する(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では上述したようなヨシ原湿地周辺やそれより下部の泥干潟の表面に生息している。ヘナタリと同所的に分布しているが、本種は著しく個体数が減少している。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地や内湾奥の泥干潟が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。生息場所が新たに改変されていない場所でも近年個体数が著しく減少しているが、原因は不明。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地や泥干潟を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.
木村昭一・福田 宏, 2012. カワアイ, p. 30.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

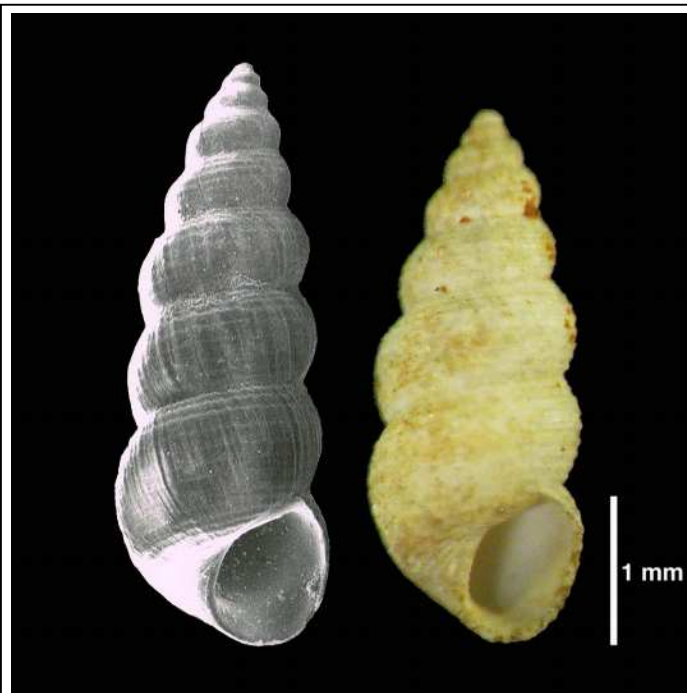
サナギモツボ *Finella pupoides* A. Adams

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も現在までの調査の結果、アマモ場周辺で、死殻は少ないながらも採集されたが、生貝は採集できなかった（木村, 1996 など）。近年の三河湾の島嶼域潮間帯周辺の詳細な調査により、転石地と隣接した良好なアマモ場周辺から死後間もない死殻が稀に採集されたが、生貝は依然として確認されていない（早瀬・木村, 2020）。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 4 mm の微小で、細長い紡錘形の殻を持つ。螺層はよく膨らみ、縫合は深い。



左：南知多町日間賀島南沖（ドレッジ水深 2-4 m），1994 年 10 月 10 日，
右：西尾市佐久島，2017 年 6 月 25 日，木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では近年生貝が採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、インド、西太平洋。国内では三陸海岸・佐渡島～南西諸島まで分布する（福田, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できない。死殻さえ稀なので、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島（三河湾）の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
福田 宏, 2012. サナギモツボ, p. 28. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

（木村昭一）

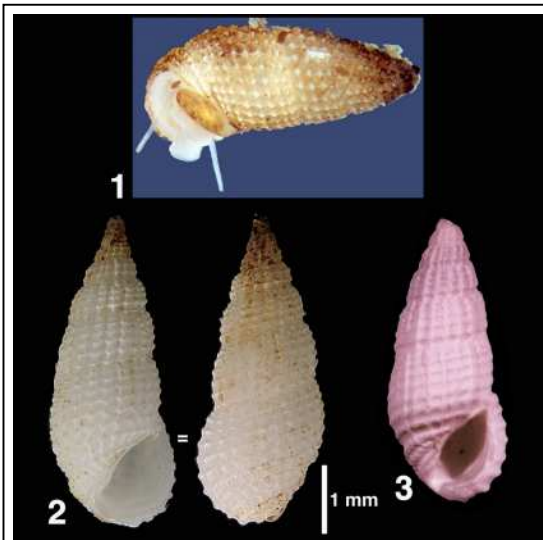
ヌノメチョウジガイ *Phosinella pura* (Gould)

【選定理由】

2018 年 6 月に行われた調査の際、日間賀島 (三河湾) で 3 個体の生貝が初めて確認された (早瀬・他, 2019)。三河湾内では西尾市 (旧幡豆町) の沖島 (早瀬・他, 2015a)、前島周 (早瀬・他, 2015b) や梶島 (早瀬・他, 2016)、日間賀島沖 (木村, 1996)、佐久島 (早瀬・木村, 2020) などで死殻のみが少数確認されていた。2018 年の日間賀島での生息確認により、絶滅していないものの、愛知県下では生息密度が極度に低く、きわめて狭い範囲のみに生息する稀少種であることが明らかとなった。愛知県下では、近年になって初めて生息が確認された種であるため、明確な減少傾向は不明であるが、三河湾の広域で死殻が確認される状況より推測して、かつて三河湾にそれ程稀ではなく存在した本種が、おそらく高度経済成長期の干潟の減少や環境悪化などの要因に伴い、三河湾での生息域を大きく減少させた可能性が考えられる。環境省レッドリストなどにおいて、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現時点での三河湾での生息地が局所的であることから、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種と考えられる。

【形態】

殻長 4.2~5.5 mm、殻径 1.9~2.3 mm 程度のやや短い塔形の微小種である。殻は厚く、各螺層には細く明瞭な螺肋と成長肋がほぼ等間隔に刻まれるため、交差する場所は顆粒状突起となり、全体的に布目状彫刻となる。殻は白色であるが、生時は黒色の硫化鉄と思われる付着物に覆われる場合が多く、汚白色である。蓋は厚く硬化した革質で、内面の下方内側には、1 本の小さな突起 (peg) を有し、先端はごく僅かに 2 分岐する。軟体は白色で、頭触角は先が尖り細く基部外側に小さな黒色の眼を有する。殻口底唇部の外套膜縁には、赤褐色で不規則な形状の白斑が複数認められる。



1, 2: 南知多町日間賀島, 2018 年 6 月 16 日, 3: 西尾市佐久島, 2017 年 6 月 24 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

死殻は、伊勢湾 (南知多町内海海岸) (河合, 2018) や三河湾各所で確認されているが、生貝については現時点で、日間賀島 (三河湾) の潮間帯より 3 個体の生息記録が知られるのみである (早瀬・他, 2019)。

【世界および国内の分布】

国外では、朝鮮半島・中国大陸沿岸に分布するとされる (山下・久保, 2012)。国内では、北海道南部~九州、奄美大島に分布するとされる (山下・久保, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生息環境は、潮間帯の転石地である。埋没石の下に酸化鉄によると考えられる赤褐色に変色した面に付着する個体が確認された。埋没石下のごく狭く閉鎖的環境ながら、海水の循環があり酸素の流通がある場所に生息する。同所には、スジウネリチョウジガイ (563 頁を参照) などの特殊生息環境に棲むとされる種 (福田, 2012) も確認されており、本種も同様の生態的特徴を有するものと考えられる。三河湾では、現状において、湾口から湾奥の中間位置に本種が生息していることから、外洋水の影響の強い内湾湾口部に本種の生息に適した環境が形成されるものと推測される。硫化物で砂泥が黒くなる様な還元層では、本種は確認されていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、日間賀島 (三河湾) の潮間帯転石地で 3 個体の生息が確認されたのみである。三河湾内に広く死殻が確認される状況から推測して、かつては三河湾内に広く本種が分布していたものと思われる。高度経済成長期には、海域の富栄養化に伴う海底へのドロ化、閉鎖的内湾での夏季の貧酸素水塊の発生、干潟を埋め立てでの開発などの環境悪化が顕著であり、これらが主な減少要因と推測される。最近になり三河湾湾口部において存在が確認されたものの、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながるおそれがある。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される転石地の微環境を維持することが最も重要である。

【特記事項】

全国レベルでは、本種よりもスジウネリチョウジガイの方が絶滅の危険性が高く判断されるが、愛知県下 (三河湾) の潮間帯においては、本種の方が著しく少ない状況にある。伊勢湾側では、本種の生息が確認されていない。日間賀島の転石帯は、現時点での本種の生息確認地であり、この地域の個体群の存在が重要であり、当地の環境も含めて保護する必要がある。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. スジウネリチョウジガイ, p.35. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50 (1): 33-79.
- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.
- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.
- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相, かきつばた, (40): 23-30.
- 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永之・社家間太郎, 2015b. 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録, ちりばたん, 45 (3): 105-122.
- 河合秀高, 2018. 南知多町内海海岸において打ち上げ採集で得られた貝類, かきつばた, (43): 30-34.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物, 水産教育研究彙報, 第 35 報: pp. 1-19. 全国高等学校水産教育研究会.
- 山下博由・久保弘文, 2012. スノメチョウジガイ, p.35. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

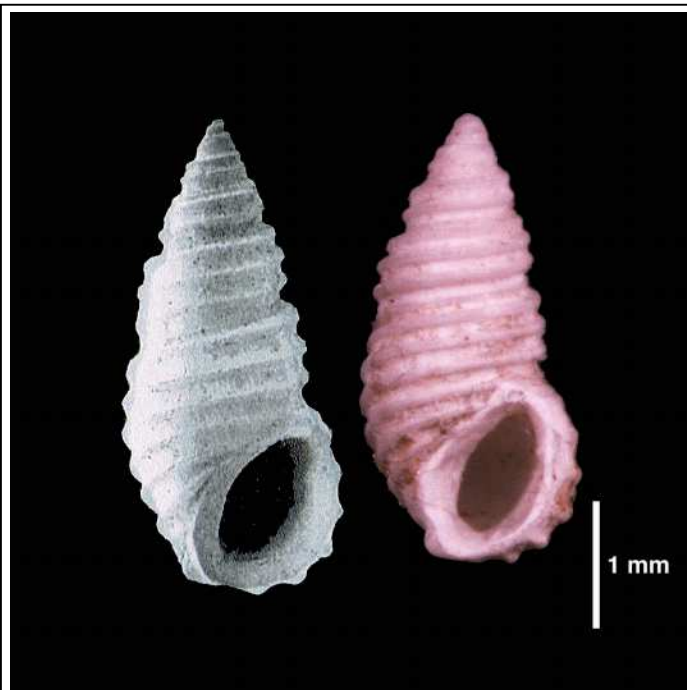
ゴマツボ *Stosicia annulata* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、無酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は、日間賀島の潮間帯や同島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻は採集されたが、生貝は採集できていない(木村, 1995, 1996)。近年貝類多様性の回復傾向が認められる三河湾の島嶼域の調査でも(例えば早瀬・木村, 2020) 稀に死殻が採集されただけで、生息が確認できない。引き続き、絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 5 mm の微小で、やや細い紡錘形で殻は厚い。殻表に強い螺肋がありその間は溝状になる。



左: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 2-4 m), 1995 年 2 月 9 日。
右: 西尾市佐久島, 2016 年 6 月 5 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では生貝が採集されていない。近年貝類多様性が回復傾向の三河湾内の島嶼域においても、生貝は確認されず、死殻の採集例も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本と中国大陸に分布し、国内では房総・能登半島～九州まで分布する(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝が全く採集できない。危機的な生息状況といえる。絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ゴマツボ, p. 36. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

(木村昭一)

イソマイマイ *Sigaretornus* aff. *planus* (A. Adams)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻をわずかに採集したが、生貝は採集できていない（木村, 1996）。その後の調査でも死殻は非常に稀に採集されたが、生貝は採集できていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻径約 10 mm の円盤形で、殻は薄く壊れやすい。殻表には細かい螺肋が多数密に並ぶ。臍孔は広い。従来本種の学名とされていた *S. planus* は、フィリピン～香港産であり、沖縄島産の近似種に相当する可能性が高く、九州以北の個体は沖縄島以南のものよりはるかに大型で、明瞭な周辺角を持つ点で別種と考えられ、未記載種であるかもしれない（福田, 2012）。



南知多町日間賀島南沖水深 3m(ドレッジ), 1994 年 12 月 12 日, 木村昭一採集(死殻)

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では生貝が採集されていない。死殻の採集例も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種の可能性もある。房総・能登半島～九州に分布する（福田, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では生貝を採集できていない。死殻でさえ稀である。危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. イソマイマイ, p. 42. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

（木村昭一）

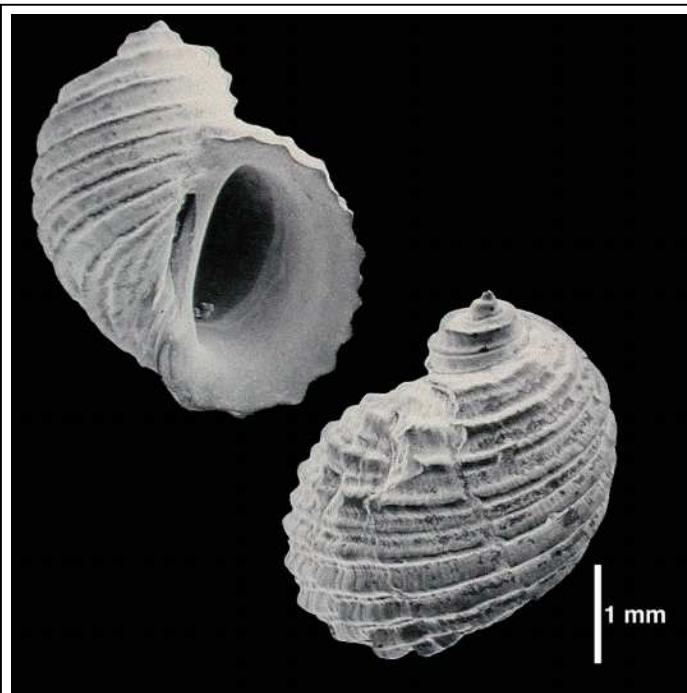
ハツカネズミ *Macromphalus tornatilis* (Gould)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻は少ないながらも採集されたが、生貝は採集できなかった (木村, 1996)。その後の調査でも死殻は非常に稀に採集されたが、生貝は採集されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 4 mm の微小種で、太い紡錘形の殻を持つ。体層は大きく 7-8 本の太い螺肋がある。殻口は半円形となる。



南知多町日間賀島南沖水深 5-6 m (ドレッジ), 1994 年 10 月 11 日, 木村昭一採集(死殻)

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では近年生貝が採集されていない。死殻の採集例も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸。国内では房総半島以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾湾口部の海岸礫地砂泥底の低潮線から潮下帯の転石下面に、ユムシ類の粘液で固められた泥の管に沿って付着する (福田, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できない。死殻さえ稀で、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ハツカネズミ, p. 56.in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

(木村昭一)

ヒモイカリナマコツマミガイ *Hypermastus lacteus* (A.Adams)

【選定理由】

本種は、内湾域の砂礫干潟の底質中に潜って生息するヒモイカリナマコ（棘皮動物）の体内に内部寄生する微小な巻貝。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の宿主（宿主）であるヒモイカリナマコの生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。ヒモイカリナマコツマミガイがヒモイカリナマコに寄生している割合は5%以下で、結果として県内では極めて希少な貝類である。渥美半島北側の三河湾の1地点（愛知県、2005）でのみ生息が確認された。2006年、2007年、2015年の現地調査でもかろうじて生息を確認した。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



田原市福江漁港北側干潟, 2007年6月2日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約5mmで殻は半透明白色で殻質は薄い。殻頂部はつまみ状に突出する。殻表は平滑で強い光沢がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島北側の1地点でのみ生息が確認されている。生息地点数、個体数とも非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種（現在日本以外の分布記録はない）。三浦半島以南、三河湾、志摩半島（三重県）、田辺湾、瀬戸内海、四国東岸に分布する（福田・木村, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

上述の生息地は、アサリの母貝の保護のため地元漁協によって管理され、立ち入りが制限されており、良好な環境が保全されている。今後も、同様の保全が不可欠である。

【特記事項】

三重県の志摩半島、英虞湾、五ヶ所湾での観察では、宿主（ヒモイカリナマコ）が多数生息していても、有機質の多い底質に生息する宿主には寄生せず、潮通しの良い有機質の少ない礫砂底に生息する宿主に限定的に寄生する。また、本種は宿主の外に出て底質中に生息する場合もある。

【引用文献】

愛知県, 2005. 沿岸生態系保全の考え方-干潟生態系を中心として-.

福田 宏・木村昭一, 2012. ヒモイカリナマコツマミガイ, p. 63. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

（木村昭一）

オガイ *Cantharus cecillei* (Philippi)**【選定理由】**

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂礫底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には比較的普通種であった（愛知県科学教育センター, 1967）が、近年死殻さえほとんど採集できない（木村, 1996；木村, 2000）。その後の調査でも死殻さえ採集されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約40 mmの太い紡錘型の貝で、殻は厚く縦肋が強く、生時には、殻表は緑褐色の殻皮で覆われる。蓋は革質で厚く、殻口の大部分をふさぐ。図示標本は死殻なので殻皮、蓋が残されていない。



南知多町日間賀島南沖水深5m(底刺網), 1994年7月5日, 木村昭一採集(死殻)

【分布の概要】**【県内の分布】**

県内の潮下帯で近年全く生貝が採集されない。1994年以後死殻さえ確認されていない。危機的生息状況である。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆、台湾（木村, 未発表資料）に分布し、国内では房総半島・富山湾から九州に分布する（山下・木村, 2012）。近年、瀬戸内海中部から著しい個体群の回復状況が報告されている（増田, 2017；木村・木村, 2019）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境の悪化のほか、本種についてはバイ（堀口, 1998）のように有機スズ化合物による雌の雄化により個体数が減少した可能性もある。近年死殻も採集されておらず、危機的な生息状況である。絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

堀口敏広, 1998. インボセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, 117: 283-288.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.

木村昭一・木村妙子, 2019. 粟島港東側周辺で採集された貝類. まいご, (26): 4-10. 四国貝類談話会.

増田 修, 2017. 姫路市家島諸島周辺（播磨灘北部）で採集されたオガイ. かいなかま, 51(1): 25-28.

(木村昭一)

ツノオリイレ *Boerotrophon candelabrum* (Reeve)

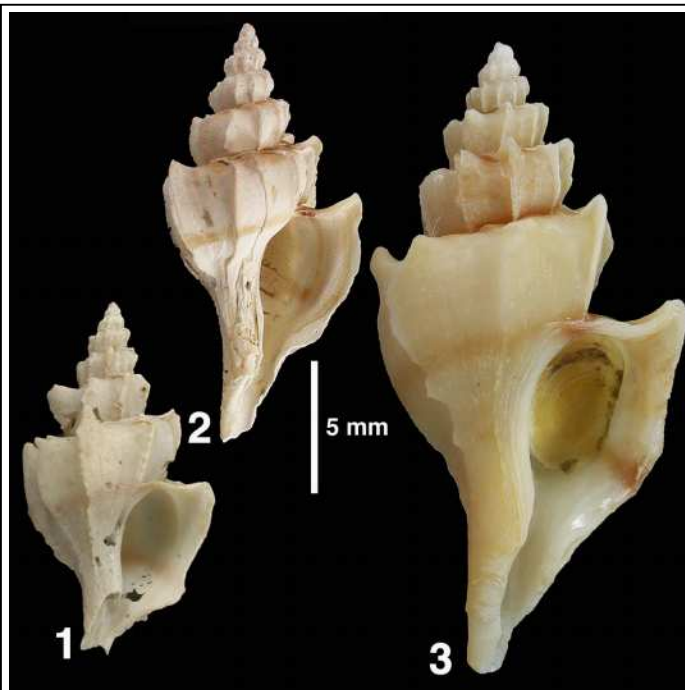
【選定理由】

土屋 (2017) では、本種が相模湾、日本海北部以北に分布するとされているが、古くから瀬戸内海 (伊予灘, 別府湾) (稲葉, 1982)、伊勢湾 (松本, 1979) から分布記録がある。本種は稲葉 (1982) が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる。

県下では 2000 年に知多半島内海沖 (伊勢湾) の水深 10 m の砂礫底から軟体部の残存した死亡個体 1 個体 (図 3) が採集されて以降、生息が確認されていない。現在の伊勢湾中央部 (三重県側) から湾口部の潮下帯で死殻が採集されるが、非常に稀である。生息水深帯がやや深いのでモニタリングの難しい面があるが、きわめて絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

本種は殻長 30–40 mm とされるが、伊勢湾で確認される大型個体でも殻長は 25 mm 程で小型の個体群である。殻は細長く、板状の強い縦張肋が出るが、北方の外洋に産する個体のよう幅広い鰭状にまでは発達しない。水管はやや長く直線的。



1: 名古屋市名古屋港沖 (ドレッジ水深 5–15 m), 2008 年 10 月 9 日,
2: 伊勢湾湾口部 (勢水丸ドレッジ水深 20 m), 2014 年 12 月, 3: 南知多町内海沖 (ドレッジ水深 10–15 m), 2000 年 7 月 27 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

死殻は名古屋港沖 (図 1)、知多半島沖 (伊勢湾)、日間賀島沖 (三河湾湾口部)、伊勢湾口部 (図 2) で少ないながら近年も採集されている。本種の生息を裏付ける試料は、2000 年に知多半島内海沖の水深 10 m よりドレッジで得られた軟体部の残存した 1 個体 (図 3) だけである。

【世界および国内の分布】

北方系の種で、南サハリン、南千島に分布し、日本では相模湾、日本海北部以北の潮間帯から水深 30 m に分布する (土屋, 2017)。瀬戸内海での現在の生息状況は不明。

【生息地の環境／生息的特性】

伊勢湾、瀬戸内海では本種が潮間帯に生息するという記録はなく、瀬戸内海では潮下帯から水深 60 m に生息すると記録されている (稲葉, 1982)。生息水深のやや深い本種の生息環境についての情報はほとんどなく、本種の生息を裏付ける試料が採集された 2000 年の知多半島内海沖の生息環境について記述する。

当時は中部国際空港造成のための埋め立てが行われる前で、反時計回りで伊良湖水道から外洋水が伊勢湾内を環流しているが、その影響を受け潮通しがよく水深 10 m までは底質に硫化水素の発生がなく、透水性の高い有機質の少ない砂底で、ナメクジウオ (原索動物) が普通に生息していた (木村, 2000; 木村, 2009)。水深 15–27 m ではやや泥分が多くなるが、礫混じりの貝殻底で多様な貝類の生息が確認できた (木村, 2000)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域にはほとんど存在せず、減少の要因と考えられる。また、本種は冷水性貝類なので、温暖化、黒潮の大蛇行による海水温の上昇も減少要因となる可能性がある。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、瀬戸内海、伊勢湾の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- 稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18–20.
木村昭一, 2009. ナメクジウオ. in: 愛知県環境部 (編), 2009. レッドデータブックあいち 2009, 621p. 愛知県.
土屋光太郎, 2017. ツノオリイレ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 301, 964. 東海大学出版部, 平塚.
(木村昭一)

ヒラドサンゴヤドリ *Coralliophila jeffreysi* E.A. Smith**【選定理由】**

本種は、内湾の湾口部の潮下帯に生息するキサンゴ類に外部寄生する。本属の貝類は外洋性の種がほとんどで、本種は唯一内湾に生息する種であり、外洋には生息しない。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部、知多半島内海沖の伊勢湾から少数の死殻が採集されているだけで、生貝は採集されていない(中山, 1980：木村, 1996：木村, 2000)。内湾に生息するキサンゴ類は潮通しの良い岩礁に生息しており、このような環境は非常に少なくなっている。近年の三河湾島嶼域での調査でも死殻さえ確認されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



南知多町内海沖水深 10-27m(ドレッジ), 2000 年 7 月 27 日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 25 mm の紡錘型の貝で、殻は厚く太い強い縦肋を持ち、鱗片状の突起が発達する。殻は淡褐色で殻口は白色。カゴメガイ *Bedequina birileffi* (Lischke) はやや本種と近似するが、殻は小形で細く、殻表と殻口内は濃い紫褐色で殻表の鱗片状の彫刻が細かい。

【分布の概要】**【県内の分布】**

【選定理由】の項参照。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島。国内では三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

上述したように、県内潮下帯の環境を保全する。

【特記事項】

伊勢湾口からさらに外洋側の志摩半島沖のキサンゴ類には本種は寄生しない、数少ない内湾性のサンゴヤドリ類である。生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、少なくとも瀬戸内海、伊勢湾の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.

中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12. 名古屋貝類談話会.

(木村昭一)

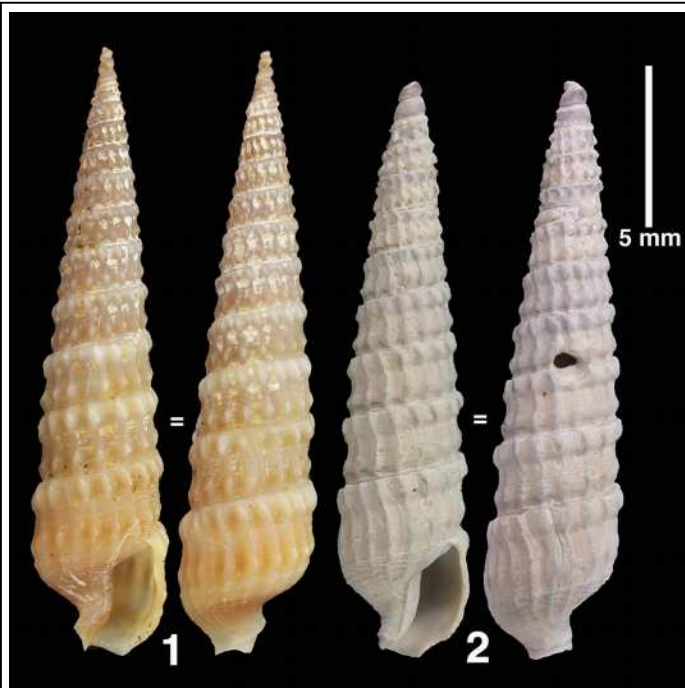
イボヒメトクサ *Granuliterebra bathyraphe* (E. A. Smith)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で死殻は少数採集されるが、近年ほとんど生貝が採集されていない(中山, 1980: 木村, 1996: 木村, 2000)。その後の調査でも非常に稀に死殻は採集されたが、生貝は採集されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 30 mm の細長い円錐型の貝で、殻は厚くやや強い縦肋があり、いぼ状の結節がある。



1: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10–20 m), 1995 年 2 月 9 日,
2: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深 5–15 m), 2008 年 10 月 9 日,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内の潮下帯では、近年生貝が採集されない。死殻の採集例も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、熱帯インド、西太平洋。国内では茨城県以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため、本種の生息場所、個体数ともに減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種は数少ない内湾性のタケノコガイ科貝類である。生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20. 名古屋貝類談話会.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10–12. 名古屋貝類談話会.

(木村昭一)

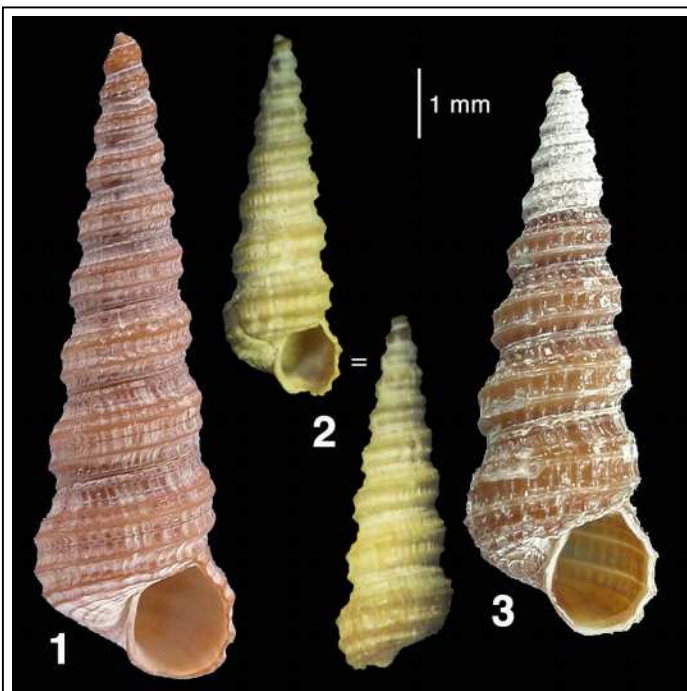
タクミニナ *Mathilda sinensis* P. Fischer

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻 (図 2) がわずかに採集されたが、生貝は採集されなかった (木村, 1996)。和田・他 (1996) では、現状不明 (絶滅寸前) とランクされている。その後の調査では、2008 年に名古屋港沖 (ドレッジによる調査) で殻の色彩と彫刻が比較的良く保存された死殻 (図 3) が少数個体採集されたが、以後死殻の採集報告例もない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 15 mm の細長い円錐型の貝。螺層の周辺には強く角張った螺肋が 4 本並ぶ。古い死殻では灰白色 (図 2) であるが、保存状態がよい (死後比較的時間が経過していない) 標本 (図 1, 3) では、殻の色彩は赤味の強い褐色であり、生貝の殻の色彩は羊羹色である (福田 宏氏私信)。



1: 名古屋市金城ふ頭サンドポンプ, 1978年頃, 河合秀高採集, 2: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10-20 m), 1995年2月9日, 3: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深 6 m), 2008年10月9日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では近年生貝が採集されておらず、死殻も稀産で 2008 年以降死殻の採集記録もない。河合 (2009) では、名古屋港金城埠頭が埋め立て地だった (1978 年) 頃にサンドポンプで採集された本種の死殻 (図 1) が図示、報告されている。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸沿岸、熱帯インド、西太平洋。国内では房総半島以南の内湾域の潮間帯下部から潮下帯に分布する。近年岡山県 (瀬戸内海) の潮間帯より生貝が 1 個体採集された (福田 宏氏私信)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では近年生貝を採集できない。死殻でさえ稀であり、10 年以上死殻の採集報告もなく、絶滅した可能性もある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010 (木村, 2010) では、本種と正しく同定された名古屋港沖産標本 (図 3) が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015 (木村 加筆 川瀬, 2015) では豊後水道産 (本種は豊後水道のような外洋には分布していない) の別種 (画像ではオオタクミニナと同定される) が図示されているので、ここに訂正する。

【引用文献】

- 河合秀高, 2009. 名古屋港のサンドポンプで得られた貝. かきつばた, (34): 20.
 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
 木村昭一, 2010. タクミニナ, p. 191. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
 木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. タクミニナ, p. 400. in: レッドデータブックなごや 2015 動物編. 503pp. 名古屋市環境局.
 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ウツセミガイ *Akera soluta* (Gmelin)

【選定理由】

本種は内湾から外洋にかけての藻場、アマモ場に生息する。内湾では潮下帯の砂泥底、アマモ場に生息し、戦前は比較的普通に見られたとされているが、近年全国的に産出の報告はない（和田・他, 1996）。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。またアマモ場も非常に減少している。本種については、標本調査の結果、1978年に幡豆郡一色町沖のアマモ場より採集された標本が見いだされたのみで、近年の調査では死殻さえ確認されていない（木村, 1996：木村, 2000）。和田・他（1996）では絶滅寸前にランクされている。引き続き、絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



幡豆郡一色町沖, 1978年, 採集者不詳

【形態】

殻長約 40 mm 程度の樽型の貝で、殻は薄く脆い。縫合部は切れ込み、蓋はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では現在全く生息が確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本、インド洋、オーストラリア。房総半島以南に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在生息は確認できない。死殻でさえ採集されない。危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

イソチドリ *Amathina tricarinata* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は、内湾の潮下帯砂泥地にすむ二枚貝類(タイラギ、イタボガキなど)に外部寄生する。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島南沖水深2-10 mの砂泥底より死殻がわずかに採集されたが、生貝は採集されなかった(木村, 1996)。近年、県内各地で殻皮の残された死殻が採集されるようになり(木村, 2017; 早瀬・木村, 2020)、知多半島内海海岸(伊勢湾)で生貝が確認された(佐藤・他, 2019)。しかし依然として生息域は著しく限定的で個体数は非常に少ない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



田原市伊良湖町伊良湖漁港, 2016年10月8日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約15 mmの笠型の貝。殻頂部から前縁部にかけて3本の強い肋が走る。殻は白色であるが、黄褐色の厚い殻皮に覆われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では長い期間生貝が採集されていなかったが、前述のように近年殻皮の残された死後間もない殻が採集されるようになり、生貝も採集された。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陆、フィリピン、国内では房総・男鹿半島～九州に分布する(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では近年生貝をほとんど採集できない。宿主であるタイラギ、イタボガキも著しく減少しているので、危機的な生息状況といえる。近年採集されるタイラギの殻上には移入種のシマメノウフネガイの大型個体が多数付着しているので、種間競争の結果、同じ様な場所を生息場所とする本種が減少した可能性がある(福田・木村, 2012)。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. イソチドリ, p. 83. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50(1): 33-79.
- 佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相. かきつばた, (44): 20-30.

(木村昭一)

マキモノガイ *Leucotina diana* (A.Adams)

【選定理由】

本種は、内湾から外洋にかけての潮下帯から水深 50 m ぐらいの砂泥地にすむ。二枚貝類に外部寄生するとされているが宿主は不明 (和田・他, 1996)。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻がわずかに採集されたが、生貝は採集されていない (木村, 1996)。その後の調査でも伊勢湾湾口部や渥美外海でドレッジや小型底引き網により死殻が稀に採集されているが、生息は確認できない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 30 mm の紡錘型の巻貝。殻はやや厚いが脆い。殻表には明瞭な螺肋が多数めぐらされる。殻は白色であるが、生時は黄褐色の薄い殻皮に覆われる。



渥美外海水深 100-120 m(底引き網), 1997 年 10 月 3 日,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では近年生貝が採集されず、死殻でさえもほとんど採集されない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布し、日本では大槌湾・新潟県～九州に分布する (福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では近年生貝は採集されていない。もともと普通種ではなかったが、近年伊勢湾湾口部から外洋で操業する底引き漁船でも死殻もほとんど採集されず、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. マキモノガイ, p. 86. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 385pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ヒメゴウナ *Monotygma eximia* (Lischke)**【選定理由】**

本種は、房総半島・男鹿半島～九州の、内湾湾口部～外洋にかけての、細砂底低潮帯から潮下帯に分布し、新鮮な死殻の採集例は少なくないが、生貝の採集例は稀である（福田・木村, 2012）。県下では三河湾湾口部、伊勢湾（知多半島南部沖）などで死後間もない死殻が採集されているが、生貝が採集されたことはない。また、2000年頃の知多半島内海沖の水深3–10 mの砂底からは、比較的多くの死後間もない死殻が採集されたが、近年は死殻さえ全く採集されない。生息水深帯がやや深いのでモニタリングは難しいが、生貝が全く採集されないという危機的な生息状況より、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。

【形態】

本種は殻長 20 mm の細長い円錐形で、殻全体に幅広く低い螺肋を巡らす。殻は光沢が強く、濃褐色から白色に近いものまで殻色には変異がある。殻質は比較的厚い。殻軸には弱い襞が1本ある。

【分布の概要】**【県内の分布】**

死殻は1970年代に金城埠頭沖のサンドポンプにより採集されたり（河合, 2010）、知多半島沖（伊勢湾）、日間賀島沖（三河湾湾口部）の潮下帯から水深10 mの砂泥底よりドレッジで少ないながら採集されている。しかし、生貝は少なくとも1980年以降採集されたことがない。また、生貝であると確実に認識できる標本（蓋の残された標本や液漬標本）も見つかっていない。

【世界および国内の分布】

房総半島・男鹿半島から九州の潮間帯から水深60 mに分布する（堀, 2017）。近年国内で生貝が採集されたという報告例はない。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢湾、三河湾では本種が潮間帯に生息するという記録はない。本種の生息環境についての情報はほとんどなく、本種の生息を裏付ける死後間もない死殻が採集された2000年の知多半島内海沖の生息環境について記述する。

当時は中部国際空港造成のための埋め立てが行われる前で、反時計回りで伊良湖水道から外洋水が伊勢湾内を環流しているが、その影響を受け、潮通しがよく水深10 mまでは底質に硫化水素の発生がなく、透水性の高い有機質の少ない砂底で、ナメクジウオ（原索動物）が普通に生息していた（木村, 2000；木村, 2009）。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域にはほとんど存在しないことが減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

2004年前後に蒲郡市三谷町地先の人工干潟で死殻が一時的に確認されたことがあるが、これは、その場所に生息していたわけではなく、三河湾湾口部（中山水道）より運ばれた浚渫土砂に含まれていたものと判断された（木村, 2004）。

【引用文献】

福田 宏・木村昭一, 2012. ヒメゴウナ, p.87. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

河合秀高, 2010. 名古屋のサンドポンプで得られた貝類 (その2). かきつばた, (36): 28–30.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18–20.

木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14–20.

木村昭一, 2009. ナメクジウオ. in: 愛知県環境部 (編), 2009. レッドデータブックあいち 2009, 621p. 愛知県.

堀 成夫, 2017. ヒメゴウナ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 467, 1123. 東海大学出版部, 平塚.

(木村昭一)



南知多町内海沖(ドレッジ水深2–5 m), 2000年7月28日,
木村昭一採集

ナラビオカミミガイ *Auriculastra duplicata* (L. Pfeiffer)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に生息する。県内ではヨシ原湿地が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。特に本種の個体数は少なく、県内で最もヨシ原湿地の環境が保全されている汐川干潟でも1998年以来生息が確認されていない。その後健全な個体群が1ヶ所で発見されたが、県内で生息が確認されているのは、現在個体群が消滅状態の汐川干潟を含めて3ヶ所に過ぎない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約8mmの小型種。殻は卵形で殻表は黄色、平滑で光沢が強い。オカミミガイの幼貝(図4)と近似するが、本種の縫合下にはオカミミガイに認められる顆粒列がなく、殻表は成長脈だけで平滑であるので区別できる(木村, 2012a)。汐川干潟の個体(図3)は、他の生息地の個体(県内だけでなく、日本各地に生息する個体)と比較して大型で、殻が太い(木村, 2012a)。



1, 2: 西尾市矢作川河口, 2009年7月15日, 3: 豊橋市汐川干潟, 1998年5月1日, 4: オカミミガイ(幼貝), 西尾市矢作川河口, 2009年7月15日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

木村・木村(1999)では汐川干潟1カ所のみで記録されたが、1998年以来生息を確認していない。2001年の調査で矢作川河口域に1カ所新たに生息地を確認し、その後の継続調査で健全な個体群の存在が確認された(木村, 2012b)。また、名古屋市庄内川河口の非常に狭い範囲で少数個体が確認された(早瀬・他, 2014)。

【世界及び国内の分布】

日本と中国南部。国内では三河湾、伊勢湾、英虞湾(河辺, 2000)、五ヶ所湾(木村, 2008)瀬戸内海、有明海、沖縄本島(沖縄型として区別される場合もある; 福田・他, 2012)に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。生息地が残されていても個体数が著しく減少している原因については不明である。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質を保全する必要がある。

【特記事項】

県内は本種の分布の東限である(木村, 2012a)。

【引用文献】

- 福田 宏・久保弘文・木村昭一, 2012. ナラビオカミミガイ沖縄型, p. 92. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む滅危惧貝類 5 種. かきつばた, (39): 31-36.
- 河辺訓受, 2000. 志摩地方採集・観察調査会報告. かきつばた, (26): 21-24. 名古屋貝類談話会.
- 木村昭一, 2008. 五ヶ所湾観察・調査会報告. かきつばた, (33): 51-54. 名古屋貝類談話会.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
- 木村昭一, 2012a. ナラビオカミミガイ, p. 92. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 木村昭一, 2012b. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, (3): 1-8, 2pls.

(木村昭一)

クリイロコミミガイ *Laemodonta siamensis* (Morelet)

【選定理由】

本種は、伊勢湾から南西諸島に分布するが、九州以北では生息地は少なく、湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息する。本種の分布の東限かつ北限は伊勢湾であるが、愛知県内では生息が確認されたことがなかった。2016年4月7日、初めて愛知県側の伊勢湾沿岸で本種の生息地が発見された(木村・他, 2019)ので、詳細な生息状況を報告する。本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てによって著しく減少しており、本種の生息基盤は脆弱である。現在県下に1箇所が生息場所とかつその著しく小さい生息面積を鑑み、きわめて絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

本種は殻長約7 mmの小型のオカミミガイ科貝類である。殻は卵形、殻表は強い螺肋で覆われ、殻口外唇に1個の歯状突起、内唇側に2個の歯状突起、殻軸に1個の歯状突起が発達する。クリイロコミミガイは殻頂が欠損することが多く(本土産個体に顕著)、殻表に毛状突起が生えないこと、殻口前縁が円く、前端が尖らないことなどの特徴から、近似種の*Laemodonta exaratoidea* Kawabe ウスコミミガイとは明確に区別される。



名古屋市庄内川河口, 2016年4月7日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市庄内川河口の塩性湿地(伊勢湾沿岸)の1箇所、その面積も著しく小さい。

【世界および国内の分布】

種としては、東南アジアに広く分布し、本州(愛知県;伊勢湾)から三重県側伊勢湾、五ヶ所湾、瀬戸内海、吉野川河口、博多湾、伊万里湾、九州西岸、有明海、八代海、八重山諸島に分布するが、前述の通り、南西諸島と九州以北では生息環境、生息状況、殻の形態に違いがある(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地に生息し、オカミミガイ科としてはやや低い地盤高に生息し、庄内川河口域の生息地では最高が2.38 m、最低が2.09 mであった。泥分の多い砂泥底に半ば埋もれた直径約30 cmの砂岩の裏面に、泥と共に2個体が寄り添って付着していた。同砂岩裏面には直径約3 cmの螺旋状に巻いた泥紐状卵塊が生み付けられていた(2016年4月7日)。本種の卵塊の形状は、紐状ではなく、ドーナツ状に幅広く重ねるウスコミミガイ(木村, 2012; 木村・木村, 2013)よりも泥紐状の卵塊を間隔をおいて螺旋状に巻くシノミミガイ(佐藤・木村, 2011; 木村・木村, 2013)に近似していた。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項を参照。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である湾奥の河口域に良好な状態に保全されたヨシ原湿地自体が護岸工事や埋め立てによって著しく減少しており、このようなヨシ原から陸上植生まで保全された塩性湿地(下流に堰が出来ると消失する)のこれ以上の破壊、埋め立てを行わないことが保全の第1歩である。

【特記事項】

愛知県における生息地は、2016年に初めて1箇所だけで確認された。この生息地は、本種の現在の分布域の北限かつ東限である。なお、本種は三河湾には分布しない。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. クリイロコミミガイ, p. 97. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 2012. ウスコミミガイ, p. 96. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一・木村妙子, 2013. オカミミガイ科. in: 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典(著) 干潟ベントスフィールド図鑑. pp. 40-41, 153-156. 日本国際湿地保全連合, 東京.
木村昭一・木村妙子・村山 稔, 2019. 愛知県(伊勢湾)で初めて生息が確認されたクリイロコミミガイ. かきつばた, (44): 40-43.
佐藤達也・木村昭一, 2011. 三重県鳥羽市に残されていたシノミミガイの繁殖地. かきつばた, (36): 49-52.

【関連文献】

- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾および伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌 54: 44-56.
(木村昭一)

キヌカツギハマシイノミガイ *Melampus sincaporensis* Pfeiffer

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。県内ではヨシ原湿地が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。2010年以降で生貝が確認された生息地は3ヶ所に過ぎず、健全な個体群は汐川干潟の狭い範囲のみに残されていたが、近年明らかに個体数が減少し、老成個体ばかりで、新規加入個体群が確認できなくなっている。ヨシ原湿地に特に変化が無く、他のオカミミガイ科貝類は減少していないが、本種だけに著しい個体数の減少が認められる。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約10mm、殻は卵形で殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻には褐色から黒色の色帯があり、その幅や本数は個体によって変異する。



生態画像：西尾市矢作川河口, 2009年7月15日, 殻画像：田原市汐川干潟, 1993年11月4日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

木村・木村(1999)は三河湾の2カ所(そのうちの1カ所は1995年の漁港整備工事によって生息地が消失)で生息を確認した。早瀬(1998)は伊勢湾奥の1カ所で2個体の生息を確認したが、この生息地は堤防補強工事に伴う塩性湿地内の工事用通路造成で完全に消失した(早瀬・他, 2014)。伊勢湾側での本種の個体群の消滅が危惧される。2002年に渥美半島小河川の河口部(三河湾)で新たに生息地を確認したが、個体数は非常に少なかった(木村・木村, 2002)。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆、シンガポール、国内では三浦半島(個体群消滅; 葉山しおさい博物館, 2001)以南、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、大村湾、有明海、八代海に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全する。

【特記事項】

県内は本種の現在確認されている分布の東限である。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
早瀬善正, 1998. キヌカツギハマシイノミガイ 庄内川河口に生息. かきつばた, (24): 12. 名古屋貝類談話会.
早瀬善正・川瀬基弘・木村昭一, 2014. 庄内川河口で確認された名古屋市新記録を含む滅亡貝類 5 種. かきつばた, (39): 31-36.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相. かきつばた, (28): 13-14. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2012. キヌカツギハマシイノミガイ, p. 99. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ヤマホトトギス *Arcuatula japonica* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部の水深 5-10 m の砂泥底より生貝が採集されたが、個体数はきわめて少なかった (木村, 1996)。その後の調査でも死殻さえ採集されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 20 mm。後方に広がる長方形の扁平な貝で、殻は非常に薄い。緑褐色の波状の小班が全面にある。殻皮は平滑で光沢が強い。



南知多町日間賀島南沖水深 10m(ドレッジ), 1995 年 3 月 15 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

1995 年に三河湾湾口部の潮下帯の砂泥底より小型の生貝が採集されたが、個体数はきわめて少なかった。またそれ以降、生貝はおろか死殻も採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では房総・能登半島～九州、沖縄島まで分布する (山下・木村, 2012)。フィリピンから *Arcuatula perfragilis* (Dunker) が報告されている (Poppe, 2017) が、本種と同種の可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少していると考えられ、現在は危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

山下・木村 (2012) で図示された標本は本種ではなくノジホトトギスである。ここに訂正する。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
- Poppe, G.T. 2017. Philippine Marine Mollusks Vol. V. 628pp. ConchBooks, Germany.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.
- 山下博由・木村昭一, 2012. ヤマホトトギス, p. 106. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

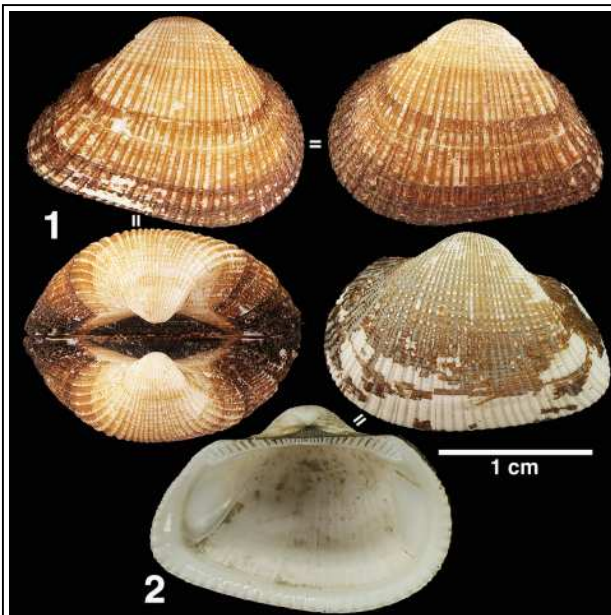
ヨコヤマミミエガイ *Verilarca interplicata* (Grabau et King)

【選定理由】

本種は内湾潮下帯のシルト泥質の多い砂泥底に生息する二枚貝である。1960年代には内湾域での底引き網漁によって生貝が採集されており、殻皮の残存した生貝より作製されたと思われる標本(三河一色水揚げ、底引き網漁で採集というラベルが多い)が比較的多くのコレクション中に見られる。近年、東海地方全域でも生貝が採集された記録はなく、県下での本種の生貝採集記録は、1994年10月に三河湾湾口部日間賀島南沖水深5-6mの砂泥底より採集された2個体(図1)が最後で、その後も死殻は採集されているが、生貝が確認されない。近年では殻皮の残った死殻さえ採集されることが稀である。生息水深帯がやや深いのでモニタリングは難しいが、近年生貝が全く採集されないという危機的な生息状況より、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。

【形態】

殻長約20mm、殻は前後に長い箱形で、前縁は丸く、後縁は腹縁に向かって斜めに突出し、先端は細まる。殻質は厚く、殻表には細いが強い放射肋が出る。生時には殻表は濃褐色のビロード状の殻皮で覆われる。潮間帯の転石・礫海岸を中心に生息するミミエガイ *Striarca symmetrica* (Reeve) とやや近似するが、本種の殻はやや大きく、殻皮が厚く、殻表の放射肋が強いので区別は容易である。また内湾奥の泥質干潟に生息する絶滅危惧種(国ランク; 絶滅危惧 I 類) ササゲミミエガイ *Estellacar galactodes* (Benson) とも近似するが、本種は殻表の放射肋が強いので区別は容易である。また生息水深帯も遙かに深い。



1: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深5-6m), 1994年10月3日, 2: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深15m), 2008年10月9日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

本種の県内での採集記録は、1960年代には多いが、1990年代に三河湾湾口部の潮下帯よりドレッジで生貝が採集されて以降、生貝の採集報告はない。その後の死殻の採集例は2008年10月に名古屋港沖(殻皮の残された死殻半片; 図2; 木村, 未発表資料)、知多半島内海沖、三河湾湾口部の水深10mまでの潮下帯で散見されるが、近年生貝が確認されていない。

【世界および国内の分布】

台湾、中国南部、房総半島から九州に分布する(松隈, 2017)。瀬戸内海、土佐湾の水深30mまでの潮下帯から2000年代に生息を確認しているが、個体数は非常に少ない(木村, 未発表資料)。三重県側の伊勢湾内、伊勢湾湾口部でも殻皮の残されていない古い死殻は近年も採集されているが、生貝は全く確認できない(木村, 未発表資料)。

【生息地の環境／生態的特性】

外洋に面した内湾の水深30mまでの潮下帯のシルト泥質の多い砂泥底に生息しているが、個体数は非常に少ない。県下での本種の最後の生貝採集記録のある、1994年10月三河湾湾口部日間賀島南沖水深5-6mの砂泥底では、シルト泥質も多いが、硫化水素が発生するような底質ではなく、内湾域潮下帯の泥質を生息環境とする貝類の多様性も高かった(木村, 2000)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述のように生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

愛知県のレッドデータブックの絶滅(EX)ランク選定に必要な「過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。」という要件が満たされていないので、絶滅とは評価されなかったが、絶滅した可能性の高い種と考えられる。生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26), 18-20.
松隈明彦, 2017. ヨコヤマミミエガイ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑[第二版]. pp. 513, 1169. 東海大学出版部, 平塚.

【関連文献】

日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

シコロエガイ *Porterius dalli* (E. A. Smith)

【選定理由】

本種は、内湾から湾口部にかけての潮間帯から潮下帯の転石に、足糸で付着して生息する。しかし、近年の生息記録はほとんどなく、わずかに山口県徳山市付近で生息が知られるのみである (和田・他, 1996)。県内でも三河湾湾口部の日間賀島南岸に比較的良好に保全された転石地があり、詳細な調査を行ったが、本種は生貝 1 個体が採集されたにすぎない (木村, 1995)。1998 年以降の調査の結果、県内では生貝はおろか、死殻さえ採集されていない。和田・他 (1996) では、危険とランクされている。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



南知多町日間賀島南岸水深 2m(ダイビング), 1994 年 7 月 2 日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 30 mm、殻は前後に長い楕円形で、両端は丸い。殻はやや厚く、膨らみは弱い。殻表は厚い殻皮で覆われ、殻皮は同心円状に毛羽立つ部分と栓皮状の部分交互にある。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在は生息が確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。北海道南部から瀬戸内海まで分布するとされているが、房総半島以南では近年生息が確認されている場所は非常に少ない。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾域の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。現在死殻も採集されず、危機的な生息状況である。本種は冷水性貝類で、近年の温暖化が影響している可能性もある。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

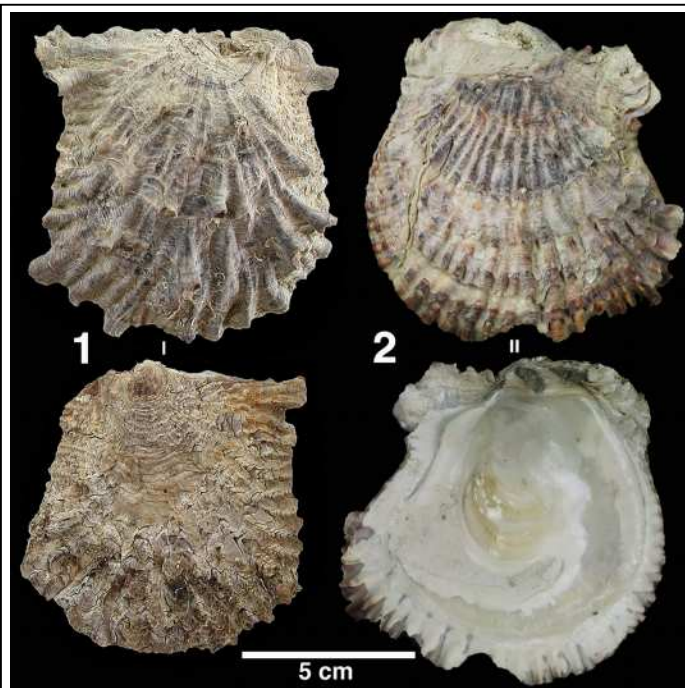
イタボガキ *Ostrea denselamellosa* Lischke

【選定理由】

本種は内湾の浅海域（潮下帯）の砂泥底に生息する大型のカキ類で、かつては食用にするほど多産したが、20年ほど前から分布全域で個体数が激減している。県内でも内湾域の潮下帯の環境は急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾湾口部で底引き網によって大量に採集され、食用にされていた（愛知県科学教育センター, 1967）が、日間賀島における生貝（図1）の採集記録（木村, 1995, 1996）を最後に全く生貝が採集されていない。近年では古い死殻さえ採集が難しい。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長10 cmを越える大型種。ほぼ方形で殻は厚い。左殻はやや膨れ、不規則な分岐肋が生じる（図1上, 2）。右殻はやや扁平で、桧皮葺き状（図1下）。



1: 南知多町日間賀島南沖(底刺し網), 1992年4月18日,
2: 名古屋市名古屋港沖(コアサンプラー水深15 m), 2009年5月30日,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現在生息が確認できない。2009年に名古屋港沖より採集された左殻は、色彩が良く保存された死殻（図2）であり、一見して現生個体の死殻と断定できる最後の採集例の可能性が高い。現在、大型種であるにもかかわらず古い死殻でさえ採集することは難しく、絶滅した可能性も高い。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆、国内では陸奥湾～九州に分布する（山下, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられるが、著しい減少の要因については不明。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第34報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 1996. ドレヅジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
山下博由, 2012. イタボガキ, p. 113. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

（木村昭一）

ヒナノヒオウギ *Mimachlamys asperulata* (A. Adams et Reeve)

【選定理由】

本種は、房総半島から沖縄の水深 20 m 以浅の岩礫底に分布するとされている (速水, 2017)。久保 (2012) は、殻の大きさや放射肋数の違いから奄美大島、沖縄島、台湾、東南アジアに分布する種を *Mimachlamys cloacata* (Reeve) ヒナノヒオウギの 1 種として本種とは区別した。

県下では伊勢湾湾口部の水深 10–30 m で操業されるトロール漁業で採集されることが多かったが、1980 年以降生貝はほとんど見られず、東海地方全域でも 1983 年に伊勢湾湾口部 (三重県鳥羽市沖水深 20 m) より底刺網によって採集された生貝 2 個体 (木村, 1983) が最後の生貝採集記録と思われる。2011–2015 年に行われた勢水丸 (三重大学生物資源学部) によるドレッジ調査で伊勢湾湾口部において古い死殻半片は少数採集されるが、生貝は採集されていない。生息水深帯がやや深いのでモニタリングは難しいが、非常に絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

本種は殻長 20 mm 前後で小型であるが、殻質は厚い。殻表には強い放射肋が 18 本前後出る。久保 (2012) が *Mimachlamys cloacata* (Reeve) ヒナノヒオウギの 1 種として区別した種は、殻長 50 mm 以上に成長し、放射肋数が 23 本内外と多いが、変異が大きく分類学的な再検討が必要である。



上段: 伊勢湾湾口部 (勢水丸ドレッジ水深 20 m), 2014 年 12 月, 下段: 伊勢湾口鳥羽市沖 (底刺し網水深 10 m), 1983 年 7 月 27 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾湾口部から渥美半島沖 (渥美外海) の水深 10–30 m で現在も古い死殻は採集されているが、生貝は全く採集されない。勢水丸のドレッジ調査でも伊勢湾湾口部から古い死殻半片が少数採集される程度で、生貝は採集されていない。

【世界および国内の分布】

久保 (2012) に従うと、本種は日本固有種ということになる。2000 年以降も、瀬戸内海、有明海 (木村, 未発表資料) で生貝は採集されているが、瀬戸内海でも著しい減少傾向が認められ (濱村陽一氏, 私信)、東京湾での現在の生息状況は不明。東海地方全域でも生貝が採集できない状況が 30 年以上続いている。

【生息地の環境／生態的特性】

前述の通り、本種は房総半島から沖縄の水深 20 m 以浅の岩礫底に分布するとされている (速水, 2017) が、久保 (2012) に従うと、本種の分布域は房総半島から九州である。速水 (2017) は本種が岩礫底に生息としたが、県内の生息環境は外洋に面した内湾域の水深 30 m までの礫混じりの砂泥底である。

1983 年に底刺網によって採集された生貝 2 個体が採集された海域 (鳥羽市沖) の生息環境は礫、貝殻混じりの透水性の高い砂底で、比較的普通にイタボガキ (現在は生息が確認できない) が見られ、巻貝ではオウウヨウラクが優占種で、オガイなどの現在では全く生息が確認できない種など、多様な貝類の生息が確認できた (木村, 1983)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域では著しく減少しているので、減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- 速水 格, 2017. ヒナノヒオウギ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 578, 1239. 東海大学出版部, 平塚.
木村昭一, 1983. 鳥羽市小浜の刺網の貝類相. 三重大学生物研究会. こむらさき, (8): 76–88 (謄写版).
久保弘文, 2012. ヒナノヒオウギの 1 種, p.115. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

【関連文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18–20.

(木村昭一)

コオキナガイ *Laternula impura* (Pilsbry)

【選定理由】

2002 年版愛知県レッドデータブックでは未記載種のオキナガイ属の一種 (本書でオヤイツオキナガイと和名新称した) がコオキナガイと誤同定され掲載されていたが、2009 年版愛知県レッドデータブックでは、コオキナガイは分布域から考えて生息していた可能性は高いが、愛知県内から確実な生息記録や標本が確認できないとして、レッドリストから削除され、オキナガイ属の一種のみがリストに掲載された。2011 年に実施した標本調査の結果、愛知県田原市汐川干潟で 1965 年に河辺訓受氏によって採集されたコオキナガイと確実に同定される 1 個体の標本 (右図) が見いだされた。これにより愛知県にも本種が生息していたことが明らかになった (木村, 2012)。

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。現在本種は死殻も全く採集されず、絶滅した可能性も高い。

【形態】

殻長約 40 mm で、殻は長楕円形で膨らみはやや強い。殻は白色で非常に薄く脆い。ソトオリガイ *Exolaternula liautaudi* (Mittre) と近似するが、殻の丸みが強く、後端が細まり尖る点で区別できる。また本種はソトオリガイでは認められる両殻をつなぐ殻帯 (殻の内側の靱帯受に接している) を欠く。



田原市汐川干潟, 1965 年, 河辺訓受採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、現在では生息は確認されず、死殻でさえ全く採集されない。県内の個体群は絶滅した可能性が高い。

【世界及び国内の分布】

房総半島～南西諸島、中国大陆に分布する (木村, 2012)。三浦半島 (葉山しおさい博物館, 2001) では絶滅 (相模湾の個体群が消滅) が報告された。南西諸島ではかつては健全な個体群が確認されていたが、護岸工事や埋立などで個体群ごと消失した例も多く、現在、佐敷干潟においてわずかな個体群が残存する他は壊滅的状況となっている (久保, 2017)。三重県英虞湾奥部の狭い範囲で少数の生きた個体が採集され、現在の分布東限と考えられる。瀬戸内海西部、九州西岸でも生息が確認されているが、生息地、個体数とも非常に少ない (木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

唯一標本の採集された汐川干潟で毎年モニタリングが行われているが、死殻も見られず生息が確認できない。上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
木村昭一, 2012. コオキナガイ, p.168. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
久保弘文, 2017. コオキナガイ, p.477. in: 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ -, 712pp. 沖縄県,

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

イセシラガイ *Pegophysema bialata* (Pilsbry)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に深く潜って生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻が少数採集されるが、長い期間生貝の採集記録がなかった(中山,1980:木村,1996:木村,2000)。2008年に名古屋港沖から生貝が採集された(図1左上;木村,2010)。その後、知多半島沖で軟体の入った死亡個体が記録されている(佐藤・他,2019)が、生貝は採集されていない。

【形態】

殻長約6cmをこえる、両殻共によく膨れ球形に近い。殻は薄く脆い。殻は黄白色であるが、生きている時や新鮮な死殻には茶褐色の薄い殻皮がある。



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深5-15m), 2008年10月9日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

2008年に名古屋港で生貝が確認されて以降、生息が確認できない。死殻も稀である。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、アンダマン海、インド、国内では北海道南部～九州に分布する(山下,2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや2010(木村,2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬,2015)では他府県産の標本に差し替えられている。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。

【引用文献】

- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2010. イセシラガイ, p. 195. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. イセシラガイ, p. 408. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12. 名古屋貝類談話会.
佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相. かきつばた, (44): 20-30.
山下博由, 2012. イセシラガイ, p. 116. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

コヅツガイ *Eufistulana grandis* (Deshayes)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本県では、内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は現在伊勢湾及び三河湾湾口部で稀に棲管が打ち上げられたり、潮下帯から比較的新しい棲管や半片死殻が採集されるが、生息が確認できない(木村, 1996; 2000)。近年、三重大学生物資源学部実習船勢水丸のドレッジ調査で、伊勢湾湾口部から棲管と共に内在する殻まで保存された死後間もない個体が採集され、現在も県下に生息していると判断された。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長 40 mm で殻は白色で長方形(図 2, 4, 6)。全長 100 mm を越える細長い石灰質の棲管(図 1, 3, 5)を分泌してその中に生息する。棲管は先端部分を残して、底質中にほぼ垂直に埋もれる。棲管の外側表面には砂粒やサンゴの破片等周囲の底質を付着させている。



1, 2: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10-20 m), 1994 年 10 月 3 日, 3-6: 南知多町師崎沖(ドレッジ水深 10-20 m), 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾及び三河湾湾口部から渥美外海にかけての潮下帯に生息していると考えられる。

【世界および国内の分布】

日本、インド・太平洋に広く分布する。国内では、房総半島以南から南西諸島の、内湾から湾口部にかけての低潮線から潮下帯の砂泥底に分布する。沖縄島では羽地内海の干潟で生貝が確認されているが、沖縄島周辺以外の干潟域で本種の生息が確認されている場所はほとんど無い(木村・久保, 2012)。また、沖縄島では潮下帯に健全な個体群が確認されているが、本州から九州では潮下帯においても棲管がかろうじて採集されることはあるものの、近年生きた個体が採集された記録は無い(木村・久保, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に石灰質の長い棲管を分泌して、その中に生息する。その他の生態的特性については不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】の項参照。上述したように県内の潮下帯は環境が悪化しているので、本種の生息場所、生息数とも減少している。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。内湾から外洋域、干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一・久保弘文, 2012. コヅツガイ, p.153. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

【関連文献】

- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.

(木村昭一)

オウギウロコガイ *Galeommella utinomii* Habe

【選定理由】

愛知県内では、三河湾の3箇所と知多湾の1箇所ですべて5個体の生貝が確認された。伊勢湾(南知多町内海海岸)でも死殻が1個体確認され、生息の可能性はある(佐藤・他, 2019)。全国的にも希少な種であり、愛知県内での生息記録は、きわめて貴重である。近年、愛知県内における生息が知られたばかりの種であり、減少傾向は把握できない。しかし、県内では本種が生息する良好な内湾環境や潮間帯の環境が高度経済成長期に激減したため、本種の生息環境はきわめて限られていると推測できる。したがって、この限られた環境が維持されなければ、本種は愛知県内から絶滅する可能性がきわめて高いと考えられる。

【形態】

殻長5~7 mm程度の小型種である。殻は白色半透明できわめて薄く、放射肋が明瞭である。生時は、軟体(外套膜)が殻を包み込み、先端部のみが赤い細長い突起が伸びる。本種の活動時は、腹足類(巻貝類)のように足で匍匐するので、一見すると、ミノミウシ類のようである。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、前島・梶島・佐久島(三河湾)(早瀬・他, 2015, 2016; 早瀬・木村, 2020)の3島と河和(知多湾)(早瀬・木村, 2017)において生貝が確認されている。いずれも潮間帯の埋没石の下より確認されている。死殻は伊勢湾(南知多町内海海岸)で確認されている(佐藤・他, 2019)。

【世界および国内の分布】

東京湾~九州に分布し、日本固有種の可能性が高いとされる(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾環境の、潮間帯の埋もれた石の下に付着して生息する。周辺が還元環境となっていて、かつ淡水が滲出する特殊な埋没石下の微環境のみに生息する。ツヤマメアゲマキとは同所分布する(早瀬・他, 2015; 早瀬・木村, 2017)。生時のミノミウシ類に似た軟体の特徴や動きは、外敵防御のための擬態と考えられている(大貫・早瀬, 2016; Ohtsuka et al., 2017)。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生息確認地においても、多数の個体が確認されることはない。きわめて特殊なマイクロハビタット(微生息環境)のみに生息すると考えられる。したがって、本種の生息には、きわめて多様性に富んだ良好な潮間帯の環境が必要である。内湾環境の開発が進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は著しく狭められ、限られた場所のみとなっている可能性が高い。

【保全上の留意点】

本種の生息環境の維持には、内湾環境の保全と共に、潮間帯の転石地環境や藻場、アマモ場環境などの様々なマイクロハビタット(微生息環境)をも保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

本種をはじめ、埋没石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境棲貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要性がある。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相, ちりばたん, 47(1-4): 28-42.
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50(1): 33-79.
 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.
 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりばたん, 45(3): 105-122.
 木村昭一・福田 宏, 2012. オウギウロコガイ, p.159. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
 Ohtsuka, S., Hasegawa, K., Kimura, T., Miyake, H., Kondo, Y., Iida, K., Pagliawan, H. & Metillo, E., 2017. Possible mimicry in the Galeommatid bivalves *Scintilla philippinensis* (Bivalvia: Galeommatidae) to nudibranchs and crabs. *Venus*, 75(1-4): 93-98.
 大貫貴清・早瀬善正, 2016. 貝類, pp.194-231. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幅豆の海と人びと, 口絵14+xvii+362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.
 佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相, かきつばた, (44): 20-30.

【関連文献】

- 多々良有紀・福田 宏, 2009. 東京湾小櫃川河口産オウギウロコガイ(二枚貝綱: マルスダレガイ目: ウロコガイ科), *Molluscan Diversity*, 1(1): 12-17.

(早瀬善正)

マゴコロガイ *Peregrinamor ohshimai* Shôji

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化・特殊生息環境が選定理由としてあげられる。本種は、河口域の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ類の頭胸部腹面に足糸で付着する。本県では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。このような状況から本種も明らかに生息場所、生息数とも激減していると考えられる。本種は 1980 年代に三重県側の伊勢湾からは生息記録がある (木村・山本, 1990) が、愛知県からは分布の概要に記したとおり名古屋市沖 (伊勢湾) から 1 個体採集されたに過ぎない (木村, 2010, 2012)。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 10 mm。貝殻は両殻を合わせて背面から見るとハート型で、和名はその外形および付着部位にちなむ (庄司, 1938)。



名古屋市名古屋港沖 (ドレッジ水深 6 m), 2008 年 10 月 9 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

2008 年のドレッジ調査で名古屋港沖の水深約 6 m の泥底に生息していたアナジャコ類の頭胸部腹面に付着した 1 個体のみが採集された。この名古屋港沖合の採集記録が県内からの初めての記録である。藤前干潟にもアナジャコ類は多産するが、本種が採集された記録はない (木村, 2010)。その後も愛知県内では生息記録はない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ記録されている。タイプ産地は東京湾 (庄司, 1938) で、伊勢湾、瀬戸内海、九州の内湾域に分布する。東京湾からは原記載以来採集記録はなく、愛知県名古屋市が現在知られている分布の東限、北限である (木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一・山本妙子, 1990. マゴコロガイを伊勢湾で採集. ちりばたん, 21 (1・2): 12-13. 日本貝類学会.
木村昭一, 2010. マゴコロガイ, p. 194. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一, 2012. マゴコロガイ, p. 162. in: 日本ベントス学会 (編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
庄司幸八, 1938. 珍しい共棲二枚貝マゴコロ貝. Venus 8(3-4): 119-127. 日本貝類学会.

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版 (南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

イソカゼ *Basterotia gouldi* (A.Adams)

【選定理由】

本種は内湾の干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の干潟から潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も三河湾湾口部では殻皮の残された比較的新しい死殻が少数採集されるが(木村, 1996, 2000)、今まで県内で生貝が採集された記録もない。本種はミドリユムシ類の巣穴に棲むという特殊な生態をしており(木村, 2012)、ミドリユムシ類という宿主(宿主)が県内でほとんど報告例がないので本種も危機的生息状況である。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 7 mm で卵形の貝で白色、殻はやや厚い。殻頂は前方へ寄り、前へ傾く。生時には殻の外縁を越える淡褐色の殻皮で覆われている。



南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10-20 m), 1994 年 10 月 3 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現在生息が確認できない。合併の標本は死殻でさえ採集することが難しく(木村, 1996)、絶滅した可能性もある。

【世界及び国内の分布】

日本以外からの生息記録はなく、日本固有種の可能性が高い。房総・男鹿半島以～九州まで分布する(木村, 2012)。勢水丸のドレッジ調査では、近年伊勢湾湾口部の水深 40 m 程の砂礫底より比較的新しい死殻が多数採集されたので、伊勢湾の三重県側では個体群が維持されている可能性が高い。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

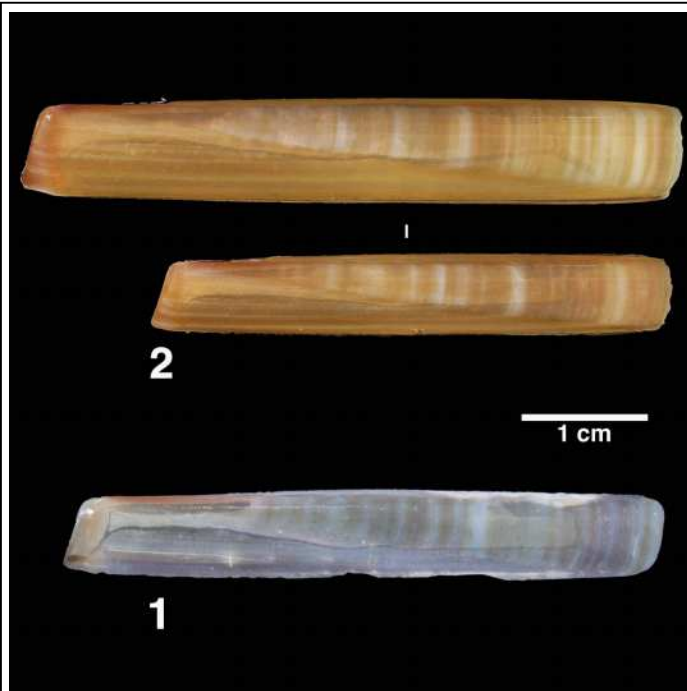
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2012. イソカゼ, p. 153. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ダンダラマテガイ *Solen kurodai* Habe

【選定理由】

本種は清浄な干潟や潮下帯の細砂底に生息する。本種は新種記載時に三河湾産の標本が使用された (Habe, 1964) が、それ以来県内において生息に関する記録はない。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少し、潮下帯の環境も著しく悪化している。1999 年からの 3 回 (30 地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した結果、本種は死殻さえ採集されていない (木村, 2000)。近年では、2016 年に渥美半島沖で操業した底引き船の漁業残渣より 1 個体半片死殻 (図 1) が採集されたのみである。その他の調査では死殻も確認されていない。和田・他 (1996) では、危険とランクされている。引き続き絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



1: 渥美半島伊良湖沖(トロール漁), 2016 年 8 月 9 日,
2: 神奈川県逗子市, 2003 年 7 月 25 日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 50 mm、殻は前後に著しく延長した長方形で、膨らみは弱い。殻はやや薄く、両端は裁断状となる。殻の後部には後端と平行な赤色の条線がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

近年生息が確認できない。2016 年に古い死殻がかろうじて採集されたが、本種の現在の生息を証明できるような試料ではない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。房総半島以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。現在死殻さえほとんど採集されず、危機的生息状況である。絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- Habe, T., 1964. Razor Shells in Japan and its Adjacent Areas. Bulletin of National Science Museum 7 (1): 7-16.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

バラフマテ *Solen roseomaculatus* Pilsbry

【選定理由】

本種は内湾の干潟の下部から潮下帯の砂泥底に潜って生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少し、潮下帯の環境も著しく悪化している。本種も、日間賀島の潮間帯や同島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻がわずかに採集された（図 1）が、生貝は採集されていない（木村，1996）。また、1999 年からの 3 回（30 地点以上）、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した結果、生貝は採集されず少数の死殻が採集されたにすぎない（木村，2000；木村，未発表資料）。その後の調査でも生息が確認できない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 50 mm、殻は前後に著しく延長した長方形で、背中側にそる。膨らみは弱い。殻はやや薄く、両端は裁断状となる。殻表全面に赤色の小斑が散在する。



1: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10-20 m), 1994 年 10 月 3 日, 木村昭一採集, 2: 伊勢湾口部鳥羽市沖(ドレッジ水深 10-20 m), 2015 年 4 月, 佐藤達也採集

【分布の概要】

【県内の分布】

生息場所、個体数が減少していて、近年生貝が採集されない。三重県側を含めた伊勢湾全域でも、近年生貝が採集されたのは、伊勢湾湾口部鳥羽市沖の幼貝（図 2）数個体だけである。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陆、台湾、アフリカ東岸、オーストラリア等、熱帯インド・西太平洋と広い分布記録があるが、近似種との混同した可能性があり、再検討が必要である（福田，2012）。国内では房総・能登半島以南に分布する（福田，2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。死殻も稀で、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. バラフマテ, p. 170. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

（木村昭一）

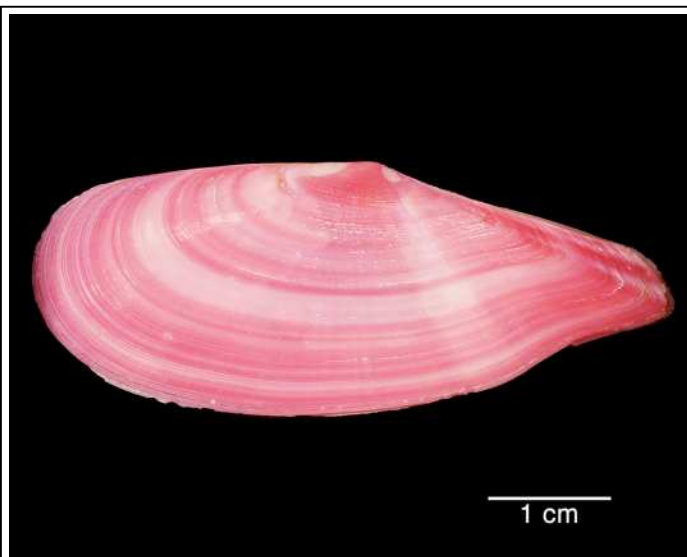
ベニガイ *Pharaonella sieboldii* (Deshayes)

【選定理由】

本種は湾口部から外洋に面した海岸の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、本種も明らかに生息場所、個体数とも激減している。

本種もかつては知多半島伊勢湾側、渥美半島外海側で新鮮な死殻が比較的多く打ち上げられていたが、近年は全く採集できない。1999年から3回（30地点以上）におよび知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部をドレッジにより調査したが、古い死殻も採集されなかった（木村, 2000；木村, 未発表資料）。

近年の調査では、比較的大型の二枚貝で目立つ本種の死殻破片さえ採集できない。県内での危機的な生息状況から絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された（前回 EN からランクアップ）。



渥美半島赤羽沖（小型底引き網水深 10 m）, 1984 年 4 月 23 日,
鈴木秋男採集

【形態】

殻長約 60 mm で、殻は前後に長く、特に後縁は吻状に長くのびて、右にねじれ、後端は尖る。殻はやや薄く鮮やかな桃色で、膨らみは弱く扁平。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が著しく減少し、近年生貝が採集されない。本種はやや外洋性で、やや深い水深帯まで生息するので、渥美外洋の水深 20 m より深い場所に生息域が残されている可能性があり、外洋にかけての浅海で操業する底引き網での調査も行ったが、近年死殻も全く採集できない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では、北海道南部～九州に分布する（山下, 2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。近年生貝の採集記録がないので、危機的生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

勢水丸（三重大学生物資源学部）による三重県側の伊勢湾湾口部のドレッジ調査でも近年死殻も確認できず、伊勢湾湾口部を含めて伊勢湾全域で本種が絶滅した可能性が高い。なお志摩半島の英虞湾では、かろうじて合弁の死殻が現在も確認できる（木村・佐藤, 未発表資料）。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
山下博由, 2012. ベニガイ, p127. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

オオモモノハナ *Platetellina praetexta* (Martens)

【選定理由】

本種は湾口部から外洋に面した海岸の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種もかつては知多半島伊勢湾側、渥美半島外海側で死殻が打ち上げられていたが、近年はほとんど採集することができない。1999年からの3回(30地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した結果、生貝は採集されず、少数の死殻が採集されたにすぎない(木村, 2000; 木村, 未発表資料)。その後の調査でも死殻が稀に採集されているが、生貝は確認できない。引き続き絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



伊勢湾湾口部水深 12m(三重大学勢水丸ドレッジ), 1997年3月28日, 木村昭一採集(死殻)

【形態】

殻長約 35 mm で、殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、桃色で成長脈に沿って色彩の濃淡がある。後背縁は張り出して後端はとがる。

【分布の概要】

【県内の分布】

生息場所、個体数が減少し、生貝が採集されない。近年でも、三浦半島、九州北部などでは打ち上げ採集で普通な種であるが、伊勢湾・三河湾では湾口部を含めて死殻さえ稀な種となっている。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆、台湾、日本では北海道南部～九州に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。近年生貝が採集されない。また、死殻もほとんど採集できない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2012. オオモモノハナ, p. 123. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

アオサギガイ *Psammacoma gubernaculum* (Hanley)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも激減している。本種は知多湾南部で底引き網によりわずかな死殻が採集された(中山, 1980)が、その後長らく死殻の採集記録もなかった。2008, 2009年に名古屋港沖の砂泥底より殻皮の残された合弁の死殻(図示標本)が少数採集された(木村, 2010)。その後の調査では死殻も得られていない。和田ら(1996)では危険とランクされている。引き続き絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深6 m), 2008年10月9日,
木村昭一採集

【形態】

殻長約 45 mm で、殻は長い卵形で膨らみは弱く扁平。殻はやや薄く、白色で殻頂部はやや青みを帯びる。後背縁は短く直線的。

【分布の概要】

【県内の分布】

生息場所、個体数が減少し、知多湾南部、名古屋港沖より死殻の採集記録があるが、近年では死殻さえ採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、東南アジア。国内では房総半島から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。近年死殻さえ採集されず、危機的生息状況である。絶滅した可能性もある。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

レッドデータブックなごや2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の合弁死殻標本(図3)が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では産地不詳の本種(と思われる)が図示された。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。ましてや、産地不詳の標本は同定面での不確定要素もあるので掲載するべきではない。

【引用文献】

- 木村昭一, 2010. アオサギガイ, p. 197. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. アオサギガイ, p. 410. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

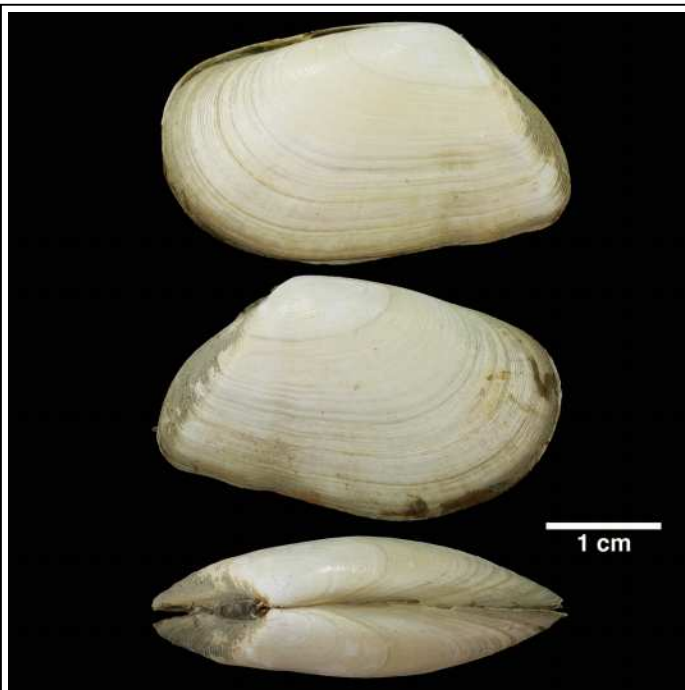
アワジチガイ *Sylvanus lilium* (Hanley)

【選定理由】

本種は、湾口部から外洋に面した海岸の潮間帯直下から水深 50 m の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾湾口部で新鮮な死殻が採集されたが (原田一夫氏私信)、1999 年からの 3 回 (30 地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した結果、死殻も採集されなかった (木村, 2000; 木村, 未発表資料)。1998 年に渥美外海で操業した底引き船の漁業残渣より 1 個体死殻が採集されたのみである。その後の調査では死殻も確認されていない。和田・他 (1996) では現状不明にランクされている。引き続き絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 40 mm で、殻は前後に長い長楕円形。殻長は後端により後端は尖る。殻はやや薄く、鈍いクリーム色で、膨らみは弱く扁平。



渥美半島沖(トロール漁), 1998 年 5 月, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

生息場所、個体数が減少し、近年死殻さえ採集されない。

【世界及び国内の分布】

日本、中国。国内では房総半島から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

もともと多産した種ではないが、上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。近年死殻の採集記録もない。危機的生息状況といえ、絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

フジナミガイ *Hiatula boeddinghausi* (Lischke)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての砂泥干潟から潮下帯に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は分布全域で生息場所が減少し（和田・他、1996）、近年健全な個体群が保存されている場所は瀬戸内海の一部に限られている（山下、2012）。三重県側の伊勢湾では、1980年代半ばまでは死殻が打ち上げられて採集される場所があったが、現在そのような場所は確認されていない。県内の伊勢湾や三河湾でも近年生貝はおろか、死殻さえ採集されていない。近似種で生息環境もよく似ているムラサキガイに回復傾向が認められているのとは対照的に、絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



三重県津市(伊勢湾), 1982年10月5日, 木村昭一採集(打ち上げ死殻)

【形態】

殻長約 10 cm、殻は大型で楕円形。殻はやや厚く濃い紫色と薄い紫色のだんだら模様。殻表は平滑で、褐色の厚い殻皮に覆われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

近年生息が確認できない。大形種で殻は目立つが、死殻さえ全く採集されていない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では岩手県・男鹿半島～九州まで分布する（山下、2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。現在死殻も採集されず、危機的な生息状況である。絶滅した可能性も高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏、1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.
山下博由、2012. フジナミガイ, p. 135. in : 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

（木村昭一）

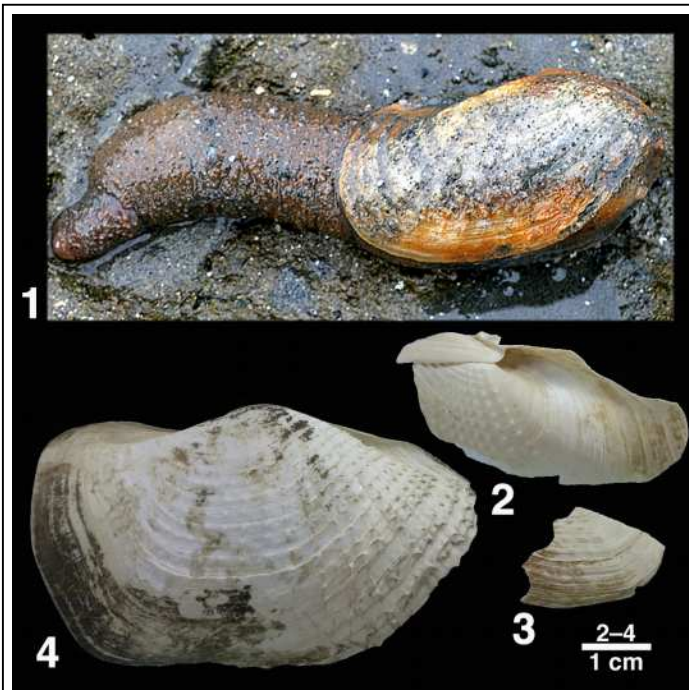
ウミタケ *Barnea japonica* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の泥底に生息する。かつては房総半島以南の内湾から記録されていたが、有明海以外での最近の記録はきわめて少ない (和田・他, 1996)。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化している。本種は、1997年三重大学実習船勢水丸のベントス調査によって伊勢湾湾口部 (水深 12 m) で死殻破片、名古屋港沖で 2008, 2009 年に死殻破片 (図 2, 3) が数個体採集されていたが、生息は確認されていなかった。2009 年汐川干潟で生貝が 2 個体採集された (西, 2010 ; 図 1)。その他の海域では死殻も稀にしか見られない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 8 cm で、殻質は薄く脆い。殻の膨らみは強い。殻は白色で、生きている時はやや厚い殻皮を被る。殻の前端は丸みを帯び、後端は斜めに裁断状で両端とも大きく開く。後域にはやや長く強い棘が並ぶ。



1: 豊橋市汐川干潟, 2009 年 7 月 22 日, 西 浩孝撮影, 2, 3: 名古屋市名古屋港沖 (ドレッジ水深 5–15 m), 2016 年 10 月 25 日, 4: 福岡県柳川市沖, 1999 年 8 月 30 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

近年汐川干潟で生貝が採集されたが、その他の海域では死殻も稀である。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾、中国、東南アジア。国内では房総半島以南、瀬戸内海、有明海に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

西 浩孝, 2010. 三河湾で絶滅危惧種の二枚貝ウミタケの生息を確認. 豊橋市自然史博物館研報, (20): 15–17.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

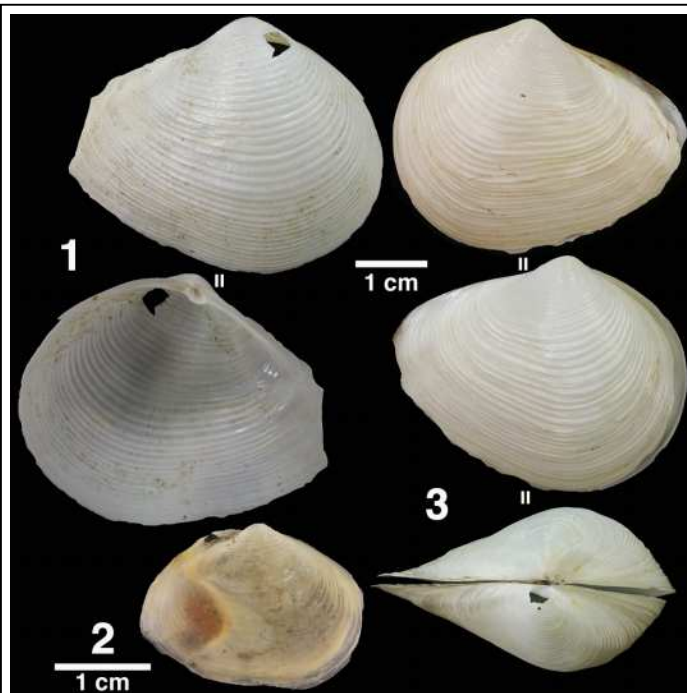
ヤチヨノハナガイ *Raeta pellicula* (Reeve)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で死殻が採集されたが、生貝が採集されない(中山, 1980: 木村, 1996: 木村, 2000)。その後、2016年に名古屋港沖(水深5–15 m)よりドレッジで1個体生貝(図2)が採集された。しかし、それ以外では生貝は記録されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約40 mmで殻は白色で非常に薄くやや膨らみ、殻皮は光沢が強い。前縁は丸く、後縁は狭く裁断状となる。内湾の貧酸素層の発達する海底に多産するチヨノハナガイと近似するが、本種は大型で、殻表の輪肋が多く密で光沢が強い点で、区別は明確である。生きた個体では殻が薄いので軟体部が透視できる(図2)。



1: 南知多町内海沖(ドレッジ水深10–15 m), 2000年7月27日,
2: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深5–15 m), 2016年10月25日,
3: 伊勢湾湾口部(勢水丸ドレッジ水深20 m), 2014年12月,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

2016年の名古屋港沖の1個体以外、生貝が確認できない。死殻でさえ採集することは難しい。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、台湾、フィリピン、東南アジア、日本では福島・兵庫県～九州に分布する(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。ほとんど生貝が採集されないで、危機的な生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ヤチヨノハナガイ, p. 143. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野. 285pp.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20. 名古屋貝類談話会.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10–12. 名古屋貝類談話会.

(木村昭一)

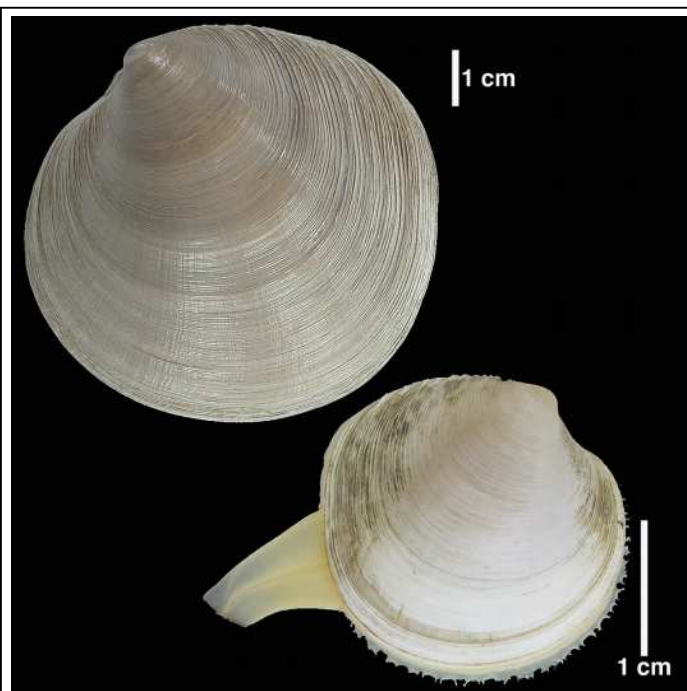
ウラカガミ *Dosinia corrugata* (Reeve)

【選定理由】

本種は陸奥湾から九州の内湾の砂泥底から記録されていたが、近年分布全域で稀な種になっていて、東京湾では絶滅したらしい(和田・他, 1996)。1960年代には衣浦湾(知多湾奥)などの内湾奥で新鮮な死殻が採集されていたが、衣浦湾の生息地は埋め立てられ絶滅した(原田一夫氏私信)。近年生貝が確認、報告されたのは、2008年に名古屋港沖の水深5-10 mのシルト泥底で採集された2個体の1例のみである(木村, 2012)。2009年には名古屋港沖(水深5-15 m)で合弁の死殻が比較的多く採集された(木村, 2010)が、2016年の調査では合弁死殻は全く採集されず、死殻の個体数も非常に少なかった。現在県内では古い死殻が稀に採集される程度で、危機的な生息状況である。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約6 cm、殻はやや角張った円形で殻質は厚いが、膨らみは弱い。殻は淡褐色から白色で、殻表には密な輪肋がある。近似種の *D. japonica* カガミガイとは殻の膨らみが弱く、外形が角張った円形であることで区別される。



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深5-15 m), 2008年10月9日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

死殻も稀で、近年生息が確認できない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。陸奥湾から九州に分布するとされるが、近年の生息記録はない。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。現在死殻さえほとんど採集されず、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種はレッドデータブックなごや2004(木村, 2004)では名古屋港沖の本種が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では韓国産の標本が図示された。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。ましてや、本種は韓国産と日本産とでは殻形態に相違があり掲載するべきではない。

【引用文献】

- 木村昭一, 2010. ウラカガミ, p. 199. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一, 2012. ウラカガミ, p. 149. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一 加筆 川瀬弘弘, 2015. ウラカガミ, p. 413. in: レッドデータブックなごや2015 動物編, 503pp. 名古屋市環境局.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ハナグモリ *Glaucanome angulata* Reeve

【選定理由】

本種は内湾奥の泥質干潟に生息する種で、近年東京湾や瀬戸内海沿岸の都市近郊では激減している（和田・他、1996）。県内内湾域に広く分布していたと思われるが、2009年以前に本種の生息状況に関する記録はない。汐川干潟で1965年に採集された生貝標本(図上段)が確認され、伊勢湾奥の金城埠頭が埋立地であった1977年頃、殻皮の残った合弁死殻が採集された(河合、2009；図下段)。現在県内では死殻が採集される場所も確認されていない。県内での本種の生息に関する資料はこの2標本しか確認されていない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。



上段：田原市汐川干潟，1965年，河辺訓受採集。
下段：名古屋市金城ふ頭サンドボンブ，1978年頃，河合秀高採集

【形態】

殻長約25 mm、殻は前後に長い楕円形で、膨らみはやや強い。殻は薄く、黄褐色の厚い殻皮を被る。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在生息が確認できない。死殻が採集される場所もない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、国内では房総半島～瀬戸内海～有明海・八代海、沖縄島、西表島に分布する（山下、2012）。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような内湾奥部の干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。現在死殻さえ採集できないので、危機的生息状況といえる。内湾奥干潟域のモニタリングは重点的に行われているにもかかわらず、死殻も見出せない事は本種の絶滅の可能性が非常に高い現状を示している。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館（2001）では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 葉山しおさい博物館，2001. 相模湾レッドデータ 貝類，104pp.
河合秀高，2009. 名古屋港のサンドボンブで得られた貝. かきつばた，(34): 20.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.
山下博由，2012. ハナグモリ，p. 139.in：日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック，285pp.東海大学出版会，秦野.

（木村昭一）

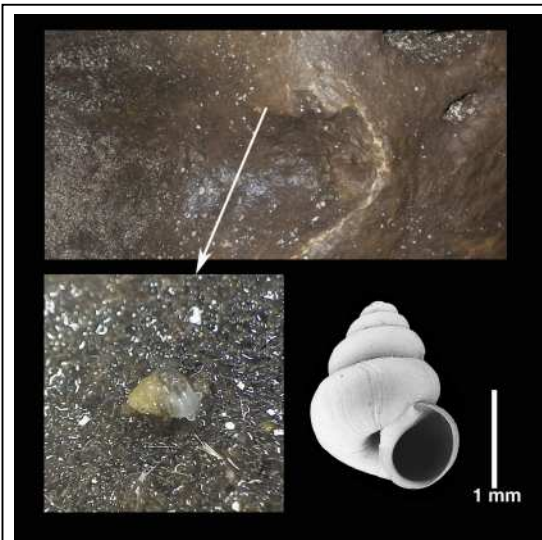
ホラアナゴマオカチグサ近似種 *Cavernacmella* aff. *kuzuensis* (K. Suzuki)

【選定理由】

これまで日本全国の洞窟棲の近似種は、全てホラアナゴマオカチグサ一種とされていた。しかし、洞窟ごとに種レベルの遺伝的分化が認められ、洞窟ごとに別種であると発表された(亀田・他, 2008)。したがって、愛知県の個体群も未記載の愛知県固有種と判断され、希少性もこれまで以上に高いものとなる。環境省レッドデータブック(2014)では、これら日本産全てをホラアナゴマオカチグサとし、絶滅危惧 I 類として扱っている(増田, 2014)。県外の近似種と同様に、愛知県下の個体の生息地も狭い石灰洞窟内に限定されることから、同様の高いランクの絶滅危惧種に位置付けられると判断した。本種の明確な減少傾向は調査されていないが、狭い僅かな範囲の洞窟内は、人が制限無く出入りできる状態であり、乾燥化や踏み荒らしなど環境悪化が進行している事は事実であり、現状では、きわめて絶滅の危険性が高い種と考えられる。

【形態】

成貝と考えられる個体は、殻長 1.4~1.9 mm、殻径 1.0~1.4 mm 程度で縫合の括れが明瞭なタニシ形(円錐~長円錐状)の微小種である。殻は、大きさの割にはやや厚いため、洞窟内部堆積物中には死殻が多数累積して残存する。殻表は平滑で生時は無色半透明であるが、堆積物中などの死殻は純白となる。蓋は淡黄色で、きわめて薄い革質の少旋型である。臍孔は、狭いが深く明瞭に開口する。軟体は白色で、殻を透過して背面側には、消化管配置に従い並ぶ粒状の糞塊が確認出来るが、沖縄島の類似種群の様に腸が三つ折り状(亀田・福田, 2017)にはならない。触角は小さく短く、基部に眼の黒色色素は認められない。



豊橋市嵩山蛇穴, 2016 年 9 月 12 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、豊橋市嵩山(すせ)町の石灰洞(蛇穴)の石灰岩壁のみに生息が知られる。

【世界および国内の分布】

蛇穴(豊橋市嵩山町)の固有種。なお、これまでホラアナゴマオカチグサとされてきたグループ全体としては、東北地方から与那国島にかけての分布が知られる(亀田・他, 2008)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生息地の環境は、豊橋市嵩山町の石灰洞窟(蛇穴)に限られる。蛇穴の奥の湿った石灰岩壁面に付着する。本種を含む同属種の大部分は、石灰洞窟奥の湿度が高く、常に湿った状態の石灰洞壁面に付着する。一方、ヤマモトゴマオカチグサやコシキゴマオカチグサは、海岸飛沫帯の積み重なった転石の下層などに生息し、大東諸島のウファグリゴマオカチグサは、一部の個体群が洞外の地表の隆起サンゴ石灰岩礫間に見られ、小笠原諸島に生息するキビオカチグサや複数の未記載種などの同属各種は地表性であるなど、種分化以外にも同属各種の生息環境選択の多様化が著しいグループである。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、豊橋市嵩山町の蛇穴で生息確認されたのみである。明確な減少傾向が確認されていないが、生息環境は石灰洞内のきわめて狭く局所的な場所であり、人の立ち入りなどに伴う環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される洞窟内の環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境への立ち入りを控え、洞窟内やその周辺環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

現時点の愛知県下では、蛇穴の個体群の存在のみが知られているが、近辺の石灰岩地の地下環境には同種あるいは近似種が存在する可能性もあると推測される。海浜に起源を有する共通祖先種が洞窟ごとに隔離され、それぞれの洞窟個体群間での遺伝的分化が著しくなったグループであることより、蛇穴の個体群以外にも、近辺の石灰洞窟や愛知県下の他の地域の個体群の存在が発見された場合は、本種と同様に重要であり、同一ランクと見なし保護する必要がある。

【引用文献】

- 亀田 勇一・福田 宏, 2017. ホラアナゴマオカチグサ種群, p.496. 沖縄島のホラアナゴマオカチグサ, pp.500-501. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
亀田 勇一・河北 篤・加藤 真, 2008. 「ホラアナゴマオカチグサ」は洞窟ごとに別種である, 日本貝類学会創立 80 周年記念大会研究発表要旨集(東京家政学院市ヶ谷キャンパス), p.13. 日本貝類学会, 東京.
増田 修, 2014. ホラアナゴマオカチグサ, p.58. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

【関連文献】

- 千葉 聡・和田慎一郎・森 英章, 2012. 小笠原諸島母島における陸産貝類の現況とその価値について, 小笠原研究年報, (35): 1-16.
亀田 勇一・福田 宏・黒住耐二, 2017. ウファグリゴマオカチグサ, pp.436-437. in: 沖縄県環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(動物編)ーレッドデータおきなわー, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.

(早瀬善正)

キバサナギ *Vertigo hirasei* Pilsbry**【選定理由】**

2017 年 10 月に行われた調査により、竹島（三河湾）において、愛知県下で初めて確認された（伊藤, 2018）。本州においては産出地が著しく少なく、生息域もきわめて狭い稀少種である。愛知県下では周囲約 680 m の小島である竹島の限られた海岸部にしか生息していないことから、高いランクに位置付けられた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現時点で知られる生息地が局所的であることから、絶滅の危険性のきわめて高い種と考えられる。

【形態】

殻長 1.5 mm、殻径 1.0 mm 程度の丸みの強い楕円形（蝸形）の微小種である。殻は薄く、濃茶褐色で縫合は浅く、殻表にはごく弱い成長線が見られるものの、ほぼ平滑で鈍い光沢を有する。臍孔は狭く窪む。成貝は、殻口がごく弱く反曲する。成貝の殻口内には 4 本の歯状突起が見られ、外唇の内方にはごく短い同長の 2 本（Upper-palatal tooth, Lower-palatal tooth）、内唇に明瞭な 1 本（parietal tooth）、軸唇に短く小さな 1 本（collumelar tooth）がそれぞれ配置する。軟体の頭足部の背面は淡黒色であるが、臍面にかけて淡くなる。

**【分布の概要】****【県内の分布】**

現時点では、愛知県蒲郡市の竹島（三河湾）の海浜部のみに分布が知られている（伊藤, 2018）。

【世界および国内の分布】

日本固有種と考えられる。北海道、本州、四国、九州、琉球列島にかけて広く分布する（上島, 2014）とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

竹島（三河湾）の海浜部の、海浜植物の根元やその周辺の落葉下の土壌中に生息する（伊藤, 2018）。食性については主に植物食で、分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物を食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、竹島（三河湾）の海浜部で生息報告されたのみである（伊藤, 2018）。しかし、三河湾内の海浜部が自然状態で残された環境の良い島嶼域には、まだ、本種が点在している場所が存在する可能性がある。竹島では、本種の生息範囲は限られているものの、生息場所には多数個体が確認されており（伊藤, 2018）、現状では当地個体群は維持されていると考えられる。愛知県下では、かつては三河湾の海岸部の広範囲に生息していた可能性が考えられるが、高度経済成長期の開発などによる海岸部の護岸や埋め立てが原因で、本種の存在に気付く前に、愛知県下の殆どの地域で絶滅した可能性も高いと考えられる。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、保護が必要な種である。全国的にも海岸部の開発や護岸などによる減少が指摘される種（上島, 2014）である。

【保全上の留意点】

竹島は、国の天然記念物に指定されており、環境自体は保護されている。現在、本種の生息が確認される場所の環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた海浜部の環境を改変しないことが最も重要である。本種個体群の保護の検討も重要である。

【特記事項】

愛知県下では、殻の形態の特徴が近似するヤマトキバサナギも確認されているが（558 頁を参照）、ヤマトキバサナギが山地に生息するのに対して、本種は海浜部であり、愛知県下の両種に関しては、この棲み分けが明確であるので識別が容易である。

【引用文献】

- 伊藤 颯真, 2018. 竹島（愛知県蒲郡市）に棲息するキバサナギガイ科貝類 2 種, かきつばた, (43): 28–29.
上島 励, 2014. キバサナギガイ, p.104. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. キバサナギガイ, p.820. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
和田太一・川淵千尋・為後智康, 2015. 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された稀少腹足類 3 種, Molluscan Diversity, 4(1–2): 37–49.

（早瀬善正）

ヤマトキバサナギ *Vertigo japonica* Pilsbry et Y. Hirase**【選定理由】**

2015 年 10 月に行われた調査により、岡崎市において、愛知県下で初めて 1 個体のみが確認された(川瀬・市原, 2016)。本州においても生息確認地がきわめて少ない稀少種である。愛知県下では現時点で岡崎市の限られた分布地にしか生息していないことから、高いランクの絶滅危惧種に位置付けられた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種である。そのため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現時点で知られる生息地が局地的であることから、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種と考えられる。

【形態】

殻長 1.9 mm、殻径 1.4 mm のやや長い楕円形(蛹形)の微小種である。殻は薄く、茶褐色で縫合はやや深く、殻表にはごく弱い成長線が見られ、ほぼ平滑で鈍い光沢を有する。臍孔は狭く隙間状。成貝は、殻口がごく弱く反曲する。成貝の殻口内には 4 本の歯状突起が見られ、外唇の内方には 2 本(Upper-palatal tooth, Lower-palatal tooth)見られ、上方は唇縁近くに位置し微突起状で、下方は奥に位置し上方よりも長い特徴、内唇に明瞭な 1 本(parietal tooth)、軸唇に短く小さな 1 本(collumelar tooth)がそれぞれ配置する。軟体の頭足部の背面は淡黒色であるが、臍面にかけて淡くなる。

**【分布の概要】****【県内の分布】**

現時点では、愛知県岡崎市〔額田地区〕保久(ほっきゅう)町の山林のみに分布が知られている(川瀬・市原, 2016)。

【世界および国内の分布】

日本固有種と考えられる。北海道、本州、四国、九州にかけて広く分布する(上島, 2014)とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

山地の雑木林で、林床にはシダ類や草本が繁茂する環境に生息する(川瀬・市原, 2016)。近くには僅かな水が流れのある環境とされる。食性については主に植物食で、分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物を食べて生活していると推測される。同所では複数のナガナタネ(587 頁を参照)が混生していたとされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、岡崎市の山林で 1 個体の生息報告がされたのみである(川瀬・市原, 2016)。しかし、東三河や奥三河の山間部にはごく稀産と思われるが、まだ、本種が点在している場所が存在する可能性がある。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されてはいないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、保護が必要な種である。全国的にも山林の開発や乾燥化による減少が指摘される種(上島, 2014)である。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の森林環境を維持することが重要である。

【特記事項】

愛知県下では、殻の形態の特徴が近似するキバサナギも確認されているが(557 頁を参照)、本種の方が若干、大形で、キバサナギが海浜部に生息するのに対して、本種は山地に生息しており、愛知県下の両種に関しては、この棲み分けが明確であるので識別が容易である。

【引用文献】

- 川瀬基弘・市原 俊, 2016. 愛知県初記録のヤマトキバサナギガイ, かきつばた, (41): 17-18.
上島 励, 2014. ヤマトキバサナギガイ, p.323. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヤマトキバサナギガイ, p.820. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.
伊藤颯真, 2018. 竹島(愛知県蒲郡市)に棲息するキバサナギガイ科貝類 2 種, かきつばた, (43): 28-29.
和田太一・川瀬千尋・為後智康, 2015. 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された稀少腹足類 3 種, Molluscan Diversity, 4(1-2): 37-49.

(早瀬善正)

ハチジョウヒメベッコウ *Yamatochlamys circumdata* (Pilsbry)

【選定理由】

愛知県下では、現時点で設楽町の生息記録があるのみである。生息密度が低く、分布域も著しく狭い稀少種である。愛知県下では、近年になり存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、生息地がきわめて局地的であることから、近年の激しい気候変動なども考慮した場合、絶滅の危険性の高い種と考えられる。また、近辺ではダム建設の計画もあり、建設に着手した場合の、本種の生息環境への影響が懸念される。

【形態】

殻長 1.5～2.0 mm、殻径 3.0～3.5 mm 程度の、螺塔がごく低くて円盤状に近く、つぶれた低円錐形状の微小種である。殻は薄く茶褐色で、幼層には成長脈と螺溝が交差し、明瞭な布目状の彫刻が認められる。体層部の上面は平滑である。殻底には、間隔をあけた、深く明瞭な螺溝が複数刻まれる。愛知県下での確認例が多いオオクラヒメベッコウは、殻の外形が近似する。オオクラヒメベッコウの幼層は若干、成長脈が粗く、1～2本の螺溝と交わり、畳目状の窪みがいくつか見られる場合もあるものの、光沢が強くほぼ平滑であり、明瞭な布目状彫刻にはならない。殻底にも明瞭で深い螺溝はなく、ほぼ平滑な特徴であるので、殻の特徴のみでも両種の識別は容易である。軟体部では、ハチジョウヒメベッコウは雄性器官に細長い付属肢を有するが、オオクラヒメベッコウは短い指状の付属肢の形状となる特徴により、両種は識別可能である。



北設楽郡設楽町，2008年6月24日，早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、設楽町（北設楽郡）1箇所のみの生息記録が知られる（早瀬，未発表記録）。

【世界および国内の分布】

日本固有種である。八丈島をタイプ産地とし、伊豆諸島に広く分布するが、栃木県（早瀬，未発表記録など）のほか、長野県（飯島，2018）、静岡県（静岡市；早瀬，未発表記録）、愛知県、宮崎県（西・西，2018）、に分布する。このほかに、群馬県や四国の記録も見られる（財団法人 自然環境研究センター，2010）。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、川沿い谷部の自然林環境である。川沿い斜面の林床に横たわる大きな朽木に付着する少数個体が確認された。本種は、他県においても、朽木や倒木に付着する個体の確認例が多い。食性については、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。微小かつ稀産種であるために、生態学的研究を行うことが困難であるため、寿命や繁殖期などはまだ解明されていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、もともとの生息範囲がきわめて狭く、生息個体数も著しく少ないものと推測する。したがって、減少傾向は殆ど生じないと思われるが、近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、生息環境が悪化しつつあることは事実である。愛知県下の個体群の存続が危ぶまれる。また、生息地となっている森林環境の開発行為などが行われれば、直ちに個体群の消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。ダム建設の予定される地域であり、注意が必要である。

【特記事項】

伊豆諸島のほか、本州、四国、九州に広く分布する種である。しかし、多くの地域において、本種は不連続分布をし、ごく狭い地域の限られた場所にしか生息していない。したがって、愛知県の本種個体群の存在は、生物地理の観点からも、きわめて重要であり、保護する必要がある。

【引用文献】

飯島邦昭，2018. 長野県産・淡水産貝類誌，160 pp. 自刊，下條村。

西 邦雄・西 浩孝，2018. 宮崎県のカタツムリ，160 pp. 自刊（黒潮文庫），宮崎。

財団法人 自然環境研究センター，2010. ハチジョウヒメベッコウ，p.920. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集，1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター，富士吉田。

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類，口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい，東京。

（早瀬善正）

サンエンマイマイ *Satsuma* sp. 1

【選定理由】

愛知県東部から静岡県西部にかけてのみに分布する、近年になって和名提唱された未記載種である。愛知県下では、新城市（旧鳳来町）に明確な分布記録がある程度の稀少種であり、生息密度が極度に低く、分布域もきわめて狭い。近年の異常気象に起因する夏季の高温による林床の乾燥化の進行、また、豪雨などによるリター層や土壌の流出などが大きな影響を及ぼし、本種も減少傾向にあることが予想される。また、分布域が、高速道路建設工事などの開発が多く行われる地域である事からも、環境省レッドリストにおいても絶滅が危惧される種であり、愛知県下においても、絶滅の危険性のきわめて高い種と考えられる。

【形態】

殻長 11.3～14.3 mm、殻径 14.7～17.1 mm 程度の丸みを帯びた低円錐形の小型種である。殻は多少厚く、殻表には淡黄褐色あるいは茶褐色の殻皮が覆い、微顆粒状隆起が認められる。臍孔は小さいが深く明瞭に開く。雄性器官の鞭状器は短く、本属の中では特徴的な形態を有しており、先端部の一方が瘤状、他方が鉤状に曲がる2分岐した形状である。



新城市鳳来町乗本, 1996年5月11日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）乗本のみの生息記録が知られる（早瀬・波部, 1993；早瀬・他, 2016）。

【世界および国内の分布】

日本固有種である。静岡県西部〔三ヶ日町只木（増田・波部, 1989）、引佐町・三岳山（早瀬・他, 2016）〕と愛知県東部のみに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本県における確認地は、山地斜面の、広葉樹林に接したスギ植林地である。林内のアオキ類など常緑低木の葉裏に付着する個体が確認された。1回の調査で、1個体の生貝を確認することが困難なほど稀少な種である。食性については植物食で、主に分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物を食べて生活していると推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、新城市の一部地域での生息が知られるのみである。一方、東三河に広く分布するのは、近似種のニヨリサンエンマイマイ（598頁を参照）の場合が殆どであり、多くの地域には本種が生息していないと思われる。最近になり、愛知県下にも存在する独立種であることが認識されたばかりの種であり、減少傾向が十分に確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。

【特記事項】

これまでは、西日本に広く生息するシメクチマイマイの一型とされていたが、シメクチマイマイの再検討（Kameda & Fukuda, 2015）により、愛知県や静岡県などでシメクチマイマイの一型とされていた個体群が全てシメクチマイマイとは別種である事が明確となった。この結果、生殖器形態で3区分される、1) 愛知県東部～静岡県西部の狭い地域にはサンエンマイマイ、2) サンエンマイマイの分布地をさらに広く同心円状に覆うようにニヨリサンエンマイマイ、3) 掛川市～焼津市～静岡市にかけてはシズオカマイマイ、が分布すると考えられている。

本種は、愛知県下においても、きわめて分布密度の低い種であり、生息地域の環境保全および個体群を保護する必要がある。

【参考文献】

- 早瀬善正, 2018. サンエンマイマイ, p.43. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドリスト 2018/補遺資料, 58 pp. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 東京.
早瀬善正・波部忠重, 1993. シメクチマイマイの生殖器の地方変異, ちりばたん, 24 (2): 36-38.
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016. 三岳山の貝類相, かきつばた, (41): 1-16.
Kameda, Y. & Fukuda, H., 2015. Redefinition of *Satsuma ferruginea* (Pilsbry, 1900) (Camaenidae), with description of a new cryptic species endemic to the coasts and islands of the central Seto Inland Sea, western Japan. Venus, 73(1-2): 15-40.
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸淡水産貝類相, 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82 + 3 color pls. + xiv pls.

【関連文献】

- 早瀬善正, 1999. 静岡県中部に生息するシメクチマイマイ, かきつばた, (25): 21-22.

(早瀬善正)

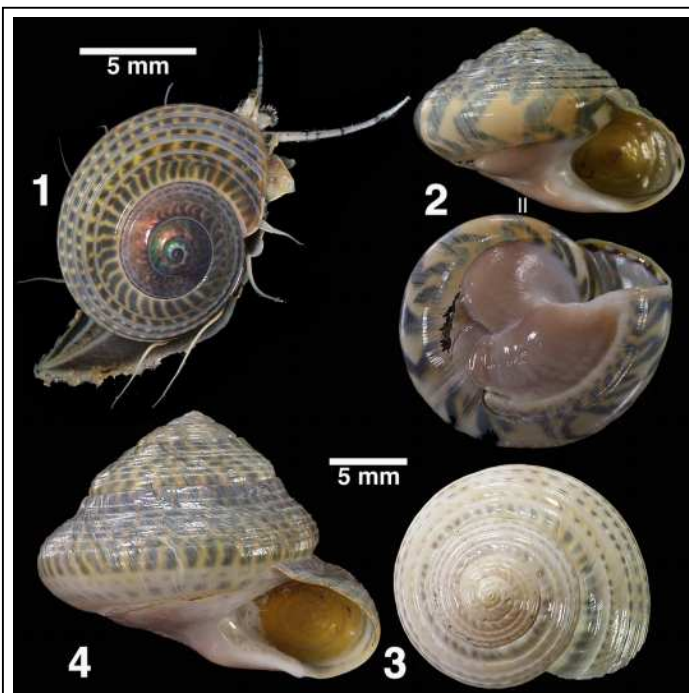
イボキサゴ *Umbonium moniliferum* (Lamarck)

【選定理由】

本種は、内湾奥の砂泥干潟にかつてはごく普通に多産した種で、伊勢湾、三河湾でも 1960 年代には広い範囲で多産した（愛知県科学教育センター、1967）。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているのが、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。また、汐川干潟のように広大な干潟が残っている場所でも生貝が見られなくなっており（藤岡・木村、2000）、1990 年代半ばから 2010 年前後までは生貝を全く確認出来なかった。2015 年頃から再び生貝が見られるようになり、三河湾の 3 ヶ所では数年間継続的に生貝を確認している。この回復傾向を受けて、前回のランク（CR）からランクダウンするべき種と評価された。

【形態】

殻径約 15 mm の低いそろばん玉型で、殻は厚く周辺は丸い。外洋の砂浜に生息するキサゴと酷似するが、殻が小さく、臍部の滑層が大きい点で区別できる。



1: 西尾市佐久島, 2017 年 6 月 24 日, 2, 3: 西尾市一色干潟, 2016 年 6 月 3 日, 4: 南知多町河和北側干潟, 2017 年 6 月 23 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内では近年生貝が確認されているが、個体数は少なく、往時の健全な個体群とは言えず、危機的状況は継続している。

【世界及び国内の分布】

分布域の大部分は日本周辺（東北地方から九州）であるが、韓国南部にも分布する（木村・山下、2012）。浜名湖、瀬戸内海中西部には健全な個体群が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように近年生貝が確認できるようになったが、生息場所は限定的で、分断されている。依然として危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, (10): 31-39.
木村昭一・山下博由, 2012. イボキサゴ, p. 17. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

（木村昭一）

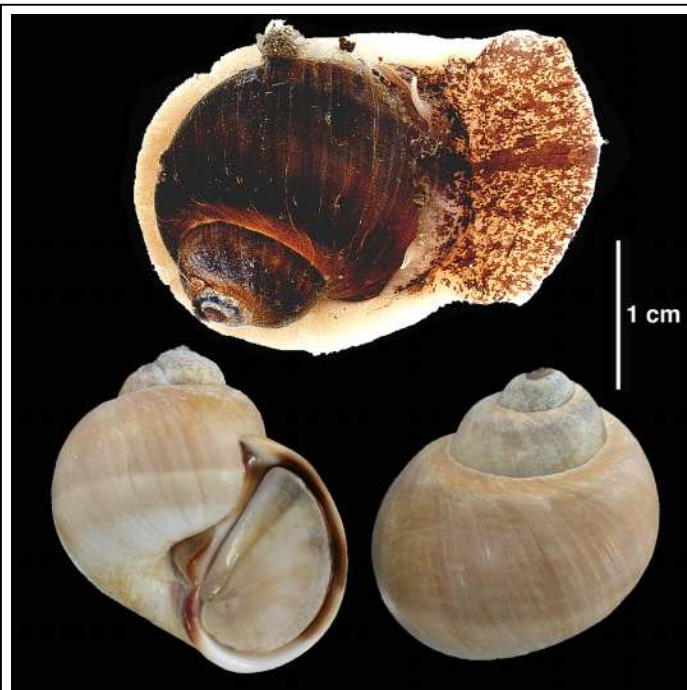
アダムスタマガイ *Cryptopnatica adamsiana* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の泥質干潟から潮下帯にすむ。県内では、干潟と共に内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は 1980–2000 年にかけて死殻は比較的多く採集されていた(中山, 1980: 木村, 1999) が、生貝は蒲郡市沖の潮下帯で小型の個体が数個体採集されただけであった。その後蒲郡市沖でも成貝が採集され(図示)、近年では三河湾の島嶼域の佐久島(早瀬・木村, 2020)、日間賀島(早瀬・他, 2019)の潮通しの良いアマモ場周辺の砂泥底より幼貝(生貝)が少数個体確認された。また、知多半島の伊勢湾側からも幼貝(生貝)が記録されていて(佐藤・他, 2019)、前回(CR)よりランクダウンするべき種と評価された。

【形態】

殻径約 20 mm の球形で、殻はやや厚い。蓋は石灰質で白色、蓋の溝は浅く狭い。



蒲郡市三河大島沖(ドレッジ水深 2–5 m), 2002 年 5 月 23 日,
木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内では近年生貝の採集が報告されているが、生息地、個体数共に非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種(黄海産の近似種 *Cryptopnatica huanghaiensis* は本種との区別が難しく分類学的な再検討が必要である)。房総・能登半島以南～九州まで分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、現在でも三河湾奥で比較的新しい死殻は採集できる。ただし、この死殻は他所から運ばれたアサリに混じっていた個体が採集されている可能性がある。いずれにしても、県内では近年生貝の採集例が著しく少なく、危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50 (1): 33–79.
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1–15.
木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25): 14–17. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2012. アダムスタマガイ, p. 57.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10–12. 名古屋貝類談話会.
佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相. かきつばた, (44): 20–30.

(木村昭一)

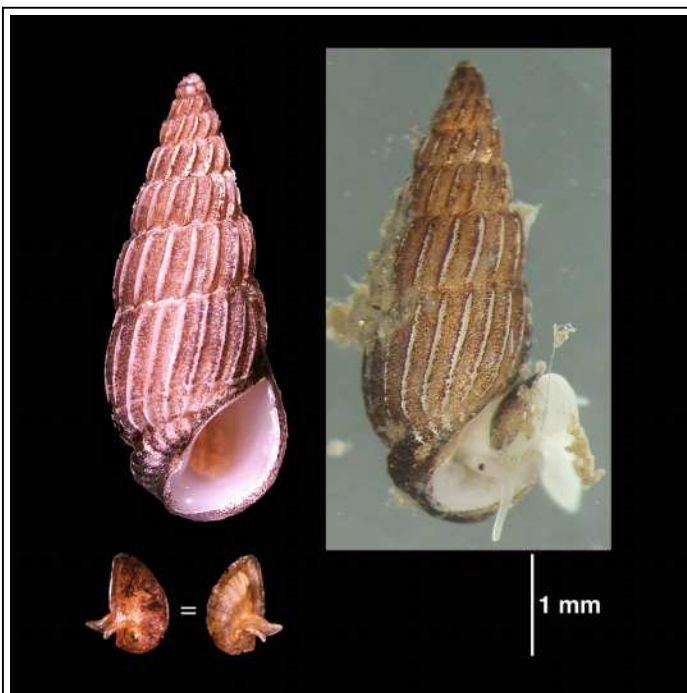
スジウネリチョウジガイ *Rissoina costulata* Dunker

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は、上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島の潮間帯や同島南沖水深 2–10 m の砂泥底より死殻は少ないながらも採集されたが、長い期間生貝は採集されなかった (木村, 1995, 1996)。近年、三河湾の島嶼域の潮通しの良い砂礫干潟の埋もれ石下面より生息が確認できるようになったが、生息域の面積は非常に小さく、佐久島 (早瀬・木村, 2020) 以外では個体数も少ない。生貝が採集されるようになったので、前回 (CR) よりランクダウンすべき種と評価された。

【形態】

殻長約 5 mm の微小で、やや細い塔型の殻を持つ。殻表の縦肋は緩曲する。



西尾市沖島, 2014 年 7 月 12 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では生貝が確認できない期間が長く続いたが、近年、沖島 (早瀬・他, 2015)、梶島 (早瀬・他, 2016)、佐久島 (早瀬・木村, 2020)、日間賀島 (早瀬・他, 2019) で生息が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本と朝鮮半島で記録されていて、国内では房総・男鹿半島から九州、南西諸島、小笠原諸島まで分布する (福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では生貝を採集できるようになったが、生息面積は小さく、個体数は多くないので、依然として危機的な生息状況といえる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. スジウネリチョウジガイ, p. 35. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23–30.
- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27–39.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33–79.
- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1–15.
- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16–27. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3–19. 全国高等学校水産教育研究会.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ハクボククビキレ *Truncatella* sp.

【選定理由】

本種は、早瀬・木村 (2020) で和名が新称された、未記載の可能性の高い種。ヤマトクビキレ *Truncatella pfeifferi* Martens (愛知県：絶滅危惧Ⅱ類) と近似するが、形態の項で記述するように、明確に区別される種である。また、生息環境と生態的な特徴も異なる。現在、佐久島の非常に狭い範囲に健全な個体群の生息が確認されている。【生息地の環境】の項に記したような生息環境自体が県内では著しく少なく、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。

【形態】

殻は大型の個体で殻長 10 mm に達する。殻口が肥厚するまで十分に成長すると、殻頂部が脱落し、螺塔は断裂状になり、殻の外形は円筒形になる。ヤマトクビキレより殻長も大きく、殻径が大きく太い特徴が見られ、確認された殆どの個体が白色で、赤みを帯びた個体の出現比率は極端に少なく、殻表は磨かれた様に平滑である。ヤマトクビキレの殻表の縦肋がなく平滑になる型 (ミガキクビキレ) に近似するが、前述の殻の特徴で区別できる。また、本種の胎殻の大きさは、ヤマトクビキレより大きい。

両種には、歯舌の形態にも明確な相違が認められた (早瀬・木村, 2020)。本種は、福田・他 (2017) が示したヤマトクビキレ (ミガキクビキレ) の範疇に収まる特徴ではある

が、佐久島産のヤマトクビキレとは大きさや各特徴などより識別できるので、これまでミガキクビキレ型とされていた個体のなかに紛れて見過ごされてきた別種の可能性もある。今後はミガキクビキレ型とされていた各地の個体を再検証し、本種の分類学的位置付けを明確にする必要がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

県下で佐久島の東側 (丹梨地区・丹梨海岸) の直線距離で約 40 m の範囲内の砂利浜の打上げ海藻堆積下に夥しい個体数 (1000 個体以上と思われる) が確認された。現時点では、上述の海岸のみで確認された種である。

【世界および国内の分布】

同上。これまでヤマトクビキレの種内変異のミガキクビキレ型とされていた個体のなかに紛れて見過ごされてきた可能性があり、今後はミガキクビキレ型とされていた各地の個体を再検証する必要がある。

【生息地の環境／生態的特性】

佐久島東側 (丹梨地区・丹梨海岸) の直線距離で約 40 m の範囲内の陸上植生 (草本植物が主体) までよく保全された砂利浜 (大きめの砂利が深く堆積し、間隙が多い) の打上げ海藻堆積下より生息が確認された。前日夜から続いた激しい雨があがった直後の状況に加え、大量に打上げ海藻やアマモの堆積した条件下での観察であったため、著しく高い活性状態で、地上近くまで這い出していたと考えられる (2017 年 6 月調査)。2016 年 6 月の調査では、早朝の降雨時に同所の砂利の下を調査したにもかかわらず、本種を全く確認できなかった。これらの事実より、本種は通常時には浜一面に堆積する砂利の奥底に潜み、生息を確認することが困難な種であると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域にはほとんど存在せず、減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

早瀬・木村 (2020) で、本種にハクボククビキレ (白墨首切れ) という和名が新称された。本種の殻は主に白く円筒状であり、白色 (時に橙色) のチョーク (白墨) 様の形状であることに由来する。

【引用文献】

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50 (1): 33-79.

福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科 (新生腹足類: クビキレガイ上科) の再検討に向けて. *Molluscan Diversity* 5(1-2): 33-77.

(木村昭一)



西尾市佐久島, 2017 年 6 月 25 日, 木村昭一採集

ヘソカドガイ *Paludinellassiminea japonica* (Pilsbry)

【選定理由】

過去に野島 (南知多町) に本種の生息記録が知られていたが (天野, 1966; 野々部・他, 1984)、現状は全く調査されておらず、この島での本種の現在の生息状況は不明である。近年、佐久島の調査において、島の 1 箇所のごく限られた範囲 (直線で約 40 m 区間) の海岸飛沫帯で、本種の生息が確認された (早瀬・木村, 2020)。これまでに三河湾内のいくつかの島や本土側海岸線を調査したが、本種は生息しておらず、愛知県下では、きわめて生息範囲が狭く、貴重な個体群であることが判明した。本種は 2016 年と 2017 年に行われた調査の際、佐久島 (三河湾) の 1 箇所でも 100 個体以上が確認された (早瀬・木村, 2020)。日本国内の飛沫帯には本種が広く分布するためと考えられるが、環境省レッドリスト 2019 ではランク外の種である。愛知県下では、近年になって野島以外での生息地が確認された種であるため、未調査の野島を含めて減少傾向は不明であるが、佐久島の生息地が局所的で、野島の面積も 0.03 km² しかなく、生息基盤がきわめて脆弱な種と考えられる。佐久島の生息地の個体群は現状健在であるものの、野島の個体群も含めて僅かな範囲の飛沫帯のみに分布する種であり、いつ、人的な環境改変行為により生息場所が消滅したり、近年の異常気象による個体群への影響があってもおかしくなく、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種に位置付けられる。

【形態】

殻長 5.3~6.6 mm、殻径 3.9~4.3 mm 程度の円錐形の小型種である。殻は、殻頂部が多少丈夫であるが、殻口部は薄く壊れ易い。殻表には目立つ彫刻はなく弱い成長脈が認められる程度のほぼ平滑であり、幼〜若個体では鈍い光沢が認められる。臍孔は狭く隙間状に小さく開き、周囲に強い角 (キール) が生じる。殻は茶褐色であるが、ごく稀に黄白色の個体も確認される。蓋はきわめて薄く、半透明黄白色の革質で少螺旋型である。軟体は淡い黒色で頭触角は先の尖る細くやや短い形状で、基部に小さな黒色の眼を有する。蹼面は灰白色である。雄性生殖器官の陰茎部は薄い灰〜白色で先端が短く 2 分岐し、上側が若干長い程度で、ほぼ同長である。

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、三河湾の野島 (天野, 1966; 野々部・他, 1984) と佐久島の潮間帯上部飛沫帯 (早瀬・木村, 2020) の 2 島に生息記録が知られる。

【世界および国内の分布】

韓国に分布が知られる (Fukuda & Mitoki, 1995; 権・他, 1993)。国内では、房総半島と能登半島以南の本州、四国、九州の海岸に広く分布するとされる (Fukuda & Mitoki, 1995; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。

【生息地の環境／生態的特性】

野島での生息環境は、未調査のため不明である。天野 (1966) は、「ハマヒサカキやモッコクの茂れる竹林の中にすむ」と記している。佐久島では、砂利浜の潮間帯最上部飛沫帯のハマエンドウやハマゴウの生える地表の小礫間に堆積する落葉などに付着する個体が確認された。本種は海岸環境に依存して生活する種であることから、本報告では便宜的に海産種に位置付けているが、実際には海域と陸域をつなぐ境界部の微環境にのみ生息し、どちらかといえば陸域側 (頻海陸地) に生息の主体を置く陸棲種である。したがって、陸産貝類に位置付けられる場合の方が多い。雌雄異体である。食性については植物食で、主に分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物のほか、打ち上げられた海藻を食べて生活していると推測される。本属の種はいずれも卵から稚貝が孵化する直達発生と考えられていることから (福田, 2017)、本種も同様と考えられる。同所の同一時期の個体には成貝と幼貝が混在する状況から推測して、本種の寿命は、複数年あると思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島 (三河湾) の砂利浜の飛沫帯で生息確認されたのみである。過去に生息記録のある野島での生息環境は、未調査のため不明である。他の三河湾の島には生息が確認出来ないことから、おそらく、この 2 島程度しか生息地がないと考えられる。最近、佐久島での存在が確認されたばかりの種であり、野島の状況が不明であることから、減少傾向が確認されてはいないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

本種の生息地の保全が最も重要である。本種は、飛沫帯環境の海浜植物が育つ環境のみに生息適地を有している。したがって、単に砂利浜海岸が残れば改変行為や開発が可能ということではなく、必ず陸上植生から海まで連続する環境を維持する必要があるため、注意が必要である。

【特記事項】

松岡 (2010) には、渥美半島での本種の記録があるが、現時点では、明確に本種と判断できない情報 (オオウスイロヘソカドガイの可能性も高い) であるため、ここでは本種の記録として扱わなかった。鳳来寺山自然科学博物館に所蔵される天野景従コレクションの愛知県の陸貝の標本ケース (No.3) には、野島産の本種 8 個体の標本があり、確認の結果、本種に間違いないことが判明した (早瀬, 2010)。

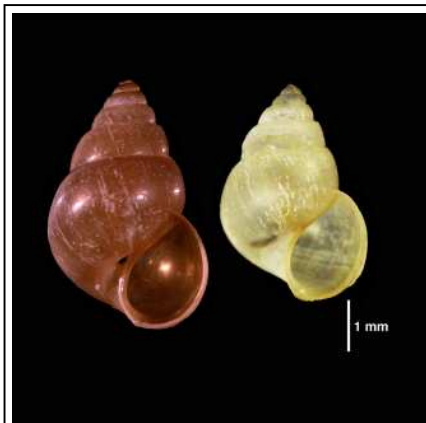
【引用文献】

- 天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所 (編), 研究紀要 第 4 集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.
福田 宏, 2017. ダイトウオカチグサ (ダイトウヘソカド), ミヤコオカチグサ, タマダスクオカチグサ (新称), ドナンオカチグサ, pp. 438-440. in: 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂 - 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
Fukuda, H. & Mitoki, T., 1995. A revision of the family Assimineidae (Mollusca: Gastropoda: Neotaenioglossa) stored in the Yamaguchi Museum part 1: subfamily Omphalotropidinae. Bulletin of the Yamaguchi Museum, (21): 1-20.
早瀬善正, 2010. 天野景従コレクションにみられる興味深い愛知県産陸産貝類標本, かきつばた, (35): 33-36.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50 (1): 33-79.
権 伍吉・朴 甲萬・李 俊相, 1993. 原色韓国貝類図鑑, 445pp. Academy Publishing Company, Seoul.
松岡敏二, 2010. ヘソカドガイ. 第 3 章 愛知の生物 第 4 節 愛知の貝類, p.269. in: 愛知県史編さん委員会 (編), 愛知県史 別編 自然, 246-285 pp. 愛知県, 名古屋.
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヘソカドガイ, p.784. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



西尾市佐久島, 2017 年 6 月 24 日, 早瀬善正採集

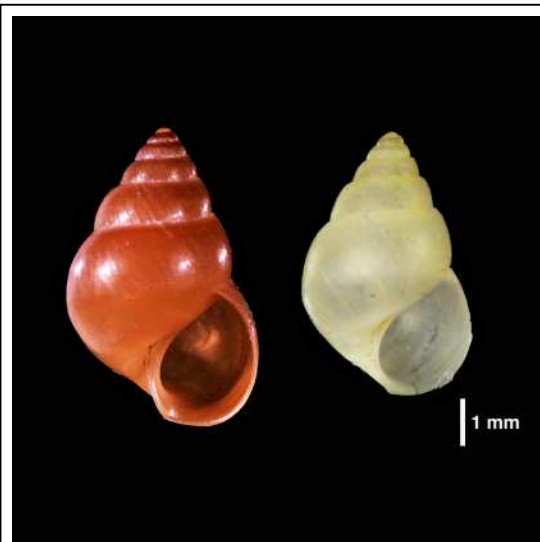
オオウスイロヘソカドガイ *Paludinellassiminea tanegashimae* (Pilsbry)

【選定理由】

2016 年と 2017 年に行われた調査の際、佐久島 (三河湾) の 2 箇所において、愛知県下で初めて確認された種である (早瀬・木村, 2020)。佐久島の調査においては、島の 2 箇所のごく限られた範囲 (属島の直線で 5 m に満たない区間および、佐久島東部の直線で約 40 m 区間) の海岸飛沫帯のみで多数 (佐久島東部では 100 個体以上) が確認された (早瀬・木村, 2020)。これまでに三河湾内のいくつかの島や本土側海岸線を調査したが、本種は生息しておらず、愛知県下では、きわめて生息範囲が狭く、貴重な個体群であることが判明した。日本国内の飛沫帯には本種が広く分布するためと考えられるが、環境省レッドリスト 2019 ではランク外の種である。愛知県下では、近年になって生息が確認された種であるため、これ以前の分布記録がなく減少傾向は不明であるが、佐久島の生息地が局所的であり、生息基盤がきわめて脆弱な種と考えられる。生息地の個体群は現状健在であるものの、僅かな範囲の飛沫帯のみに分布する種であり、いつ、人的な環境改変行為により生息場所が消滅したり、近年の異常気象による個体群への影響があってもおかしくなく、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種に位置付けられる。

【形態】

殻長 6.1~6.7 mm、殻径 4.5~4.7 mm 程度の円錐形の小型種である。殻は多少厚く、殻表には目立つ彫刻はなく、弱い成長脈が認められる程度でほぼ平滑であり、幼~若個体には鈍い光沢が認められる。臍孔は狭く隙間状で、周囲に弱い角を有する。殻は橙色を帯びた淡い茶褐色であるが、ごく稀に黄白色の個体も確認される。臍孔付近は白色となる。蓋はきわめて薄く、半透明黄白色の革質で少旋型である。軟体は淡い黒色で頭触角は先の尖る細くやや短い形状で、基部に小さな黒色の眼を有する。臍面は濃い灰色である。雄性生殖器官の陰茎部は淡黒色を帯び先端が 2 分岐し、上側が長く、下側は上側の 1/3 程度の長さの短い突起状である。



西尾市佐久島, 2017 年 6 月 24 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、三河湾の佐久島の潮間帯上部 (飛沫帯) に 2 箇所のみが生息記録が知られる (早瀬・木村, 2020)。

【世界および国内の分布】

国外での分布記録は知られていない。国内では、房総半島および能登半島以南の本州、四国、種子島・屋久島以北の九州の海岸に広く分布するとされる (Fukuda & Mitoki, 1995; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。

【生息地の環境／生態的特性】

佐久島では、礫浜や砂利浜の潮間帯最上部飛沫帯の小礫間に付着する個体が確認された。本種は海岸環境に依存して生活する種であることから、本報告では便宜的に海産種に位置付けているが、実際には海域と陸域をつなぐ境界部の微環境に生息し、どちらかといえば陸棲種である。したがって、陸産貝類に位置付けられる場合の方が多い。雌雄異体である。食性については植物食で、主に打ち上げられた海藻やそれらが分解された礫間の有機物を食べて生活していると推測される。本属の種はいずれも直達発生と考えられていることから (福田, 2017)、本種も同様と考えられる。同所の同一時期の個体に成貝と幼貝が混在する状況から推測して、本種の寿命は、複数年あると思われる。ヘソカドガイ (565 頁を参照) とは同じ海岸にも生息する場合が認められたが、混生帯があり厳密ではないものの、本種の方が多少海寄りの低位置に帯状分布する傾向が認められた。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島 (三河湾) の礫浜や砂利浜の飛沫帯で生息確認されたのみである。他の三河湾の島には生息が確認出来ないことから、松岡 (2010) の記録が本種でなければ、おそらく、愛知県下では、佐久島にしか生息地がないと考えられる。最近、佐久島での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが最も重要である。

【特記事項】

松岡 (2010) には、渥美半島でのヘソカドガイの記録があるが、オオウスイロヘソカドガイの可能性もあり再検証が必要である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2017. ダイトウオカチグサ (ダイトウヘソカド), ミヤコオカチグサ, タマダスクオカチグサ (新称), ドナンオカチグサ, pp. 438-440. in: 沖縄県環境部自然保護課 (編), 改訂 - 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第 3 版 (動物編) - レッドデータおきなわ, 712 pp. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- Fukuda, H. & Mitoki, T., 1995. A revision of the family Assimineidae (Mollusca: Gastropoda: Neotaenioglossa) stored in the Yamaguchi Museum part 1: subfamily Omphalotropidinae. Bulletin of the Yamaguchi Museum, (21): 1-20.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50 (1): 33-79.
- 松岡敏二, 2010. ヘソカドガイ. 第 3 章 愛知の生物 第 4 節 愛知の貝類, p.269. in: 愛知県史編さん委員会 (編), 愛知県史 別編 自然, 246-285 pp. 愛知県, 名古屋.
- 財団法人 自然環境研究センター, 2010. オオウスイロヘソカドガイ, p.785. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省 自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)

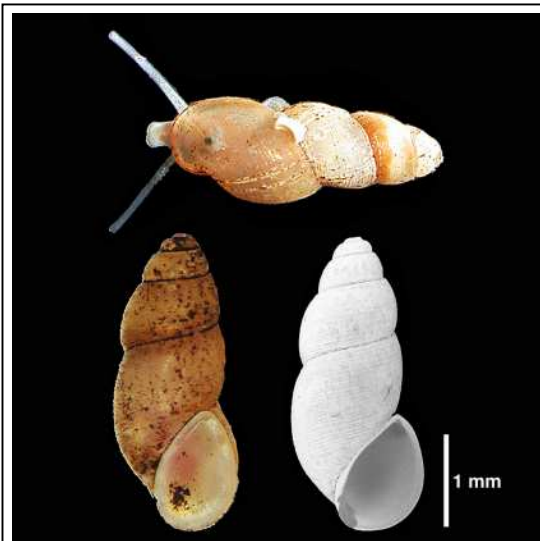
ゴマツボモドキ *Hyalia cf. bella* (A. Adams)

【選定理由】

2016 年 6 月に行われた調査の際、佐久島 (三河湾) で 6 個体の生貝が確認された (早瀬・木村, 2020)。その後の 2017 年 6 月に行われた同所の調査では発見されなかった。このほか、2017 年 3 月には、南知多町内海海岸で打ち上げられた死殻が確認されている (河合, 2018)。愛知県下では、これ以前の分布記録はない。生息密度がきわめて低い稀少種である。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現在、唯一生息が確認された三河湾では、局所分布で 10 個体にも満たない生息数であったことから、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種に位置付けられた。

【形態】

成貝の殻は、殻長 3.3~3.6 mm、殻径 1.4~1.5 mm 程度の太短い紡錘形に近い塔形の微小種である。殻は薄いがやや丈夫で、胎殻は平巻き状のため殻頂部は鈍い。幼層には数本の螺溝が見られる。幼層を除く各螺層には、細く繊細な螺肋を有する。殻底の螺肋は明瞭であるが、それ以外は不明瞭で一部平滑となる部分もある。生貝の殻は、薄い淡黄褐色の殻皮に覆われるが、死殻では白色半透明となる。成貝の殻口は、若干肥厚する。蓋は種子形で緩く巻く少旋型であり薄く、淡黄色半透明の革質である。軟体は白色で、頭触角は細長く小さな白い色素斑が多数確認される。吻は筒状で短く先端が左右に浅く分離し口球の薄紅色が透過される。腹足後端は円い。



西尾市佐久島, 2016 年 6 月 4 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、佐久島 (三河湾) の潮間帯より生貝の記録が知られる (早瀬・木村, 2020)。死殻は、伊勢湾 (南知多町内海海岸) から確認されている (河合, 2018)。

【世界および国内の分布】

宮城県万石浦~九州、朝鮮半島に分布するとされる (福田, 2014)。*Rissoa bella* A. Adams, 1853 は、フィリピンより産出した個体により記載されたが、日本産のゴマツボモドキと同種であるのか不明瞭であるとして *bella* に同定することは避ける、と判断されている (福田, 2014)。フィリピン~オーストラリアの熱帯インド・太平洋に広く分布するとされるが日本産と同一種かは不明 (福田, 2012) とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、佐久島 (三河湾) の潮間帯の転石地である。埋没石の下の変色する面に付着する個体が確認された。生息空間として海水の循環があり酸素の流通がある付着場所以外、黒色の硫化物からなる還元的環境に生息する。特殊生息環境に棲む種 (福田, 2012) と考えられている。同所にはヒュキスズメが複数付着していたので、同じ生息環境を好む種と思われる。三河湾・伊勢湾共に伊良湖岬の外海に面した湾口や蒲郡市や豊橋市に面した湾奥部からは確認されていないことから、湾口~湾奥の中間位置に本種の生息に適した環境が形成されるものと推測される。すなわち、外洋水の影響の強い内湾の還元的環境が、本種の生息に適した環境ではないかと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島 (三河湾) で生息確認されたのみであるが、伊勢湾 (南知多町内海海岸) でも打ち上げられた死殻が確認されている (河合, 2018) ことより、伊勢湾・三河湾共に広く本種が分布している可能性がある。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、生息地周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる危険性がある。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが最も重要である。

【特記事項】

愛知県の本種個体群は、文献に示される本種の殻の標準的な大きさよりも小形に偏する傾向がある。愛知県下では、本種に類似する殻形態を示し、さらに小形の種が伊良湖岬の潮間帯の埋もれ石の下より確認されている (早瀬・木村, 未発表)。本種については別種と考えられるが、同様に愛知県下では稀産であり、近縁種と考えられることから、ゴマツボモドキと同等のランクに見なされる。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ゴマツボモドキ (シリオレミジンナ), p.37. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
 福田 宏, 2014. ゴマツボモドキ (シリオレミジンナ), p.292. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
 河合秀高, 2018. 南知多町内海海岸において打ち上げ採集で得られた貝類, かきつばた, (43): 30-34.

【関連文献】

- 長谷川和範・福田 宏, 2017. ワカウラツボ科, pp.124-126 (pls. 80-82), 811-812. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑, 1375pp. 東海大学出版部, 平塚.

(早瀬善正)

サザナミツボ *Nozeva ziczac* (Fukuda et Ekawa)

【選定理由】

本種は近年記載された微小種で内湾奥に生息することが知られているが、詳しい生息場所については明らかにされていなかった (Fukuda & Ekawa, 1997)。県内でも、軟体部の残った個体が三河湾、伊勢湾の 4 カ所から採集されていた (田中・河合, 1998 ; 河合, 1998)。従って、県内に生息していることは確実であったが、本種の生貝は 2008 年に庄内川河口の泥質干潟上の石の下面より初めて採集された (木村, 2010)。その後の調査では、知多半島河和 (三河湾) で 1 個体のみ生貝が確認された (早瀬・木村, 2017)。これ以外では軟体部が残った殻が稀に採集されることはあるが、生貝の採集記録はない。絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 2 mm。微小な卵型の殻で、殻質は光沢のあるガラス質で半透明。殻表にジグザグの螺溝を多数めぐらすことが特徴で、和名の由来でもある。



名古屋市庄内川河口, 2008 年 7 月 13 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、打ち上げられた個体が県内数カ所で採集された。生貝は現在までに庄内川河口域、河和 (早瀬・木村, 2017) で見つかった。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では陸奥湾・男鹿半島～南西諸島 (奄美大島、沖縄島) に分布する (福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は内湾奥の河口域の特殊な生息環境に生息し、生息場所自体が護岸工事や埋め立てなどで容易に改変もしくは消失する可能性が高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯付近の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、護岸工事については干潟側を一切改変しない工法などを用いて施工する必要がある。工事の過程で重機を干潟側に一時的に乗り入れることだけでも大きな影響を及ぼすと考えられる。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和 (三河湾) の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47 (1-4): 28-42.
Fukuda & Ekawa, 1997. Description and anatomy of a new species of the Elachisinidae (Caenogastropoda: Risssooidea) from Japan. The Yuriyagai, Journal of the Malacozoological Association of Yamaguchi, 5 (1/2): 69-88.
福田 宏, 2012. サザナミツボ, p. 40. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. かきつばた, (24): 16-17. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2010. サザナミツボ, p. 189. in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
田中利雄・河合秀高, 1998. 愛知県渥美半島西ノ浜の打上げ貝. 豊橋市自然史博物館研究報告, 8: 33-36.

(木村昭一)

ウミコハクガイ *Teinostoma lucidum* A. Adams**【選定理由】**

2016 年 7 月と 2017 年 5 月に行われた伊良湖岬での調査のほか、2017 年 6 月に行われた佐久島 (三河湾) での調査の際、少数の生貝が確認された (早瀬・木村, 2020)。愛知県下では、これ以前の生息記録はない。河合 (2018) は、2017 年 3 月に、南知多町内海海岸 (伊勢湾) で死殻を確認している。生息密度が低い稀少種である。伊勢湾・三河湾に広く分布する可能性もあるが、極度に生息密度が低いことから、愛知県では、環境省レッドリスト 2019 より高いランクに位置付けられた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現在、生息が確認された三河湾では、局所分布で僅かな生息数であったことから、愛知県下では、絶滅の危険性のきわめて高い種に位置付けられた。

【形態】

最大でも殻長 1.3 mm、殻径 3.1 mm 程度の僅かに盛り上がった円盤状の微小種である。殻はやや厚く、3 層ほど巻くが、体層が殻頂付近の螺旋部にまで覆いかぶさるため、縫合はなく、無色半透明の殻を透過して見える縫合が偽縫合となる。殻底では、軸唇部分が臍孔部分へ拡がり滑層隆起となるため、臍孔は完全に塞がれる。偽縫合部分と臍孔付近のみ乳白色となる。殻表は繊細な成長脈が認められる程度で、ほぼ平滑であり、光沢が強い。軟体はごく淡い淡紅色で、短い筒状の吻の先端部は濃い赤色である。頭触角は細長く、頭部の右側には櫛状に分岐した鰓が認められるほか、殻口付近から細く短い外套触角も確認される。腹足前端部は左右に拡がり幅広く、後端は円い。



西尾市佐久島, 2016 年 6 月 4 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】**【県内の分布】**

現時点では、伊良湖岬と佐久島 (三河湾) の潮間帯より生貝の記録が知られる (早瀬・木村, 2020)。死殻は、伊勢湾 (南知多町内海海岸) で確認されている (河合, 2018)。

【世界および国内の分布】

大槌湾・能登半島～九州、朝鮮半島に分布するとされ、千葉県館山市沖ノ島、山口県長門市只の浜、長崎県松浦市御厨町西木場免などで生貝が確認されている (福田, 2012, 2014)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、伊良湖岬と佐久島 (三河湾) の潮間帯の転石地である。砂地の埋没石の下に赤褐色に変色する面に付着する個体が確認された。生息空間として海水の循環があり酸素の流通がある場所に生息する。特殊生息環境に棲む種 (福田, 2012) と考えられている。同所にはツメナリミヤコドリが複数付着していたので、同じ生息環境を好む種と思われる。三河湾・伊勢湾共に湾奥部からは確認されていない。三河湾では、湾口から湾奥にかけての中間位置と湾口の位置に生息確認されていることから、外洋水の影響の強い内湾湾口部に本種の生息に適した環境が形成されるものと推測される。硫化物で黒くなるような還元層では、本種は確認されていない。潮間帯の平坦な礫地の還元環境に見られる貝類群集の一員とされる (福田, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、伊良湖岬と佐久島 (三河湾) で生息確認されるが、伊勢湾 (南知多町内海海岸) でも打ち上げられた死殻が確認されている (河合, 2018) ことより、伊勢湾・三河湾共に広く本種が分布している可能性がある。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、生息地周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる危険性がある。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが最も重要である。

【特記事項】

三河湾湾口部 (伊良湖岬と佐久島属島の筒島周辺) は、現時点での本種の生息が明らかとなっている場所であり、この地域の環境および個体群を保護する必要がある。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ウミコハクガイ, p.43. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.
福田 宏, 2014. ウミコハクガイ, p.299. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50 (1): 33-79.
河合秀高, 2018. 南知多町内海海岸において打ち上げ採集で得られた貝類, かきつばた, (43): 30-34.

【関連文献】

- 長谷川和範, 2017. イソコハクガイ科, pp.135-138 (pls. 91-94), 818-820. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑, 1375pp. 東海大学出版部, 平塚.

(早瀬善正)

オリイレボラ *Scalptia scalariformis* (Lamarck)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、本種も知多湾、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では生貝が採集されていなかった(中山, 1980; 木村, 1996; 木村, 2000)。2006, 2007年に知多半島先端部の数地点でドレッジ調査の結果、少数の生貝が採集された。その後、2008年に名古屋港沖から生貝が採集された(右図; 木村, 2010)。

しかし、本種の生息範囲は狭く、個体数も少ないので、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 25 mm の紡錘型の貝で、殻は厚く平滑。殻表には強い縦肋がある。蓋はない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内の潮下帯では、近年生貝が少数しか採集されない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド洋、太平洋、国内では房総半島～九州西岸まで分布する(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため、本種の生息場所、個体数ともに減少し、ほとんど生貝が採集されない。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010 (木村, 2010) では、本種と正しく同定された名古屋港沖産生貝標本(図下段)が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015 (木村 加筆 川瀬, 2015) では“千葉県房総半島”産とされるフトネオリイレボラ *Scalptia crosseii* (Semper) (本当にこの標本が日本産個体であれば日本新記録である)が図示されているので、訂正する。

【引用文献】

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.

木村昭一, 2010. オリイレボラ, p. 205.in : レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.

木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. オリイレボラ, p. 418. in : レッドデータブックなごや 2015 動物編, 504pp. 名古屋市環境局.

木村昭一・福田 宏, 2012. オリイレボラ, p. 74.in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

中山 清, 1980. 知多湾南部海域の貝類相. かきつばた, (6): 10-12. 名古屋貝類談話会.

(木村昭一)



名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深 6 m), 2008 年 10 月 10 日, 木村昭一採集

ウネムシロ *Reticunassa hiradoensis* (Pilsbry)**【選定理由】**

今までにアオモリムシロ *Reticunassa hypolia* (Pilsbry)、クロスジムシロ *Reticunassa fratercula* (Dunker)、ウネムシロは、全て同一種の亜種関係に位置付けられるなど分類が混乱していた(肥後・後藤, 1993; Higo *et al.*, 2001; 土屋, 2000)。しかし、花木・他(2014)による各種のミトコンドリア DNA による解析の結果では、3 種は独立種である。

県内で本種は、渥美半島三河湾側の海水が淡水と入り交じった状態で砂泥底干潟に滲み出ている特殊な生息環境の 3 ヶ所で生息が確認されている。その付近の干潟には全く生息せず、特殊な環境に限定的に生息している。従って、本種の生息面積は著しく小さく、生息基盤は非常に脆弱である。幸い生息地の 2 ヶ所では健全な個体群が確認されているが、絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 20 mm で螺塔は高く螺層は膨れ、縫合はくびれる。殻はやや厚く、畦状の縦肋がある。螺肋は、細いが明瞭で殻表面は布目状。殻口は丸く、内唇側には滑層が発達しない。アオモリムシロやアツミムシロ *Reticunassa* sp. とやや近似するが、本種は大型で、螺塔がやや高く、殻の色彩が黄・橙・黒の単色もしくは灰褐色下地に白い色帯が入る 4 タイプが出現し(木村・木村, 2013)、色彩での区別も明確である。

【分布の概要】**【県内の分布】**

上述したように県内では 3 地点しか生息地が確認されていない。幸いそのうち 2 ヶ所では健全な個体群が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島北部、中国大陸北部、国内では北海道～九州に分布する(木村・福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。腐肉食性である。また、飼育下での観察では卵嚢を産むことなく稚貝が産まれたので、卵胎生である可能性が高い(木村, 未発表資料)。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟を保全し、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【特記事項】

本種の生息状況は三重県側の伊勢湾でも危機的生息状況で近年では鳥羽市で生貝が 1 個体採集されたに過ぎない(木村, 未発表資料)。葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にリンクされている。

【引用文献】

花木勇太・香取祥人・林 誠司・木村昭一, 2014. ミトコンドリア DNA によるクロスジムシロ種群の予察的系統解析. *Venus* 72(1-4): 148.

葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

木村昭一・福田 宏, 2012. ウネムシロ, p. 67. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一・木村妙子, 2013. オリイレヨフバイ科. in: 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典(著) 干潟ベントスフィールド図鑑, pp. 33, 145-145. 日本国際湿地保全連合, 東京.

土屋光太郎, 2000. ムシロガイ科. in: 奥谷喬司(編) 日本近海産貝類図鑑, pp. 218-224. 東海大学出版, 東京.

(木村昭一)



田原市伊川津干潟, 2007 年 6 月 2 日, 木村昭一採集

アツミムシロ *Reticunassa* sp.

【選定理由】

今までにアオモリムシロ *Reticunassa hypolia* (Pilsbry)、クロスジムシロ *Reticunassa fratercula* (Dunker)、ウネムシロは、全て同一種の亜種関係に位置付けられるなど分類が混乱していた(肥後・後藤, 1993; Higo *et al.*, 2001; 土屋, 2000)。しかし、花木・他(2014)による各種のミトコンドリア DNA による解析の結果では、3 種は独立種である。また、花木・他(2014)によると本種はアオモリムシロとの種内変異の可能性も示唆されたが、以下に示すように 1) 中間型が存在せず、明らかに形態的に区別されること、2) 本種には著しい性的二型があること、3) 生息環境が特殊で大きく異なること、等から別種として扱う。

県内で本種は、渥美半島三河湾側の海水が淡水と入り交じった状態で砂泥底干潟に滲み出ている特殊な生息環境の 1ヶ所で生息が確認されている。その付近の干潟には全く生息せず、特殊な環境に限定的に生息している。従って、本種の生息面積は著しく小さく生息基盤は非常に脆弱である。幸い生息地では健全な個体群が確認されているが、絶滅の可能性が非常に高い種であると評価された。

【形態】

殻長は雌個体で約 10 mm、雄個体で約 5 mm と殻の大きさが著しく異なり性的二型が明らかである(図右)。螺塔は高く螺層は膨れ、縫合はくびれる。

殻はやや厚く、弱い縦肋があるが、螺肋は弱く殻表面はなめらか。殻口は丸く、内唇側には滑層が発達しない。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内では 1 地点しか生息地が確認されていない。生息地では幸い健全な個体群が認められた。

【世界及び国内の分布】

未同定種なので不明。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

【選定理由】の項参照。

【保全上の留意点】

内湾干潟から潮下帯の生息環境を保全する。干潟を保全し、水質の富栄養化を防止することが必要である。

【特記事項】

本種は木村(2012)で唯一の生息地がある渥美半島にちなんで和名が新称された。

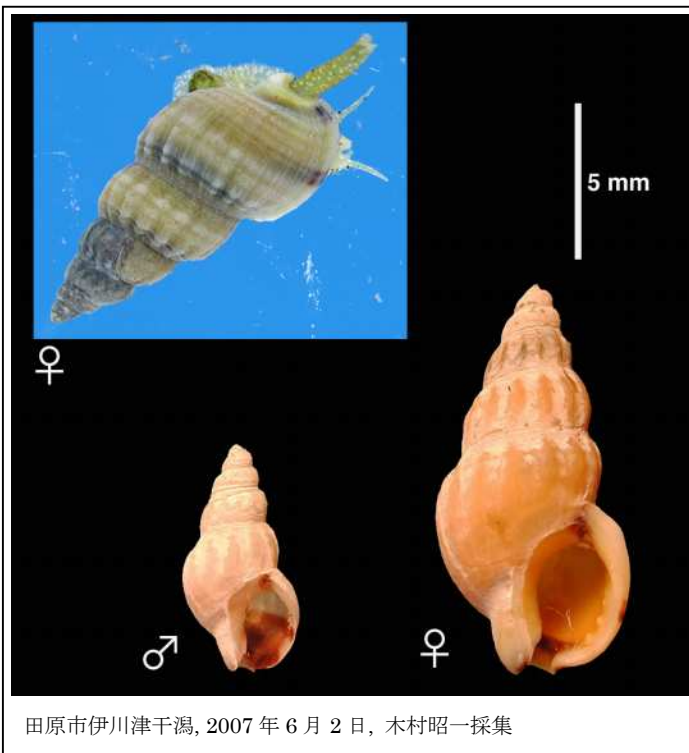
【引用文献】

花木勇太・香取祥人・林 誠司・木村昭一, 2014. ミトコンドリア DNA によるクロスジムシロ種群の予察的系統解析. *Venus* 72 (1-4): 148.

木村昭一, 2012. アツミムシロ, p. 67. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

土屋光太郎, 2000. ムシロガイ科. in: 奥谷喬司(編). 日本近海産貝類図鑑. pp.218-224. 東海大学出版, 東京.

(木村昭一)



ミカワイシン *Tomura* sp.

【選定理由】

三河湾の前島では1個体、梶島では2個体、佐久島では2個体、生貝が確認された。きわめて生息密度の低い稀産種である。同属の2記載種(ヒメシマイシン *Tomura himeshima*、ヤシマイシン *Tomura yashima*)は、生息域の狭さや生息環境の脆弱性などにより(山下, 2014; 福田, 2014)、環境省レッドリスト 2019 では絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に指定されており、本種も同等の評価をすべきと考える。現在知られる三河湾内の生息地は、きわめて狭く局所的であり、仮に生息地付近の僅かな範囲での開発や水質などの環境悪化があった場合は、その地の個体群全体が直ちに大きな影響を受けると考えられる。したがって、きわめて絶滅の危険性が高い種に位置付けられた。

【形態】

愛知県内の個体は、前島(殻長 0.6 mm、殻径 1.1 mm)、梶島(殻長 0.7、0.8 mm、殻径 1.2、1.2 mm)、佐久島(殻長 0.7、0.7 mm、殻径 1.1、1.2 mm)の各、殻の大きさを示す微小種である。螺塔が低く平巻き状で縫合は深く、周縁は円く、臍孔はやや広く深い。殻質はきわめて薄く、色は白色半透明である。殻表はきわめて薄い半透明の殻皮で覆われ、斑点状に茶褐色の付着物が認められる。電子顕微鏡下の観察では、殻口付近の体層に不規則できわめて弱い螺肋状殻皮が認められる。蓋は革質の多旋型を示す。軟体は白色で頭触角は長く、吻はやや長く、吻の内部は淡黄色である。吻の先端と腹足の前後端は深く2分岐する。右体側の殻口付近より短い外套触角と時々鰓が出るのが認められる。腹足の蹼面の方前寄りの中央部には、円形状の浅いくぼみが認められる。軟体の特徴は、カクメイ科に共通の特徴を示している。



1, 2: 西尾市東幡豆町(前島), 2013年8月21日, 3, 4: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、現在、三河湾内の小島である前島(早瀬・他, 2015)と梶島(早瀬・他, 2016)のほか、佐久島の一地域(早瀬・木村, 2020)の潮間帯下部のみに生息が確認されている。ただし、環境の良い三河湾内の他の島嶼域にも点在する可能性はあると思われる。

【世界および国内の分布】

本科には3属が知られ、同科の別種は、南東オーストラリア、北米フロリダ、地中海、フェロー諸島に分布が知られる(Fukuda & Yamashita, 1997)。本種の近似種であるヒメシマイシンは、瀬戸内海西部の大分県東国東郡姫島村みつけ海岸(タイプ産地)のみから知られる(山下, 2012)。本種も日本固有種と考えられ、現時点での分布は三河湾のみ。

【生息地の環境／生態的特性】

潮間帯下部の埋没転石の裏側(埋没面)に付着する。埋没面は黒い硫化物で覆われ、その周囲が還元層となる。本科の種は、健全な内湾域の埋没転石下などに形成される還元的環境に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、三河湾内の前島、梶島、佐久島の潮間帯で、ごく少数個体が確認されている。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺で環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

現在、前島、梶島、佐久島の3島に生息が知られる。当該地域において、本種の保護と本種が生息する環境の保全が重要。本種の生息する微小生息環境(マイクロハビタット)の維持が特に重要である。

【特記事項】

本種は、三河湾固有の未記載種と考えられる。分類学上においても、重要なグループ(異鰓亜綱の共通祖先に近い)に位置することからも貴重な種である。なお、レッドリストあいち(2015)で情報不足としたイシン属の一種(*Tomura* sp.)は、本種である。本種の和名は、早瀬・木村(2020)により提唱された。瀬戸内海に分布するヒメシマイシンは、歯舌や殻の形状が同様であるが、本種は、より小形で螺肋状の殻皮が認められる特徴において異なり、分布の連続性もないため、別種に位置付けられた(早瀬・木村, 2020)。

【引用文献】

- 福田 宏, 2014. ヤシマイシン, p.77. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.
- 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりぼたん, 45 (3): 105-122.
- 山下博由, 2012. ヒメシマイシン, p.79. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 山下博由, 2014. ヒメシマイシン, p.76. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

【関連文献】

- 福田 宏, 2012. ヤシマイシン, p.79. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- Fukuda, H., Asami, T., Yamasita, H., Sato, M., Hori, S. & Nakamura, Y., 2000. Marine molluscan and brachiopod fauna of Tanoura, Nagashima Island, Kaminoseki-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan. The Yuriyagai, 7 (2): 115-196.
- Fukuda, H. & Yamashita, H., 1997. Two new species of the family Corniostridae (Gastropoda: Heterobranchia: Valvatoidea) from the Seto Inland Sea, western Japan. The Yuriyagai, 5 (1-2): 1-16.
- 大貫貴清・早瀬善正, 2016. 貝類, pp.194-231. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幡豆の海と人びと, 口絵 14 + xvii + 362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.
- Ponder, W. F., 1990. The anatomy and relationships of a marine Valvatoidean (Gastropoda: Heterobranchia). Journal of Molluscan Studies, 56: 533-555.

(早瀬善正)

ヤシマイシン近似種 *Tomura cf. yashima* Fukuda et Yamashita

【選定理由】

2016 年 6 月に行われた調査の際、佐久島 (三河湾) で 1 個体の生貝が確認されたのみである (早瀬・木村, 2020)。その後の 2017 年 6 月に行われた同所の調査では発見されなかった。愛知県下では、これ以前の分布記録はない。生息範囲がきわめて狭く、生息密度のきわめて低い稀少種である。同属の 2 記載種 (ヒメシマイシン *Tomura himeshima*、ヤシマイシン *Tomura yashima*) は生息域の狭さや生息環境の脆弱性などにより、環境省レッドリスト 2019 では、絶滅危惧 I 類に指定されており、本種も同等の評価をすべきと考える。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、現在、唯一生息が確認された佐久島 (三河湾) では、局所分布で僅かな生息数であったことから、仮に生息地付近の僅かな範囲での開発や水質などの環境悪化があった際には、その地の個体群全体が直ちに大きな影響を受ける可能性が考えられる。したがって、愛知県下においても、きわめて絶滅の危険性が高い種に位置付けられる。

【形態】

佐久島の個体は、殻長 0.8 mm、殻径 1.5 mm の微小種である。螺塔が低く平巻き状で縫合は浅く、周縁は円く、臍孔は殻径の 1/3 程度の幅で比較的広く深く周囲に角 (キール) を有し、殻質は薄く、色は白色半透明である。殻表は、きわめて薄い淡黄褐色半透明の殻皮で覆われる。電子顕微鏡下の観察では、きわめて繊細な成長線と螺条が認められる。蓋は革質で円形、多旋型を示す。軟体は白色で頭触角は長く、吻はやや長く、吻の内部 (口球) は黒褐色である。吻の先端と腹足の前後端は深く 2 分岐する。右体側の殻口付近より細長い外套触角と時々鰓が出るのが認められる。三河湾には同属の近似種であるミカワイシン (573 頁を参照) も生息するが (早瀬・木村, 2020)、殻の特徴が本種とは大きく異なり、2 分岐した腹足後端および外套触角においては、本種の方がより長く、口球の色彩も異なる特徴により、生体の観察においては、三河湾におけるこれら 2 種は、容易に識別される。



西尾市佐久島, 2017 年 6 月 24 日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、現在、佐久島 (三河湾) の潮間帯下部のみに生息が確認されている (早瀬・木村, 2020)。伊勢湾側では本科カクメイ属のヤマトカクメイ (722 頁を参照) が確認されているが (佐藤・他, 2019)、現時点ではイシン属の種は全く確認されていない。

【世界および国内の分布】

本科には 3 属が知られ、同科の別種は、南東オーストラリア、北米フロリダ、地中海、フェロー諸島に分布が知られる (Fukuda & Yamashita, 1997)。本種の近似種であるヤシマイシンは、瀬戸内海西部の山口県熊毛郡上関町八島古浦 (タイプ産地) のみから知られる (福田, 2012)。近似した個体は、山口県上関町四代田ノ浦、田辺湾、因島、秋穂湾、大分県中津、石垣島等でも確認されている (福田, 2012, 2014)。

【生息地の環境／生態的特性】

佐久島の潮間帯下部において、岩礁・転石地の砂泥底に埋没した 50 cm 程度の大きさの石の裏側 (埋没面) に本種が付着していた。埋没面は酸化鉄によると思われる茶褐色となり、海綿動物門、カンザシゴカイ科多毛類の棲管、コケムシ類、群体ホヤ類などの多くの付着生物も見られた (早瀬・木村, 2020)。ヤシマイシンおよびその近似種は、螺旋状に巻く饅頭型の卵嚢を産み付けベリジャー幼生として孵化する (Fukuda & Yamashita, 1997; Fukuda et al., 2000)。特殊生息環境に棲む種とされ、本種群が特異的に見られる転石下の還元環境は脆弱で海岸の開発や環境破壊によって損なわれやすい (福田, 2012)。

【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、三河湾内の佐久島潮間帯で、1 個体が確認されているに過ぎない。三河湾で確認されている同属の近似種であるミカワイシン (573 頁を参照) は、湾口近くの佐久島から湾奥の複数の島に点在する一方、本種は、ミカワイシンに比べて湾口の環境を生息適地とし、三河湾内においては、ミカワイシンよりも分布域が狭く、個体群の大きさもさらに小さい可能性が推測される。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺で環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

愛知県下では、佐久島のみに生息が知られる。当該地域において、本種の保護と本種が生息する環境の保全が重要である。本種の生息する微生息環境 (マイクロハビタット) の維持が特に重要である。

【特記事項】

地域ごとに別種の可能性も示唆されており (福田, 2012)、本種は未記載種の可能性があり、三河湾の固有種かもしれない。分類学上においても、重要なグループ (異鰓亜綱の共通祖先に近い) に位置することからも貴重な存在である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ヤシマイシン, p.79. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 福田 宏, 2014. ヤシマイシン, p.77. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.
 Fukuda, H., Asami, T., Yamashita, H., Sato, M., Hori, S. & Nakamura, Y., 2000. Marine molluscan and brachiopod fauna of Tanoura, Nagashima Island, Kamino-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan. The Yuriyagai, 7 (2): 115-196.
 Fukuda, H. & Yamashita, H., 1997. Two new species of the family Cornirostridae (Gastropoda: Heterobranchia: Valvatoidea) from the Seto Inland Sea, western Japan. The Yuriyagai, 5 (1-2): 1-16.
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相, ちりばたん, 50 (1): 33-79.
 佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸 (伊勢湾) の貝類相, かきつばた, (44): 20-30.

【関連文献】

- 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録, ちりばたん, 45 (3): 105-122.
 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.
 Ponder, W. F., 1990. The anatomy and relationships of a marine Valvatoidean (Gastropoda: Heterobranchia). Journal of Molluscan Studies, 56: 533-555.
 山下博由, 2012. ヒメシマイシン, p.79. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
 山下博由, 2014. ヒメシマイシン, p.76. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

ムラクモキジビキガイ *Japanacteon nipponensis* (Yamakawa)

【選定理由】

愛知県内で本種の生息(生貝)を示した文献記録は近年の1報告のみである。これまでに愛知県内で生貝か死殻か不明の分布記録はいくつか見られるものの、明確な生貝の記録はなく、近年でも生貝の確認がきわめて稀である状況より愛知県内では稀産であるか減少傾向を示していると考えられる。全国的にも減少傾向が認められる種であり、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

【形態】

殻長 9.1 mm、殻径 4.8 mm 程度の丸みを帯びた紡錘形の小型種である。殻はきわめて薄く、体層には細い黒色の横縞模様が明瞭であり、縫合付近には黒色の雲状斑の模様が特徴的である。軟体は黒色で頭部には頭楯が見られる。

【分布の概要】

【県内の分布】

生貝の記録は、西尾市東幡豆町(三河湾)の干潟環境より1個体のみ知られる(早瀬・他, 2011)。その後、同所では複数の幼貝が確認された(早瀬, 未発表)ほか、一色干潟(西尾市)でも生貝が確認されている(木村昭一私信, 掲載図)。これ以前にも三河湾より分布記録は見られたが(中島, 1996)、明確な生貝の記録ではなく、過去の本県レッドデータブックでは評価対象種に扱われなかった。

【世界および国内の分布】

朝鮮半島、日本国内では、陸奥湾～九州に分布するとされる(福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での生貝の確認環境は、三河湾の内湾砂泥底である。主に内湾潮間帯下部の砂泥底で確認される。浜名湖では、干潮時の干潟にできたタイドプールの砂泥上に匍匐する姿が目撃された。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、生貝が発見されることがきわめて稀である。東幡豆町での生貝の確認状況は、大潮時に干出した干潟の砂泥を篩にかけて発見された。当地は潮干狩り場となっている遠浅の干潟であり、周辺にはアマモ場も広がっている。全国的に減少傾向にあるものの、個体群の復元のきざしもあるとされる(早瀬・他, 2011)。本種の減少には、高度経済成長期の水質悪化や干潟環境の減少が起因していると推測される。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される地域の環境を維持することが重要である。特にアマモ場などの他の貝類にとっても重要な生息環境を保全する事が重要である。

【特記事項】

近似種のアサグモキジビキガイは、本種と生息環境が異なり、より外海に開けた湾内の潮下帯砂質底に生息する別種である(石川, 2012)。これまでは、両種が混同され、すべてムラクモキジビキガイとされていた。愛知県内においても両種の存在に注意が必要である。

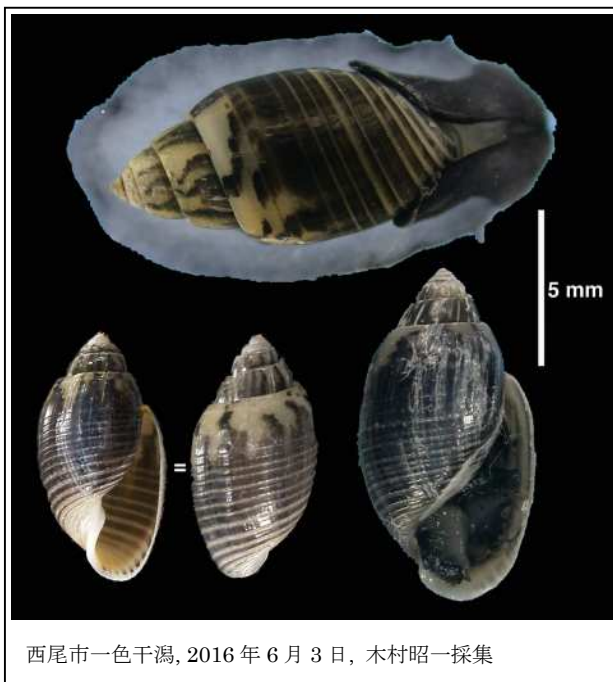
【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. ムラクモキジビキガイ, p.80. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相, 東海大学海洋研究所研究報告, (32): 11-33.
石川 裕, 2012. ムラクモキジビキガイやオオシノミガイと混同されていた貝, まいご, (19): 6-7.
中島徳男, 1996. 三河湾・遠州灘産海産貝類目録, 87 pp. 自刊.

【関連文献】

- 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(早瀬善正)



西尾市一色干潟, 2016年6月3日, 木村昭一採集

オカミミガイ *Ellobium chinense* (Pfeiffer)

【選定理由】

本種は内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内に分布する。県内ではヨシ原湿地が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。現在、健全な個体群は汐川干潟(図1)、矢作川河口域(図3)でのみ保存されている。近年堤防改修工事で生息地が消失することが多く、生息基盤は脆弱であり、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 35 mm で日本産オカミミガイ科としては最大種。殻は卵形で、殻表は褐色の殻皮で覆われる。県内でも場所により殻の大きさに差異がある。庄内川河口の個体群は大型(図4)、矢作川河口の個体群は小型(図3)である。老成個体は著しく殻口が肥厚し、殻皮だけではなく殻表の彫刻も失われている(図2)。



1, 2 (老成個体)：豊橋市汐川干潟, 1988 年 5 月 1 日, 3: 西尾市矢作川河口, 2009 年 7 月 15 日, 4: 名古屋市庄内川河口, 2016 年 4 月 7 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)では3カ所で生息を確認し、その後新たに2カ所で生息を確認した(木村, 1999)。しかし、汐川干潟以外では生息確認個体数がそれぞれ5個体以下で、絶滅が危惧される。2002年に渥美半島三河湾流入河川河口部で新たに生息地を確認したが、個体数は非常に少なかった(木村・木村, 2002)。2001年の調査で矢作川河口域に1カ所新たに生息地を確認し、その後の継続調査で健全な個体群の存在が確認された(木村, 2012b)。また名古屋市庄内川河口の非常に狭い範囲で少数個体が採集され、名古屋市としては70年ぶりに本種の生息が確認された(木村, 2010)。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陆。国内では東京湾(絶滅)、三浦半島(絶滅)、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、玄界灘、伊万里湾、有明海、八代海に分布する(木村, 2012a; 木村, 未発表資料)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地内の、朽ち木や落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が著しく減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と連続する上部の陸上植生を保全する。

【特記事項】

千葉県(2000)では絶滅生物にランクされている。

【引用文献】

- 木村昭一, 1999. 佐奈川河口域観察会報告. かきつばた, (25): 14-17. 名古屋貝類談話会.
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
木村昭一・木村妙子, 2002. 新堀川河口塩性湿地の貝類相. かきつばた, (28): 13-14. 名古屋貝類談話会.
木村昭一, 2010. オカミミガイ, p. 193. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.
木村昭一, 2012a. オカミミガイ, p. 95. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
木村昭一, 2012b. 矢作川ヨシ原塩性湿地の貝類相. 三河生物, (3): 1-8, 2pls.
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

(木村昭一)

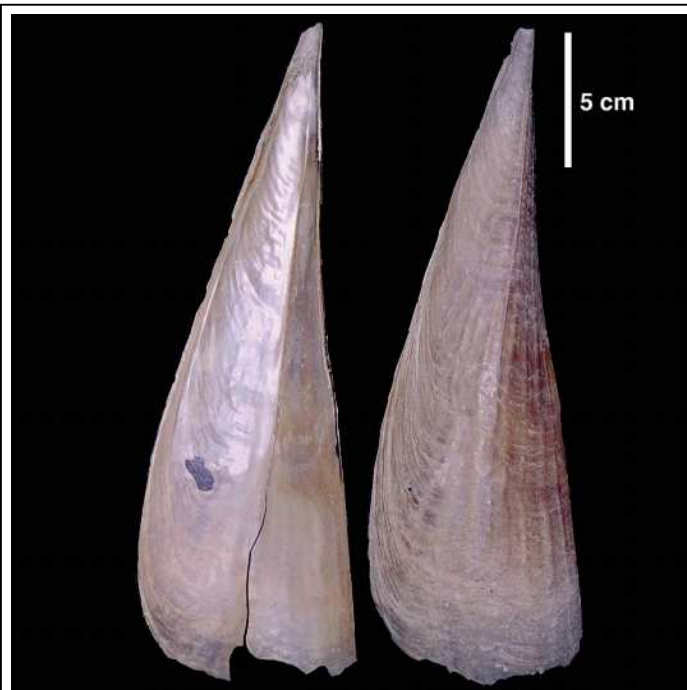
ハボウキ *Pinna attenuata* Reeve

【選定理由】

本種は、外洋に面した内湾の潮通しの良い潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に突き刺さるように深く埋没し、後端だけを出してすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種はかつて三河湾湾口部、伊勢湾知多半島周辺に生息していたようであるが(日間賀島漁協聞き取り調査；原田一夫氏私信)、近年内湾域では死殻さえ採集されていない。渥美半島太平洋岸では死後間もない死殻が少数ではあるが海浜に打ち上げられて採集されているので、渥美外海の浅海には生息海域が存在する可能性が高い。前回(CR)よりランクダウンするべき種と評価された。

【形態】

殻長 30 cm を越える大型種。細長い三角形の殻で、茶褐色から黒褐色。殻はやや厚いが脆い。



篠島沖, 1962 年 7 月, 原田一夫採集

【分布の概要】

【県内の分布】

近年、内湾域では生息が確認されていない。渥美外海の浅海には生息海域が存在する可能性がある。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸、東南アジア、国内では房総・男鹿半島～九州まで分布する(山下・他, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少していると考えられる。内湾域では大型種にもかかわらず死殻さえ採集されないの、危機的生息状況である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

山下博由・久保弘文・木村昭一, 2012. ハボウキ, p. 115. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

イシカゲガイ *Keenocardium buellowi* (Rolle)

【選定理由】

本種は、本州から九州に分布するとされている (松隈, 2017)。福岡県内では玄界灘でのみ記録されている (高橋・岡本, 1969) が、確認者は平松達男と特記されており、当時から普通種ではないことが想像できる。瀬戸内海 (稲葉, 1982)、伊勢湾 (松本, 1979) から分布記録がある。本種は稲葉 (1982) が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる。

県下では主として伊勢湾湾口部の水深 10–30 m で操業されるトロール漁業で採集されることが多かったが、2000 年以降生貝はほとんど見られず、成貝の殻 (図 1) は大型で目立つ存在であるにもかかわらず、死殻もほとんど確認されない。2011–2015 年に行われた勢水丸 (三重大学生物資源学部) によるドレッジ調査で伊勢湾湾口部において殻長 10 mm 以下の幼貝 (図 2) が複数個体採集されたので、現在も伊勢湾湾口部には本種の個体群が残されていると考えられる。生息水深帯がやや深いのでモニタリングが難しいが、絶滅の危険性が非常に高い種と評価された。



1: 伊勢湾湾口部 (小型底引き網水深 10 m), 1993 年 10 月, 2: (幼貝) 伊勢湾湾口部 (勢水丸ドレッジ水深 20 m), 2014 年 12 月, 木村昭一採集

【形態】

本種は殻長 40 mm とされる (松隈, 2017) が、伊勢湾湾口部で確認される大型個体の殻長は 70 mm に達する。殻は前後に細長い卵形で、膨らみは強い。殻質は同科のトリガイに比較するとやや厚いが、非常にもろい。殻全面に放射状の肋が約 30 本発達し、強い円形の肋 (成長停止線) も強い。

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾湾口部から渥美半島沖 (渥美外海) の水深 10–30 m でかつては大型個体の生貝 (図 1) が採集されていたが、現在は稀に死殻は採集されているが、生貝はほとんど採集されない。勢水丸のドレッジ調査では近年も伊勢湾湾口部から生貝 (幼貝; 図 2) が確認されている。

【世界および国内の分布】

本属は、全て北方系の種で構成され、最も近似するエゾイシカゲガイ *Keenocardium californiense* (Deshayes) は、オホーツク海から鹿島灘に分布するとされているが、本種は本州から九州に分布する (松隈, 2017)。伊勢湾での生息は確認されているが、瀬戸内海での現在の生息状況は不明。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は水深 10–100 m の細砂底に生息するとされているが (松隈, 2017)、瀬戸内海では潮下帯から水深 60 m に生息すると記録されている (稲葉, 1982)。県下では主に伊勢湾湾口部から渥美半島沖 (渥美外海) の水深 10–30 m の砂泥底より生息が確認されていたが、近年生貝はほとんど採集されない。また、近年伊勢湾内では死殻もほとんど採集されない。2015 年の勢水丸によるドレッジ調査で幼貝が採集された海域は、潮通しがよい貝殻混じりの砂泥底で、多様な貝類の生息が確認できた (木村, 未発表資料)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域では著しく減少しているので、減少の要因と考えられる。また本種は冷水性種なので、温暖化、黒潮の大蛇行による海水温の上昇も減少要因となる可能性がある。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、瀬戸内海、伊勢湾の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。近似種のエゾイシカゲガイは、食用種「いしがきがい」として近年岩手県で養殖され、流通量が増加している。

【引用文献】

稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.
松隈明彦, 2017. イシカゲガイ. in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 578, 1239. 東海大学出版部, 平塚.
高橋五郎・岡本正豊, 1969. 福岡県産貝類目録. 154pp.

【関連文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報). かきつばた, (26): 18–20.

(木村昭一)

サビシラトリ *Limecola contabulata* (Deshayes)

【選定理由】

本種は、内湾の奥部や河口部の砂泥干潟に生息する。県内では干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は 1995 年に矢作川河口域で比較的多くの個体の生息が確認されたが、2001 年の調査では死殻も稀であった。もともと伊勢湾の愛知県側、三河湾での記録は多くないが、近年明らかに本種の生息地と個体数が減少している。本種は内湾奥、河口部汽水域の砂泥底に生息場所が限られる。深く埋もれて生息し、死亡個体もそのまま底質に埋もれているためモニタリングの難しい種である。新しい死殻の採集される海域も限られており、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 70 mm で殻は楕円形で、ニッコウガイ科としては膨らみがやや強い。殻はやや薄く、白色、生きている時には殻表縁辺部は薄い殻皮に覆われる。水管は殻長の倍以上に延長し非常に長い。



田原市汐川干潟, 2012 年 6 月 8 日, 木村妙子採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。過去に生息が確認され、近年も生貝が確認されている場所は、庄内川河口域 (木村, 2004)、矢作川河口域、汐川干潟 (藤岡・木村, 2000) で、各生息地の個体数は非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、ロシア、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道オホーツク沿岸～九州まで分布する (山下, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。近年死殻さえ少なくなった。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

葉山しおさい博物館 (2001) では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の 1998 年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.
- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
- 木村昭一, 2004. サビシラトリ, p.284 in: レッドデータブックなごや 2004 動物編, 368pp. 名古屋市環境局.
- 山下博由, 2012. サビシラトリ, p.122 in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

アリソガイ *Mactra antiquata* (Spengler)

【選定理由】

本種はやや外洋に面した潮下帯の細砂底に生息する。県内では内湾域から湾口部にかけての潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾湾口部から渥美外海で底引き網によって普通に採集されていた（愛知県科学教育センター，1967）が、長い期間、伊良湖岬から渥美半島外海側で打ち上げられた古い死殻が少数採集される事はあったものの、生貝は採集されなかった。近年渥美外海の浅海域で操業する底引き網に合弁の死殻が採集されるようになり、三重県側の伊勢湾湾口部から伊勢湾ほどではないが回復傾向が確認された。前回（CR）よりランクダウンすべき種と評価された。



渥美半島赤羽沖(小型底引き網水深10 m), 1984年4月23日,
鈴木秋男採集

【形態】

殻長約12 cmと大成し、殻は亜三角形でやや膨らむ。殻は薄く、殻頂部は淡紫色で他の部分は白色。

【分布の概要】

【県内の分布】

現在生息が確認できない。しかし、非常に新しい死殻が渥美外海で比較的多く採集されるようになった。近年明らかな回復傾向が認められる。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、東南アジア、国内では房総・男鹿半島～九州に分布する（福田，2012）。伊勢湾湾口部～伊勢湾の三重県側では台風後などに大型の生貝が打ち上げられたり、冬の季節風で合弁の死殻が普通に打ち上げられたり、明らかな回復傾向が認められる（木村，未発表データ）。和田・他（1996）で“三河湾”大淀周辺がかつての多産地としてあげられているが、伊勢湾（三重県側）の誤り。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。特に本種は水質汚濁に弱い種とされている（和田・他，1996）。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種の和名の「ありそ」は通常「荒磯」を示し、「岩石が多く荒波の打ち寄せる海岸」という意味であるが、本種の生息環境を表すものではない（岡本・奥谷，1997）。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター，1967. 愛知の動物. 222pp.
福田 宏，2012. アリソガイ, p. 139. in: 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会，秦野.
岡本正豊・奥谷喬司，1997. 貝の和名. 相模貝類同好会. 95pp.+X iii.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏，1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

（木村昭一）

フスマガイ *Clementia papyracea* (Gmelin)

【選定理由】

本種は、湾口部から外洋に面した海岸の潮下帯から水深約 100 m までの砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも激減している。1999 年からの 3 回 (30 地点以上) におよぶ知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部でのドレッジによる調査では、死殻も採集されなかった (木村, 2000; 木村, 未発表資料)。

2000 年代までは渥美外海の水深 50 m 以深で操業する底引き網漁で生貝が稀に混獲されていたが、近年渥美外海からも死殻さえほとんど採集されない。このような生息状況から絶滅の可能性が非常に高い種であり、前回 (VU) よりランクアップするべき種と評価された。和田ら (1996) では危険とランクされている。

【形態】

殻長約 8 cm で、殻質はやや薄く白色、生時殻表は薄い淡褐色の殻皮で覆われる。膨らみが強い。殻頂部は高くなり、成長脈は強く波打つ。



上段：南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10–20 m, 1994 年 10 月 3 日, 下段：名古屋市名古屋港沖(コアサンプラー水深 15 m), 2009 年 5 月 30 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少し、内湾域では生貝が採集されない。2009 年には名古屋港沖からも死殻が採集された。殻皮が残されており、現生個体であると判断されるが、古い死殻で生息を証明する試料とは言えない。また近年、外洋域の個体群も確認できない状態が続いている。英虞湾 (三重県) の潮下帯では近年も生貝が確認されている (木村, 未発表資料)。

【世界及び国内の分布】

日本、東南アジア。国内では北海道以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。近年内湾域では生息が確認できない。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

南西諸島以南に分布するカミブスマ *Clementia papyracea* Gray (国：準絶滅危惧) とは形態的に近似し、分類学的な再検討が必要で、分子系統解析が望まれる (久保, 2012)。

【引用文献】

- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18–20.
久保弘文, 2012. カミブスマ, p. 147. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)